インフィニットストラトス　改変物語

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトス　改変物語

【Ｎコード】
Ｎ３４２６Ｗ

【作者名】
ケン

【あらすじ】
これは、少年、織斑一夏が、幸せをつかみ、守るべき者のために戦う物語。

プロローグ

これは、ある少年の日常生活の一部始終。

「なあ、見ろよ。またあいつやってるぜ」
「うわ、本当だ。」
「あいつ、勉強ができるからって授業は全部寝るし、マンガは読むわ、ゲームはするわ。」
「ほんとだよな～」

ある教室で一人の少年が誰とも話さず一人さみしく問題を解いていた。
その問題をよく見ると小学生では到底できないような問題であった。
しかし、少年はスラスラと解いていた。
休憩中であるにもかかわらずその少年の所に誰も行こうとしなかった。

これが少年、織斑一夏の日常。

プロローグ（後書き）

はじめまして、作者のケンです。始まりました。改変物語。作者も最初は読み、専門でしたが、書きたいなあと思って、構想を考えまくりました。　　初心者なので改行などでおかしくなりますが、できるだけなくしていきますので暖かい目でお願いします。更新はできれば毎日と考えていますが、出来ない日もあるので、その時は次にまわしたいとおもいますのでお願いします。

では、お楽しみ下さい！

第1話　動き出す運命

「ここはどこだ？」
そこは、子供たちの楽しそうな声が
まったく聞こえないなんとも寂しい公園だった。

「う～ん、ここ懐かしいっていう感情は
あるんだけど、きたことあったっけ？」

ひとまず一夏は、その場にいるのも何なので
その公園を散策してみることにした。
すると一人の女の子がしゃがんでいるのが見えた。

「どうしたの？」
一切こちらには、反応しなかった。
不審に思い、肩にふれると、

「あれ、手がすり抜けた？」
なんと、すり抜けてしまった。驚いて何回もふれようとするが
結果は同じだった。
すると・・・・

「どうしたの？　なんで泣いてるの？」
「あなたには、関係ないでしょ！　ほっといてよ！」
「関係なくないよ、泣いている女の子をほっとける程、
ばかじゃないよ。ねえ、遊ぼうよ！」
半ば無理やり手をつないで遊具のほうへいってしまった。
それからというもの、女の子は最初のほうこそ嫌な顔をしていたが、
次第に笑顔に変わっていった。

「ハハッ、楽しいね！」
「うん！」
「ねえ、君の名前なんて言うの？」と少年が聞くと、
「私の名前はねえ、××××って言うの」

ピピピピピピピピピ～～～～～
「ん？　夢か」
一夏は枕もとにあった目覚ましを止めると、時間を確認した。

「んんーー、朝の5時か、そろそろ起きていつものやるか」
学生がおきるのには、早いと言える時間に起きると
服を着替えて、筋トレを始めた。

３０分後～～
「ふう、終わった。さて、朝ごはん作るかな。」
「では、次のニュースです。先週男で初めてＩＳを
動かした織斑一夏君のことで・・・・」
「は～何で俺がＩＳ何かを動かすかね～」
それは、まだ寒い日が続く日だった。

「あ～何で一番近い高校を選んだのに何で電車で
４駅も乗らなきゃ何ね～んだよ」
一夏は今、自身が受けようとしている藍越学園へと向かっていた。
「つっても、ここさえ卒業すれば就職率は高いし、それに学費も安いし。
まあ、特待生ではいればどこも一緒か」
実はこの少年頭脳がある人物と同等かそれ以上と
騒がれている所望、天才と言われる部類だった。
「お！着いた、着いた」
受験票を持ち会場へと入っていった。

「迷ってしまった」
まさかの十五歳で迷子になってしまった。
「たっく～広いんだよ。たかが入試試験だろ？
別にこんな広い所でしなくても」
会場が多目的ホールだった為、広い構造となっていたのだった
「お！あの人に聞くか。あの～すみませ～ん」
「ん？受験生？向こうの部屋で着替えてね。もう時間がないから」
「は？」
カンニング対策か？と思い何も言わずに部屋に入るとそこには
あるものが置かれていた。
「ＩＳじゃん」
そこには膝を折り曲げて置かれているＩＳだった。
「天才とか言われてるけど俺もＩＳは知らねえしな～」
目の前のＩＳを全て知っている訳ではないようだ。
「これは確か打鉄だっけ？。は～いいな～俺も女に生まれたかった。
俺も触ったら動かせるとか？」
そう思いＩＳに触れた瞬間・・・

「！？」
頭の中に膨大な数の情報が流れ込んできた。
「まさか！動くのか？」
〈〈貴方は誰？〉〉
「俺は一夏だ」
〈〈そう。さあ、乗って〉〉
言われるがままにＩＳを装着すると先ほどよりも
多い情報が流れ込んできた。
「ちょっと！誰よ！ここは立ち入り禁止・・・うそ！
男がＩＳを起動している！」

この瞬間、少年の運命が動き出した

第1話　動き出す運命（後書き）

ふう、肩が痛いケンです。皆さんいかがでしたでしょうか。
まだまだ、ですが、頑張っていきますのでお願いします。

第2話　ＩＳ学園

ＩＳ学園　一年一組教室内～
「はーい、皆さん揃ってますね～、じゃあＨＲをはじめま～す。
私は副担任の山田麻耶です。
皆さん一年間よろしくおねがいしますね～～」
「「「・・・・・・」」」
「じゃ、じゃあ自己紹介からいきましょうか」
｛はあ、何でＩＳを動かせたのかね～
しかもよりによってあいつのいる場所とは。
本当に俺はあの人から離れられねえのかよ｝
「・・・・・君、織斑君っ」
「は？」
「あ、あの怒ってるかな？怒ってるよね？ごめんね、
ごめんね。自己紹介今、「あ」から始まって
「お」の織斑くんなんだ。だから自己紹介してくれるかな？」
「わかりました。俺の名前は織斑一夏。知ってるだろ？
後はめんどいから自分で調べろ」
バシィィィィン
「痛！何すんだ！」
「貴様は自己紹介すらできんのか？」
「俺の勝手だろうが」
そこには一夏の唯一の肉親、織斑千冬が立っていた。
「年上には敬語を使え」
「てめえに使う気はない」
すると、千冬は申し訳なさそうな顔をして教壇にたった。
「すまない、山田君、クラスのことをまかせてしまって」
「いえいえ、それも私の役目ですから」と言い顔を赤くしてしまった。

「諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事は
貴様らを優能なＩＳ操縦者に育てることだ。いいか！
私の言っている事が理解できなくても頭に入れろ！いいな！」
まるで、ソニックブームのような叫び声がクラスに響いた。
「キャーーーーーーーーーーー」
「本物の千冬様よ！」
「私、昔からファンでした！」
「私は、北九州からきました！」
などなど男の一夏からすればどうでもいいような声があがった。
「はあ、毎年、毎年私のクラスにばかばかり集めているのか？」
「キャー、お姉さまもっと罵って～～」
「うるさい、黙れ、授業を始めるぞ！」
と言うとまるで何事もなかったかのようにシーーーーンとなった。

キーンコーン、カーンコーン
一時間目終了後～～～
はあ、一夏は本日何度目かの溜息をした。
「俺は、客寄せパンダか」
そう思わざるを得ないほどの女子生徒が廊下にズラッーーーと並んでいた。
興味はあるくせに、目が合うとすぐ離す、その繰り返しだ。
〜うざい、うざい、うざい、うざい、
全員俺のことをキチンと俺として見てくれない。〜
恐らく彼女たちは織斑千冬の弟、
もしくは世界初の男性操縦者としか見ていないのだ。
〜それに、さっきから俺を敵視する視線もかんじるし、はあ、地獄だよ〜

キーンコーン、カーンコーン、チャイムがなると蜘蛛の子散らすよ

うに消えていった。
再び授業が始まった。

第2話　IS学園（後書き）

どうも、ケンです。この作品は本当に読んでもらっているのか不安です。
読んでくれたら、ぜひ感想を下さい。後の参考にしますので。
次回は設定を出します。では～～～

第3話　クラス代表

キーンコーン・カーンコーン
「あ～終わった」
授業が終わりリラックスしている一夏に一人の少女が近づいていった。
「ちょっと、よろしくて？」
「よろしく、ありません」
「ちょっと！よろしくて？」
「何だよ？」
鬱陶しく思い後ろ向くと・・・
「まあ！何ですの！その返事は？私に話しかけられたのですから、それ相応の返事があるでしょう？」
その言動は明らかに男と言うものを見下している言動だった。

「悪いがお前みたいな世間知らずは知らないな。だれだ？」
「まあ！私を知らない？この入試首席で唯一試験官を倒した、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを知らない？」

「ああ、知らないな。それに首席で試験官を倒したのがお前だけじゃないぞ？」
「な、何ですって？私、だけだと聞きましたが？」
「女の中ではじゃないのか？」
「な！あなたねえ！」

キーンコーン・カーンコーン
授業の開始を知らせる鐘が鳴った。
「く！後でまた来ますわ！」
「来なくて結構だ」

「では、これより実践で使用する武装について説明する。
あ～その前にクラス代表を決めんとな」
千冬が思い出したかのように言いだした。
「クラス代表とは文字通りクラスの長だ。
再来週から始まる対抗戦に出るだけではなく、
会議などにも出席してもらう。誰かいないか？
自薦他薦なんでもかまわんぞ」
〜嫌な予感がする〜

その予感は的中することになる。
「はい！織斑君を推薦します！」
「私も！」
〜やっぱりか〜
「他にはいないか？」
「納得いきませんわ！」
「私も納得いかんな！」
二人の生徒が反論しだした。

「クラス代表は最も実力のある者がなるもの。こんなド素人に
任せられませんわ！」
「私も同感だな。こいつは昔から出来ない事には一切手を出さない。
出来ないなら努力すれば良いものをこいつは一切しない！」
〜あ～めんどくさいことになったかも〜
「立候補者は3人だけか？ならば来週に決闘を
行い勝ったものが代表になる。それで構わんな？」
「「はい」」
「ご自由に」
「ならば決定だ。授業を始める」

放課後～
「あ～やっと終わった。」
一夏が教室でリラックスしているとそこに山田先生が来た。
「あ！織斑君、ここにいましたか。」
「どうしましたか？山田先生？」
「実は織斑君の部屋が決まりました！」
「は？俺は1週間は自宅登校と聞きましたが？」
「実は色々とあるんですよ。そこら辺は聞いてますか？」
聞かれてはいけないのだろうか？耳元で話し始めた。

「まあ、いいですが。ルームメイトは誰ですか？」
「それは・・・」
「私だ」
後ろから聞きたくもない声が聞こえてきた。
「織斑千冬」
「年上には敬語を使えと言った筈だ」
「俺はお前に敬語は使わない」
「そうか・・・・」
千冬は一夏の顔から眼をそむけてしまった。
「えっと、ひとまず良いですね？」
「本来はイヤですが分かりました」

一夏の部屋～
「い、一夏」
「気安く呼んでんじゃねえよ」
「す、すまない。元気にしていたか？」
「元気にしていたかだあ？ふざけんじゃねえよ！」
「！！！！」

「よく、てめえみたいな奴が教師してられるな。え?織斑千冬!」
「・・・・・・」
「忘れたわけじゃねえよな?あの日の事。」
「!!!!!」
千冬はその言葉を聞くや否や顔を俯かせた。
「俺はお前を許さねえ。何年経とうが俺はお前を憎み続ける!」
「・・・・・」
夜は静かに更けていった。

???side
「失礼します」
「どうぞ~」
「会長。例の報告書ができました」
その部屋には二人の少女がいた。
「ありがとね。いつも」
「いえ、これが仕事ですので」
「ふふふ、だからよ」
「ですが、本当に彼なんですか?」
「ええ、そうよ。今日、彼のネックレス見たもん。」
「そうですか。良かったですね。」
「うん!ようやく見つけたよ・・・・・・一夏」

月明かりに照らされた彼女の笑顔はまるで女神のようだった。

第４話　決闘

「織斑、お前のＩＳは決闘の日に送られてくるそうだ」
「あ？」
「え？一年生のこの時期に専用機？」
「いいな、いいな～私も専用機欲しいな」
「それは良かったですわ。訓練機ではフェアではありませんものね」
「何で専用機何か送ってくんだよ」
「お前のデータが欲しいそうだ」
「つまりはモルモットかね」
世界で唯一の男性操縦者のデータが欲しくない訳が無いのである。
〔専用機か～あの、マッドが作ってなきゃいいけどな〕
一夏の頭には一人の女性が浮かんでいた。

クラス代表決定戦当日～
会場となる第３アリーナは類を見ない程の超満員になった。
「では、まず初めに篠ノ之さんとオルコットさんの試合をやります。
その後にお二人には織斑君と
闘ってもらい、勝った回数が
多い人が代表となります。いいですか？」
「わかりました。」
「わかりましたわ」
「・・・・・・」
「お、織斑君？」
一夏は先生の声を完全に聞き流して、ある一点を見ていた。
〔あの、格納庫から何かを感じる、俺を呼ぶ何かが。〕
「あ、あの～」
「山田君、時間もそう長くは無いんだ。始めよう」
「で、では、これより１年１組の代表決定戦を行います。

オルコットさんと篠ノ之さんはアリーナの
中央に行ってください」

すると、打鉄を纏った箒とブルー・ティアーズを纏ったセシリア出てきた。
「オルコット、よろしく頼むぞ。
いい試合にしよう」
「セシリアで構いませんわ、箒さん」
「そうか、わかったセシリア」

二人は向き合いながら闘志を燃やしていた。
カウントが開始された。
5、4、3、2、1、　ビーーー
闘いの火蓋がきって落とされた。

???ｓｉｄｅ
「ついに始まりましたね、お嬢様」
「もう！だからお嬢様はやめてって、言ってるでしょ」
「すみません、つい癖で」
青色の髪の毛をした美女と、黒髪の美女がそこにいた。
二人とも戦いを観戦していた。
「どちらが、勝つと思いますか、会長」
「う～ん、経験的に言えば、候補生のセシリアちゃんが
圧倒的に有利だけど、箒ちゃんも才能があるみたいだしねえ～」

箒ｓｉｄｅ
〜くっ！　流石は代表候補生全く入り込む隙がみあたらない、
こっちは近距離なのに向こうは遠距離ときたものだ〜

決してセシリアのワンサイドゲームと、いうものでもなかった。
箒はセシリアから距離をとって、レーザーをかわし、
かわしきれないものはブレードをうまく使い機動を逸らしていたが、
徐々にエネルギーの方も、
減っていっているのも事実だった。

セシリアｓｉｄｅ
先程から、攻めてはいますが、決定打をことごとく防がれていますわね。
このままでも、勝つことはできますがあれでおわりしましょう。
「箒さん、これで幕引きとさせていただきますわ」
セシリアはビットを展開すべく一瞬、動きを止めてしまった。
箒はこの一瞬の隙を見逃さなかった。

「今だ！うおあああああああああ！」
まるで、雄たけびのような叫びをあげながら箒は
セシリアとの間合いを０にし２回ブレードをふるった。
たったの二回だったがそれでも
セシリアのエネルギーを半分削った。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「はあっ、はあ」
「くっ！や、やりますわね。これで終わらせます」
すると、セシリアの背中からビットが４機射出された。
「こ、これは」
「喰らいなさい！これがブルー・ティアーズの全力ですわ！」
４機のビットから同時にレーザーが放たれ、そして、

ビーーーーー、勝者＜セシリア・オルコット＞

わぁぁぁぁぁーーー
歓声があがった。立ち上がって拍手をする者、
感動して涙目になっているものなど凄まじい歓声だった。
「くそ！」
箒は悔しそうに地面を殴った。そこへ、
「箒さん」
「何だ？」
「素晴らしかったですわ！先ほどの試合。わたくしも感服いたしました」
「あ、ああ、しかし負けは負けだ」
「例え、そうだったとしてもわたくしは、
たいへん意味があった試合だったと思いますわ」
「そ、そうか。ありがとう。しかし、
流石は代表候補生だな！私とは大違いだ！」
「いえ、いえ、わたくしも、まだまだですわ。
先ほどの試合で痛感しました。よろしければ、
友達になりませんこと？」
「そんなの、当たり前だ！」

「え、えっと、皆さんにお知らせがあります。本来ならば、
この後、織斑君との対戦を予定、
していましたが織斑君の都合で棄権することが、
決定しました。繰り返します・・・・」

試合が決まる１０分前～～～～
一夏ｓｉｄｅ
俺はいま、目の前の物に目をうばわれていた。
「これが、」
「はい！これが、織斑君の専用機＜白式＞です」
白式の放つオーラ？みたいなものに俺は動けずにいた

{これ程まで純白で、何者にも染まらないような白があるのか}
「では、織斑君、別のアリーナで、フォーマットとフィッティングをして、一次移行を、済ませてきてください」
「わかりました」
一夏が白式に触れようとした瞬間、
バチ！、バチ、バチチ、バチチチチチチ、
とピット全体に電流がはしった。
「きゃあ！」
「くっ！」
二人には電流が走ったようだが一夏には全く流れなかった。
{待って、まだ私は準備ができていないの、だから私を動かさないで、お願い！}
頭の中に直接、幼い女の子のような声が聞こえた。
{今のは、一体？}
だが、声が聞こえた以上は無視は出来なかった。
「山田先生、俺は棄権します」
「そ、そうですね。この状態では試合は無理ですね。わかりました」

会場では何とも言えない空気が流れていた。
「え？棄権何で今さら？」
「もしかして、さっきの試合を見て、二人にびびちゃったとか！」
「かもね～、やっぱり所詮は男だし」
「会長、何かあったのでしょうか？」
「ん～、せっかく織斑君の試合を見れると思ったのに～、残念」
「お～い、おねえちゃ～ん、かいちょ～」
明らかにダボダボの服を着ている女の子がゆっくりとした動作でこちらにやって来た。

「本音、何かあったの？」
「うん、実はね、おりむーが棄権した理由を教えようと思って」
「あら、本音ちゃん、知ってるの？」
「う～～ん、さっき偶然先生たちの会話を盗み聞きしちゃって」
「こら！本音いつも言ってるでしょう」
「まあまあ、虚ちゃん、で、その理由ってのは？」
「うーん、とねおりむーの専用機が
なんだかトラブルを起こしたみたい」
「トラブルねえ・・・」
（本来なら、キチンと整備した後だからトラブルなんて起こさないんだけどな」
「虚ちゃん至急、情報を集めて頂戴！」
「わかりました」
「本音ちゃんは織斑君の情報を！」
「りょうかーい」
「何もなければいいけど」
その顔は真剣そのものだった。

第5話　差別

？？？ｓｉｄｅ
「ふむ、封印が解けたのは良いが、
このままでは私本来の力が出せないな、
かといって人に受け継がせると力は半減してしまう。
これではあの時の二の舞になってしまう。
何かいい方法はないものか？」
黒い発光体のようなものがふわふわと漂っていた。
「ん？そうか！この方法があったか！
なぜ今まできずかなかったのだ。
これを、使えば本来の力が存分に使える。
ふふふ、待ってろ、光よ」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー
代表決定戦の数時間後〜〜〜〜
今はもう、試合のほとぼりも冷め、生徒たちは夕食をとっていた。
「ねえ！凄かったね！今日の試合！」
「もう、あんたまだ、言ってるの？」
「だって！あんな試合もうないかもしれないんだよ？」
「あのねえ」
すると、そこへ一夏が食堂にやって来た。
「おばちゃん！日替わり定食」
「あいよ！」

「ねえ、見て織斑君だよ」
「千冬様の弟だって聞いてたけど、所詮は男ね。期待して損しちゃった」
「確かに～」
食堂にいる女子生徒達が蔑みはじめた。
(はあ、イライラする。何でこうも女子共は勘違い野郎が多いんだ)
「あら、これは、これは試合を棄権した方ではありませんか」
「・・・・・・・」
完全に無視していた。
「聞いてますの！そこの貴方！」
「いや、全く聞く気もねえよ。勘違い野郎」
「まあ！その様な分際でよくそのような言葉を吐けますわね。感心しますわ。」
「何に感心するかは知らないがうるさいぞ」
「ふん！まあいいですわ」
それでも、一夏は無視をして、そそくさと出て行ってしまった。

一夏の部屋兼千冬の部屋～～～～
ガタン！
「くそ！あのクズどもが、俺を下に見やがって、あいつら何を勘違いしてやがんだ。あいつらは何も自分自身が強いわけじゃないのに自分達が最強みたいに振舞いやがって！あいつらが優秀なわけじゃない、ＩＳが優秀なんだ。それを勘違いしやがってくそが！」
一夏は部屋にあるものを壊しながら叫んだ。すると、そこに・・・
「どうしたんですか！織斑君、落ち着いて下さい！」
「うるさい！黙ってろ！」

山田先生は体を大きくふるわせ始めた。
「はあ、はあ、すみません山田先生怖がらせてしまって
壊した備品はすべて弁償します」
「お、織斑君？大丈夫ですか？
何かあったなら先生が相談にのりますよ？」
未だに震えている体を、抑えながら言った。
「いえ、大丈夫です。先生こそ大丈夫ですか？震えてますよ」
「だ、大丈夫です。少し驚いただけですから」

「そうですか、では俺はこれで」
一夏が部屋を出て行こうとすると服の袖を引っ張られた。
「ど、どこに行く気ですか？」
「いえ、別に屋上で寝ようかと思って、
このままだと先生に迷惑かけますから」
「で、でも・・・」
麻耶は止めようとするが、一夏はそのまま出て行ってしまった。
「織斑君・・・」
部屋にポツンと小さな声が響いた。

第6話　光と闇

織斑一夏の軌跡～～～
俺は、異常だった。自覚したのは俺が幼稚園の時だ。
俺はほかのみんなが出来ないようなことができていた。
例えば、勉強。この頃には既に高校の勉強すら出来ていたし、
趣味も子供らしくなく俺の趣味は勉強だった。
毎日、毎日問題を解いた。古典、数学、物理、化学、世界史、
日本史など全ての教科をしていた。
その時は楽しかったんだ。問題を解くことが。
この頃の俺はまだ、気付きもしなかった。
この後の人生が地獄へと変わっていくサインを、
俺は見逃していた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

第6アリーナ～～～～
今、俺の目の前には白式がたたずんでいた。
なぜ、ここにいるのかというと・・・・
｛一夏、今から第6アリーナに来て。｝
「！！」
後ろを振り向くが誰もいなかった。
「あの時の声か、誰だか知らないが、

まあいい行ってやろうじゃないか。」
俺は声の指示に従い、第６アリーナへと向かっていった。
すると、そこには誰が運んだか分からない白式が中央にあった。
「誰が、ここまで運んだんだ？
確か倉持技研がメンテをしていたはずじゃなかったのか。」
〜一夏、来て。〜
声の指示に従い白式に触れるとあの時のように
電流は、はしらなかったが
突然、白式が輝きだした。
「な、なんだ！くっ！うわあああああああ」
第６アリーナから白式と一夏の姿が消えた。

「うわあああ、なんだ！どうなってんだ〜〜」
ボッチャァァァァァン、盛大に一夏は海に落ちてしまった。
「ゲホッ、ゲホッ、うわ、しょっぱ！」
「ははははははははは！！」
誰かに大爆笑されてしまった。
「だ、誰だ！。」
「いやあ、ごめん、ごめん
予想通りの行動だったからつい、ぷひゅっ！」
「笑いすぎだ！で？ここは、どこでおまえは誰なんだ」
顔をあげるとそこには・・・・
「ごめんね、大丈夫？」
白い髪の毛に麦わら帽子をかぶった女の子がいた。
「これが、大丈夫にみえるか？」
「う〜ん、見えないね。」

「だったら、聞くな。」
「ごめん、ごめん。じゃあ、
まずクイズといこうか？私は誰でしょう？」

「は？」
一夏は止まってしまった。初対面の女の子に、
「誰でしょう？」と聞かれたら誰だって困るだろう。
「誰って、お前と俺は今が初対面だぞ、そんなもんわかるか」
「ううん、私と貴方は一度会ってるよ。」
「姿は違うけどね！」と満面の笑みで言った。
しかし、一夏には心あたりがなかった。

「私の事が分からない人に、使ってもらいたくないなあ～」
〔使う？〕
「お前まさか、白式か？」
「そう！大当たり～～～～」
周りからカランカランと聞こえそうな
ハイテンションで、はしゃぎ始めた。
「いや～たった一つだけのヒントで言い当てるとはさすがは天才！」
「で？言い当てたはいいが、景品でもくれるのか？」
「うん、景品は、わ・た・し！」
「つまりは、白式か？」
「うん、じゃあ今から契約しようか？」
「契約ってなんだ？」
「う～んと人間たちでいうファーストなんとか。」
「ああ、そう言う意味ね。分かったじゃあしようか」
「あ！待って。もう一人紹介したい人がいるんだ。」
「ライト！出てきていいよ！」

どこからともなく銀髪の女性が現れた。
「こんにちは、織斑一夏、そして光の最適合者。」
「誰だ？お前は、それに光ってなんだ？」
「はい、今から説明します。」
ライトと呼ばれる女性が指を鳴らすと
風景がガラッと変わってしまった。
「なっ！」
「落ち着いてください。これは幻影ですから」

今から遥か昔、この宇宙では二つの力が争っていた。
光と闇、この二つの力は相反するものでありながらお互いに引き合っていた。
会うたびに争い、また争った。
しかし、そこに人間の登場により、一気に状況が変わった。
光は人間に知恵を与え、平和に暮らすことを説いた。
闇は人間に強さを与え、強いものが弱いものを支配しくらしていくことを説いた。
この結果、争いが起こってしまった。
これにより、光は争いを止める為にあることを行った。
それが、力の継承だった。
これにより、争いは終わり、再び平和が戻ろうとした矢先に最悪の事態が起こった。
闇も人に力を継承し再び世の中は争いが起こった。
これにより、争いが長期化し多くの命が消えていった。
このままでは、人類が絶滅してしまうと考えた光は闇を封印すること決意した。
そして、無事に封印は成功し光も眠りについた。・・・・・

「これが、光と闇についてのおおまかな説明です」
「なあ、じゃあ何で、あんたはここにいるんだ？
さっきの説明だとあんたは今でも、
眠っているんじゃないのか？」
「ええ、本来ならばそうですが、状況は最悪です。
私が施した封印が解けてしまったのです」
「どうして？」
「いまの世の中、人の心の中には闇が溢れています。
恐らくそのせいかと。」
「そうか、で？俺にどうしろと？」
「お願いです！光を受け継ぎ、
闇と闘ってくれませんか？」
「なぜ？俺なんだ？」
「それは、あなたが光の最適合者だからです。」
「どうして、そんな事がわかるんだ？」
「あなたの心には光が満ち溢れているからです」
「俺は光なんか無いぞ？」
「いいえ、貴方は気づいてる筈です。
自分の心の奥深くの物に」

「わかった」
「え？」
「何、そんな驚いた顔してんだ。
俺がやらないとこの世のなかの人たちが、
危ないんだろう？だったら、俺がやってやる！」
「本当ですか！ありがとうございます！」
「一夏、本当にいいの？」

「ああ、それにまだやるべき事が残ってるからな」
「わかった、一夏がそう言うのなら私もいいよ」
「ありがとうございます！では今すぐに
継承を始めましょう。白式さんもいいですか？」
「うん、ついでだから私との契約も済ませちゃおうっと！
じゃあ、一夏始めるよ？」
「ああ、頼む」
そう言うと、俺の体の中に何か温かいものが流れ込んできた。

第６アリーナ～～～
気がつくと俺はアリーナの真ん中に立っていた。
「俺は、戻ってきたのか」
〜うん、ごめんね？〜
「いや、構わないさ、終わったのか？」
〜うん。終わったよ〜
すると、突然、

ズドォォォォォォン
アリーナのバリアを突き破り黒い塊が落ちてきた。
その塊は全身装甲をしたＩＳだった。

第7話　初陣

ＩＳ学園第６アリーナ～～～
一夏は黒いＩＳと向き合っていた。
「誰だお前は！何が目的だ！」
「・・・・・・・・」
〜〜一夏！あれって。〜〜
「ああ、おそらく無人機だろう、人の気配が全くしない。
しかし、まだ無人機の技術はないはずだが？」
いくらＩＳの登場により科学が進歩したと
いっても人がいなくては動かせない。
しかし、目の前のＩＳには、
独立稼働、遠隔操作のどちらかが使われていた。
すると・・・
「うお！危ね、発射するの早すぎるだろ！」
一夏はかろうじてレーザーをかわした。
〜〜大丈夫？一夏！〜〜
「ああ、それよりも一次移行は終わったんだよな！」
〜〜うん！〜〜
「そうか、見せてやろうぜ！俺達の力を！」
〜〜うん！〜〜
黒いＩＳは荷電粒子砲を放ってきた。
「遅えよ！そんなもん当たるか！」
一夏は撃ってくるレーザーをことごとくかわしていた。
〜〜ねえ？一夏～〜〜
「何だ？」
〜〜そろそろよくない？」
「ああ、そうだな」
〜〜じゃあ〜〜

「ああ、本気出すかな」と言い一夏は動きを止めた。
そこを見逃す筈もなく相手は容赦なく撃った、そして・・・
ズドォォォォン。全ての攻撃が一夏を襲った。

「こんなものか、初めの方が強そうだったんだがな」
そこには、純白の翼を羽ばたかせている一夏がいた。
「次は、こっちから行くぜ！」

僅か一度の加速だけでゼロ距離まで近づき、無人機を切っていた。
「白式は高機動タイプでは1，2を争う。
お前みたいなノロマに捕まるものか！」
そう言い放つと再び無人機へと近づく。
しかし、無人機も学習したのか
、瞬時加速を使い距離をとった。
だが、目の前に標的はいなかった。
「どこ見てんだ？」
振り返るのが遅かった。
すでに、一夏の目の前にはエネルギーの壁が１０枚ほど並んでおり、
半分通過していたところであった。
すかさず、無人機も最大出力で放とうとするが遅かった。
「くらえ！これが俺と白式の力だ！」
一夏が相手を貫いたと同時に爆音が鳴り響いた。

???ｓｉｄｅ

「あっれ～？おかしいなあ～
ＩＳ学園に向かわせた
奴からの信号が消えちゃった。
倒されちゃったのかな～？
でも、まだみんな寝静まってる
時間なんだけどな～」

そ今の時刻はまだ薄暗い３：３０であった。
本来ならばまだ、おねむの時間だ。

「う～～ん、ま！いっか！別にこれと言って困るようなものは乗せていないし、
あったとしてもコアぐらいだけどみ～んな、おバカさんだしいいや」

喋っている女性の名は篠ノ之束、
自他共に認める大天才であり、ＩＳの生みの親でもあった。
しかし、いささか性格がひんまがっており、
格好も頭にはウサミミ、服は長いドレスのようなものだった。

「うん、まあ試作機にしては上出来だったかな？ｖｅｒｙ，ｇｏｏｄ！
でも試作機とはいえ、ちょっと倒されるのが早かったかな？
誰に倒されたのかな？なかなかの強さだね。」

束が珍しく興味をもった。

「でも、凄いよね！だってこの子を倒すのにかかった時間が、

５０秒だなんてね。」

一夏ｓｉｄｅ

戦いが終わった後、アリーナの片づけを済まし一夏は整備室を貸し切っていた。

「白式の設定を変えとかないとな。燃費が悪くて仕方がない」

一夏は空中投影型のモニターをいくつも展開しながら教本を片手に膨大な量の情報を眼で追っていた。

突然、白式が輝き始めた。

「くっ！眩しい」

輝きがおさまり目を開けるとそこには・・・・・

「ん～ようやく、出れたー」

「お、お前白式か？何でここに？」

「さあ、私もよくわかんない。気がついたら外にでてた」

「お前は俺の精神世界にいるんじゃなかったのか？」

「だから～わかんないの！」

そこで一夏はふと気がついた。

「まさか、ライトもいるんじゃあねえよね？」

そう、もう一人の住人の姿が見えなかった。

「はい、何でしょうか？」

「「！！！！！」」

「い、いたんだ」

「ふん！どうせ私は光なのに影がうすいですよ～だ」

「わ、悪かった。ライト。そのだな・・・

初めてだったからわからなかったんだよ！」
「う、うん、きっとそうだよ！」
しかし、ライトは・・・
「白式さんのことはすぐに、気づいたくせに？」
「「・・・・」」
妙な空気が漂っていた。
「そ、それでどうかな？私の調子は？」
「あ、ああ。燃費は無駄をなくして大幅に上げておいた」
「そっか、良かった」
白式は嬉しそうに顔を緩めた。
「お前はいじられてるのに何で嬉しいんだ？」
「だって、私が調整されて強くなると一夏も
扱いやすくなるでしょ？
そして、もっと私達は近づける」
「そう言う意味ね」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

あるところに、二人の天才がいました。
片方は、世界から認められこの世界に変革をもたらし、行方不明中の変人。篠ノ之束。
もう片方は、心を閉ざし自分を隠し続ける織斑一夏。
この二人はどのように世界に絡み合い、どのような結果が待っているのかは、
誰にもわかることはない。例え、神というものが存在しようとも。

第8話　変化

織斑一夏の軌跡その？

一夏には友達という存在はいなかった。
自分に近寄ってくる人物全てを敵視していた。
学校でも日常でもそれは、変わらなかった。
しかし、唯一敵視しなかった人物がいた。
公園であった女の子の女の子だけは敵視しなかった。
一夏はこの人物に会いたかった。例え何年かかろうとも・・
しかし、一夏は気づかなかった。その人物はすぐ近くにいることを・
・

――――――――――――――――――――――――――――――――――

ＩＳ学園総合受付所～～～～

「では、これで入学手続きはおしまいです。
ようこそ、ＩＳ学園へ。鳳鈴音さん。」
そこには、制服を改造して両肩を半分ぐらいまで出し、
髪をツインテールにした少女がいた。
「あの～織斑一夏って何組何ですか？」
「ん？ああ、噂のあの子？確か１組だったはずだけど、それがどう
かした？」
「ん、まあちょっと。」
「でも、あれはないわよね～」
「あれって？」
「ああ、そういえば知らなかったわね。

実はね鳳さんがくる少し前に1組の代表を
決める試合があったんだけどね、それに織斑くんも、
エントリーしてたんだけど、
ビビッて逃げちゃったらしいわよ。
所詮は男だった訳ね。」
「また、あいつ勘違いされたんだ。」
「なんか言った？」
「あ、いえ別に。ありがとうございました」
「がんばってね～」

「さ～て。今度はあいつになにしようかな～？」
イタズラを考えるような子供のように笑っていた。

鈴が来る2日前～～
「では、1組の代表はオルコットさんに決定しました！」
パチ、パチ、パチ、パチ、
「みなさん、よろしくお願いしますわ。」
「セシリアが代表なら文句ないよ！」
「がんばってね～～」
様々な声が飛び交うなか、そこへ・・・
「遅れてすみません。山田先生。寝坊しました。」
一夏が入ってくると、さっきまでの騒がしさが嘘のように静かになった。
「あ、あの～織斑君？その髪の毛どうしたんですか？」
一夏の髪の毛が真っ白になっていたのだ。
「ああ、これは染まりました。」
「織斑、染めたのか」

「あんたには関係ねえだろうが。いつもみたいにほっとけよ」
「織斑、年上には敬語を使え。」
「あんたみたいなのに敬語なんか使うか。」
「まあいい。今日から、ＩＳの実習が始まる！各人ＩＳスーツに更衣したうえ、
第３アリーナに、集合！遅れるなよ！」
「「「「はい！」」」」

第３アリーナ～～～
「では、これよりＩＳの基本飛行を実践してもらう、オルコット、織斑！前にこい！」
「はい」
{{めんど}}
「では、まずＩＳを展開しろ」

すると、あっという間にセシリアの体をブルーティアーズが包んだ。
「次！織斑、展開しろ！」
「ねえ、織斑君て本当にＩＳ使えるのかな？」
「さあ？使えなかったりして！」
クスクス、クスクス
{{あんの小娘ども～～}}
{{落ち着け、白式相手にするな}}
「どうした、織斑さっさと展開しろ」
「はいはい」
そう言うと、一夏は白式の待機形態をとりだした。

「なんだ、それは。」
「見てわかれよ。ＩＳに決まってんだろ」
その待機形態は明らかに他のものとは違い、鞘のついた物だった。
〜行こうか、白式〜
〜うん！〜

「よし！飛べ！」
二人は同時に飛んだ。しかし、圧倒的に一夏の方が速かった。
「まあ、出来たんですの？貴方にしてはすごいものですわ」
「・・・・・・・」
「！！また、無視ですの！あなたねえ、なめて」
「おい、いつまでそこにいるつもりだ。次は急停止しろ。目標は地表２０ｃｍだ」
「はい」
するとセシリアはあっという間に降下していった。
〜なんだ、代表候補生つっても所詮あんなものか〜
一夏も降下していった。しかし、
「織斑、誰が地表１ｃｍのところで止まれと言った」
「さあ？」
「まあいい、では次にいく」

昼休みの屋上〜〜〜
「ふああ〜〜眠い」
一夏は屋上で横になっていた。すると
〜ねえ、一夏〜
〜ああ、分かっている〜
「なあ、ストーカーはあまり良い趣味とは言えないぞ、出て来いよ」
物陰から一人の少女が現れた。
「あら、まさか、ばれているとは思わなかったはね。一夏くん」

「ほとんど気配を消せていると言うことは、家は暗部？」
「な！なんでわかったの？」
「あんたの名前だよ、更識楯無１７代目当主様」
「！！！」
そう聞くと更識は戦闘態勢に入った。
「まあまあ、落ち着こうぜ。ここで戦っても
お互いに利益なんかでねえだろ」
「まあ、それもそうね。隣いいかしら？」
「ええ、どうぞ」
楯無は警戒を解き、一夏の隣に座った。
「ねえ、」
「何だ？」
「どうして、私が更識家の１７代目当主だって知ってたの？」
「ああ、そんなことか」
「そんなことって、あなたねえ、
結構軽く言ってるけど
家のセキュリティは、
そこらへんのセキュリティとは
比較できないほど強いんだけど」
「簡単さ、ハッキングしてあんたの家の情報を閲覧しただけ」
「だから～」と楯無が反論するが、
「まあ、確かにあんたの家の守りは相当なもんだよ。
普通のハッカーじゃあ、
到底無理だ。逆探知されて即通報だ。
でも、それは普通のだったらの話だ。
もし、篠ノ之束と同格かそれ以上の
天才がしていたらどうする？」
「ああ、そう言えば貴方は天才だったっけ？」
「まあな」
「ねえ、私の昔話聞いてくれる？」

「ああ」
「あれは、私がまだ小学校低学年ぐらいかな・・・」

楯無ｓｉｄｅ
私はこの家に生まれたときには、既に当主になることが決まっていた。
物心ついたときには、英才教育をされて、
勉学、武術などの当主として必要なことをやっていた。
最初のうちはまだ楽だった。
当主とはいえ、まだ小学校にすら入学していなかったから。
でも、入学後から一変した。
毎日、毎日トレーニングの繰り返し。ただ、それだけ。

初めは笑顔も多少はあったかもしれない。でもその笑顔も完全に消え失せた。

そして、私は家を飛び出した。
あまりにもきつかったの。
私は近くの公園につくと幸いだれもいなかったので思いっきり泣いた。
今までせき止めていたものが一気に流れだしたの。

「うぇ、ぐす、ぐす、何で？何で私ばかりがこんな辛いめに遭わなきゃいけないの？誰とも遊べないし、家にすら呼べない。もう嫌だよ」
「ねえ、どうして泣いてるの？」
「あなたには、関係ないでしょ！ほっといてよ！」
「関係なくないよ！女の子が泣いているのにほっとけるほどばかじゃないよ。さ！行こう」
少年は楯無のうでを無理やりとって遊具の方へと向かっていった。
「ちょ！ちょっと、待ってよ」
少年は止まらなかった。
最初は嫌な顔をしていた楯無だったが次第に笑顔になっていった。
「ははは！楽しいね！」
「うん！」
「名前なんて言うの？」
「私の名前は更識××って言うの君は？」
「僕はね、××っていうの！」
「よろしくね！××君！」
そう言い暗くなるまで二人は遊んだ。

それからというもの、二人は一緒に遊んでいたが別れの日がやって来た。
「ぐすっ、ごめんね。××君、今日でお別れなんだ。」
「うん、泣かないでよ。きっとまた会えるよ！」
「うん。」
「そうだ！これをあげるよ！」
そう言うと一夏は青いリボンを取り出した。
「これは？」
「じつはね、もらったんだ。」
「いいの？もらったものなのに。」
「うん！」

「ありがとう、じゃあこれ、あげる。」
そう言い、ネックレスを外し一夏に渡した。
「わあ～きれい、ありがとう！」
「これが私たちをつなぐ証だよ！」
「うん！またね！」
「うん、ばいばい！」

「あの子のおかげで今の私がいるの。あの子にもう一度会いたいな」
「会えるさ、きっと」
「そうかもね」
「じゃあ、俺はこの辺で帰らせてもらう」
「うん、じゃあね！一夏君」
「ああ、じゃあな、楯無」
そう言い、二人はわかれた。あの時と同じように。
「もう会えたんだけどね」

第9話　部屋と会長

1組教室～～～
「セシリア、頑張ってね！フリーパスのためにも！」
「ええ、是非がんばらせていただきますわ！」

実は、もうすぐクラス代表別トーナメントというものが開かれるのだ。
そこで、優勝するとデザートフリーパスが貰えるのだ。
女の子は甘いものが好きな子は結構いるので、みんな必死なのだ。
とはいえ、戦うのは代表なのだが・・・・

「でも、知ってる？2組に転校生がきたらしいよ、
それも中国の代表候補生だって！」
「ん？この時期に転校生か、珍しいな」
「あら？私の存在を危ぶんでのことかしら？」
「でも、きっと大丈夫だよ！専用機持ちはいま、1組と4組だけだからね！」
「・・・その情報古いよ」
「え？」
そこには、ドアに体をあずけ腕を組んでいた鳳鈴音がいた。

「残念だけど、2組の代表は私に変わったから
そう簡単には優勝させないわよ」
「あなたが、2組の代表ですの？わたくしは、」
「あ～いいよ別に、あたし他の国に興味無いし」
「な！あなたねえ」
「ねえ、そんなことより一夏はどこにいるの？」

「一夏って、誰だっけ？」
「さあ？」
「あ～ごめん。織斑はどこにいる？」
すると生徒たちは顔を見合わせ、
「さあ？知らない。興味無いし」
「へ～あいつ、ここでもこんな扱いなんだ」
「ここでもって？」
「ああ、実はね・・・」
すると、後ろから、
「おい、どけ。邪魔だ。通れないだろうが」
一夏の声が聞こえた。
「あ！久し振りね！元気してた？」
「誰だ、お前？」
「ふ～～ん。相変わらず気に入らない奴の名前を覚えないのね、いいわ、もう一度言ってあげる。私は・・・」
名前をいいかけたとこで、
スパァァァーン！といい音がなった。
「いったー、誰よ！」
「さっさと教室にもどれ、バカ者」
「は、はい！」
「お前たちもさっさと席に座れ！」
そう言うと全員が驚く程の速さであっという間に戻ってしまった。
「では、これよりＳＨＲを始める！」
授業が始まった。

放課後～～～
「あ！織斑君。ここにいましたか。」

「どうかしましたか？先生？」
「はい！実は織斑君の部屋が用意できましたのでそちらで今日から生活して下さい。」
「わかりました」
〜ようやく、あいつともおさらばか。
こんな短期間で用意してくれた
山田先生に、感謝だな〜
一夏は荷物を持ち新たな部屋へと向かっていった。

一夏の部屋前〜〜
「俺の部屋は・・・ここか」
ガチャッ、・・・バタン！
ドアを開けるもすぐに閉めてしまった。
〜ちょっと、待て、ちょっと、待て。確かここは俺の部屋のはず。それなのに、
すごく見憶えのある青色の髪が
見えたのは気のせいだろうか？
いや、気のせいだ。きっと〜
そう、自分に言い聞かせ、もう一度開けてみる。
ガチャッ。
「おかえりなさい。あなた？、ご飯にする？お風呂にする？それとも、あ？た？し？」

「なあ？何であんたはエプロンの下に水着なんか着てんだ？」
「あら？ばれちゃった。はだかエプロンだと思ったでしょ」
「残念ながら肩紐が見えてるんで思わない」
「ありゃ？これは失敗、失敗」
「なんで、ここにいんだよ！楯無！」
そこには生徒会長、更識楯無がいた。

「んーまあ、ちょっと、連絡かしらね」
「連絡ってなんだ」
「うん、じつは私もここに住むから、よろしく～」
「はあ？ちょっと待てよ！俺は聞いてないぞ」
「うん、私が今決めたもん。生徒会長権限で」
実はＩＳ学園の生徒会長は他とは違い生徒の中で最も強い生徒が務めるのだ。
つまり、会長＝最強なのだ。そして会長は教師と同等の権力をもつ。
「職権乱用だろ。まあいいや。ひとまず俺はシャワーをあびさせてもらうから、
その格好をどうにかしろ」
そう言い一夏はシャワー室へと消えていった。
この二人が今後、どのようにして関わっていくのかは次回のお楽しみ。

第１０話　試合と侵入者

クラス代表別トーナメント当日～～～
「さあー始まりました。クラス代表別トーナメント。この試合で優勝すると、
フリーパスが贈呈されます。さあ、どのクラスの手にわたるのでしょうか！」
わぁぁぁぁぁぁー

一夏ｓｉｄｅ
今ごろ、会場は大盛り上がりしているだろう。
外にいても歓声が聞こえてくる。
「こんなところにいた！試合見に行かなくていいの？」
「ああ、良いんだよ。別に試合何か見なくても強いし」
「その自信はどこから出てくるのかしらね？」

第２アリーナビット内～～～～
「じゃあ、セシリアがんばれよ！お前なら大丈夫だ。」
「ええ！もちろん勝ってきますわ。箒さん」
そういうとブルー・ティアーズを纏いフィールドへと向かっていった。
そこには甲龍を展開した鈴が待っていた。
「鳳さん。よろしくお願いしますわ。」

「うん。よろしく。でも勝つのはあたしだから」
カウントダウンが始まった。
5・4・3・2・1、ビー

先攻は鈴だった。瞬時加速でセシリアに近づき双天牙月をふるった。
しかし、セシリアも負けじとインターセプターではじいた。
「へえ～やるはね」
「これでも、代表候補生ですので」
そう言い、セシリアはいったんセシリアから距離をとった。しかし、
「甘い！」
そう言うと甲龍の肩のアーマーがパカッとスライドして開き、
中心が一瞬光ったかと思うと何か見えない物に殴られた。
「キャア！」
セシリアは地面に叩きつけられた。
{あれは、まさか・・・}

箒ｓｉｄｅ
「あれは？」
「あれは、衝撃砲「龍砲」ですね。空間自体を圧縮し砲身を作って
その余剰エネルギーを、
打ち出し攻撃するものです。」
「つまり、砲身も砲弾も見えないんですか？」
「ええ」
箒は再び画面に視線をもどした。

「へえ、やるじゃない。一発しか喰らってないなんて。」
「これでも、代表候補生ですから」
しかし、セシリアは内心焦っていた。
〜まずい、ですわね。砲身も砲弾も見えないとするとビットもつかえませんわ。
こうなれば・・・〜
すると、セシリアは先ほどよりも大きく動き出した。
〜見えなければ、撃たせなければいいこと。〜
「くっ！さっきからちょこまかと！」
〜今ですわ！〜
セシリアが鈴にレーザーを撃とうとしたとき・・・

ズドォォォォン。
アリーナのバリアを突き破って何かが落ちてきた。
「な、なんですの！あれは！」
「知らないわよ！こっちが聞きたいくらいよ！」
すると、その落ちてきたものが突如観客席に向かいはじめた。
「まずい！鳳！オルコット！今すぐあのＩＳを止めろ！」
オープンチャンネルを通じて千冬の怒号が聞こえた。

「え？え？」
「いいか！奴はアリーナのバリアをＢＴ兵器を使い破壊した。
つまり奴は絶対防御をも貫く攻撃を持っている。
これを観客席に放ってみろ。あとは分かるな？」

「「！！」」
「行くわよ！セシリア！」
「ええ！」
二人は黒いＩＳに向かっていった。

ビット内～～～～
「山田先生。今すぐ警戒レベルを上げてください。」
「そ、それが、さっきからやっているんですがこちらの操作を全く受け付けません！」
「何？どういうことだ！」
「恐らくあのＩＳに乗っ取られたかと・・・」
「くそっ！」
千冬は壁に拳を叩きつけた。
「先生！生徒たちを避難させなくていいんですか？」
「そうしようにも、防護シャッターは降りませんし、会場につながる全ての、
ドアが開かないんです」
「それでは、政府に支援要請をしては・・・」
「それも無理だ。あのＩＳによって今、ＩＳ学園はすべてのコントロールが奪われて、
しまっている」
「そ、そんな」
「あの二人に任せるしかない。」

フィールド内～～～
「セシリア、あいつにＢＴを使わせちゃだめよ！」
「ええ！わかっていますわ」
二人は所属不明のＩＳと交戦していた。
「きゃあ！」
「セシリア！」
セシリアが相手の長い腕で弾き飛ばされてしまった。
「何なのよ！あいつは。なんで全身装甲なのよ？」
相手は全身装甲をしており、異様に長い腕に背中には大型のスラスターがつけられていた。
〜まずいわね。さっきの試合との連戦だからほとんどエネルギーが残っていない。〜
ドカン！
「ぐう！」
「大丈夫ですか、鳳さん！」
「ええ、そんなことよりあいつは？」
相手はすでに発射準備を終えて、今にも発射しそうだった。

「やばい！セシリア！あいつを狙えないの？」
「今やっていますわ！」
セシリアは照準を向けるが、既に遅かった。
相手は既に発射し終えていた。
「やめてぇぇぇぇぇぇぇ」

鈴の悲痛な叫びがアリーナに響いた。

ズドォォォン。

レーザーが光に弾かれた。

「え？何？また敵なの、それとも・・・」

その光が消え姿を現したのは・・・・

一夏だった。

一夏ｓｉｄｅ

〜ん？あれは・・・〜

アリーナの上空に黒色の何かが浮遊していた。

〜なあ、白式。あれってもしかしてＩＳか？〜

〜うん。そうだね。それも無人機だよ〜

〜そうか。じゃあ行くか〜

〜うん〜

「一夏君？どこに行くの？」

「ちょっと用事が出来たんでな」

そう言い一夏は白式を取り出し、鞘を抜くと光となって行ってしまった。

「こいつは、もしかして・・」
〜うん、多分前の奴とほぼ同じだね〜
〜そうか。じゃあ、破壊しようか〜
〜了解！〜

「なんで、あなたがここにいますの！すぐに戻りなさい！
ここは遊び場ではないんですのよ！」
「・・・・・・・」

一夏は腕を上げ、１度だけ指を鳴らした。すると、

ビーっ、ビーッ、ビーッ
「生徒の皆さんはすぐに避難してください。繰りかえします。生徒の皆さんは・・・」
「今、ＩＳ学園の全てのプログラムの主導権は俺が握った！
さあ、始めようぜ！俺たちの試合を！」

ビット内〜〜
「織斑先生！」
「ああ、見ているよ。あいつ、一体なにをした？」
「くそ！先生私に打鉄の使用許可を！」
「何故だ？」
「あいつがいても何も変わりません！」
「ダメだ。許可できん」
「な！なぜですか」
「今、織斑が交戦中だ。これ以上行っても何も状況は変わらんここは、織斑に任せる。」

「なぜ、あんな奴に任せるんですか！」
「あいつならば絶対に勝つからだ」
「しかし！」
「篠ノ之、見ていろ。あれがあいつの力だ」

一夏ｓｉｄｅ
「ふーん。成程。確かに奴よりも性能は上がっている。けど、弱いな」
一夏は相手の攻撃を避けながら言った。
「こんな奴に時間を懸ける気はない。そろそろ終わりにしてやる。」
一夏はそう言うと突然後ろを向きだした。
相手もそれを見逃すほど馬鹿ではなく、攻撃のために距離を縮めようと
距離を詰めるが突然、雪片弐型の刀身部分が伸び相手を壁際まで押し込んだ。
そのせいで相手は動けずにいた。
「さあ、これで終わりにしようか」
そう言い一夏は雪片弐型に乗ると１０枚程の壁が現れた。
「いくぜ！」
一夏は翼を出し、空中に飛びあがると壁を通り抜けて行った。
「喰らえ！」
１０枚目の壁を通過すると同時に相手に蹴りをいれた。
それと同時に黒いＩＳは大爆発を起こし見るも無残な姿になっていた。

「何なのよ、あの威力は。一撃で破壊するなんて」
鈴はあれを自分が喰らったらと思い顔を青ざめていた。

〜そんなバカな！なぜ、あの方がたおしたのですか！それも一撃で。〜
二人とも同じことを考えていた。

夕方。ＩＳ学園地下５０メートル地点〜〜〜
そこはレベル４以上の権限を持つ者しか入れない場所。
そこへ、先程のＩＳが運び込まれ、冷たい顔でデータをみている千冬がいた。
「織斑先生」
「どうぞ」
千冬が許可するとドアが自動で開いた。
「解析結果がでました。」
「それで、どうでしたか？」
「はい。それが無人機でした」
「やはりか」
「はい。どのような方法で動いていたのかは不明です。
織斑君の一撃で全てが壊されていました」
「そうか・・それでコアの方は、どうなった？」
「はい、それが・・・」

麻耶が突然、苦い顔になった。

「どうかしましたか？」
「はい。実はコアなんですが完全に破壊されてました」
「そうか。すまない。引き続き頼む」
「わかりました」
いつも以上にキビキビと動いていた。
〜あいつは一体なにを考えているんだ。〜
千冬は頭に一人の人物を思い浮かべて、仕事に戻って行った。

第１１話　転入生と二人目

敵の襲撃から数時間後～～～
一夏ｓｉｄｅ
俺はいま整備室を先程の戦闘を見ていた。

「ここは貸し切りにしていたはずなんだけどな。分からなかったか？楯無」
「あら、そんなの会長権限で無くしちゃった？」
「相変わらずの職権乱用だな」
「あら嬉しいわ」
「褒めてねえよ」
「それで、あいつは何だったの？」
「ん～言えないんだがな～」
「大丈夫。当主の名にかけて言わないわ」

真剣な表情で答えた。
「・・・分かった」
「こいつは無人機だよ」
「！！！」
楯無は驚いたような顔をした。
「そ、そんなはずは！」
「ああ今の技術では不可能だ。でも現に現れたんだ。受け入れろ」
「で、でも一体誰が？」
「そんなの決まってんだろ」
「心あたりがあるの？」
「ああ、まだ推測だがな」

整備室からでると楯無が話しかけてきた。

「ねえ、一夏君」
「ん、なん・・・」
後ろを振り向くと楯無はリボンをしていた。
しかし、ただのリボンではなく一夏にとって特別なものだった。
「お、お前そのリボン、まさか！」
「うん。久しぶりだね。一夏」
そのリボンは一夏が唯一、敵視することなく会いたがっていた、
少女にあげたものだった。

「まさか、お前が公園の少女？」
「うん、一夏、ペンダント持ってるでしょ？」
一夏はペンダントを取り出した。
「うん、それはね私があげたものなの。」
突然、一夏が楯無を抱きしめた。
「え？ちょっ、一夏！」
「ぐすっ。そうかお前が。よかった、会えて」
「一夏？」
一夏は泣いていた。
「お前に会っていなかったら今、俺はここにはいなかった。ありがとう」
「うん」
それから数分後～～～

「悪いないきなり抱きついたりして」

「い、いや別に一夏になら何されても」
先程の事を思い出し思わず顔を赤くした。
「へ？最後よく聞こえなかった。もっかい言ってくれ」
「い、いや別に何もない」
「そ、そうか」
おされぎみな一夏だった。
「なあ、今度どっかに行かないか？」
「え？それって」
「ん？嫌か？」
「いや、別に。むしろ行きたい！！」
「あ、ああ、じゃあ今度の日曜日でいいか？」
「う、うん！じゃあね一夏！」
「ああ！じゃあな。」

一夏ｓｉｄｅ
〜なぜ、俺は今ドキドキしてんだ。ただ数分話しただけなのに、この気持ちは、一体何なんだ？〜
顔を赤くしながら悩んでいた、一夏であった。

楯無ｓｉｄｅ

〜ふう。あ〜ドキドキした。まだ心臓がバクバクしてるし顔も若干赤いかな。

何なんだろう?この気持ちは?確かに一夏君はかっこよかったけど、別にそんな目で見てたわけじゃないのに〜

こちらも顔を赤くしながら悩んでいた。

余談〜〜〜

二人とも考えすぎて壁に気付かず顔面をぶつけ、悶絶していたのは知る由もない。

翌日、教室内〜〜〜

「ねえねえ!あんたはどこのモデルにするの?」

「ん〜あたしはここのかな?」

「え〜、そこ選ぶの〜なんかダサくない?」

「そうかな?別に普通だと思うけど・・」

ガラガラ。

「みなさん、おはようございます」

「みんな、おはよう」

「あ!箒ちゃんにセシリア!おはよう」

「ねえねえ二人のＩＳスーツってどこのなの?」

ＩＳスーツとはＩＳを装着するときには必ず着なければならないス

ーツだ。
さらに吸汗性、通気性抜群の代物なのだ。

「私はハヅキ社製の物だ」
「あ！篠ノ之さんも？私もそこにしようかな～」
「え～でもハヅキのってデザインだけって気がしない？」
「デザインがいいの！」
「セシリアのはどこのなの？」
「私はイギリスの特注品ですわ」
「おお～やぱっり候補生はすごいね～」
すると、そこへ・・・
「みなさん、おはようございま～す」
「「「「おはようございま～す」」」」
全学年公認？のゆるキャラこと山田先生が入って来た。
「諸君、おはよう。」
「「「「お、おはようございます！！」」」」
最強の先生も入って来た。
「え～っと　全員いますか～？」
「織斑がいないようだが？」
「遅刻しました。すみません」
「あ、織斑君、最近遅刻多いですよ？」
「すみません」
全員がそろった。

「皆さんに嬉しいお知らせがありま～す」
「「「？？？」」」
「実はここに転校生が２人も来ます！」
「え？二人同時に？しかも同じクラス？」
「それでは、どうぞ～」

ドアが開き二人が入って来た。
ひとりは金髪碧眼。しかし、制服をよく見ると・・・
「おはようございます。フランス代表候補生のシャルル・デュノアです。」
「お、男？」
「はい！僕と同じ境遇の人がいると聞いてここに来ました」
すると突然一夏が耳を塞いだ。

「「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」」」」
窓が割れんばかりの高い声が響いた。
「2人目の男の子！」
「それも守ってあげたくなるようなタイプ！」
「金髪碧眼！それに紳士タイプ！」
「「「生まれてきて、よかったーーーーー」」」
見事に27人［箒、セシリア、一夏を除く］の声がシンクロした。
「はいはい～皆さん静かにしてくださ～い。もう一人が挨拶できませんよ～」

もう一人は銀色の髪に、片方の目に眼帯をしていた。
しかし、どこかその雰囲気は冷たく氷のようだった。

「挨拶をしろ。ラウラ」
「はい。教官」
「今は教官ではない。先生と呼べ。」
「はい。ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
その立ち振る舞いはまさしく軍の関係者だった。
｛確か、あの黒ウサギのロゴはドイツ最強とうたわれている、シュヴァルツェ・ハーゼだったか｝
するとラウラがこちらへ近づいてきた。

「！貴様がー」
パチン！
「ドイツの挨拶はこうやるのか？」
「！！」
ラウラは受け止められるとは思わず驚いていた。
「じゃあ、俺もするとしよう」
「ぐあ！」
突然ラウラが何かに吹き飛ばされた。
「貴様！いったいなにを・・・」
「何ってこれがドイツの挨拶なんだろ？なら挨拶を返したまでさ。」
そこには白式の翼を部分展開した一夏が立っていた。
「そうではない！それは何だと聞いている！」
「ん？これか？翼に決まってんだろ。目も悪いのか？」
ラウラも展開しようとするが、
「そこまでだ！」
「教官」
「貴様らアラスカ条約を忘れたのか？」
「あんなもん形骸化してるも同然だろが。」
「織斑、貴様そんなに処罰を受けたいのか？」
「そんなことよりさっさと終わらせろよ。時間ねえんじゃねえの？」
「ちっ！では各人ＩＳスーツに更衣し、第二グラウンドに集合！遅れるなよ！」
「「は、はい！」」

「あ、君が織斑君？はじめまして、僕は・・・」
「なあ、皆を騙して生活なんて出来んのか？」
「え？」
「いいよ。デュノア君そんな奴ほっとこう。私もう着替えたから案内してあげる」

「え、あ、うんよろしく」

第二グラウンド～～

「全員集まったな。では、これより1，2組合同授業を行う！」

「「はい！！」」

「では、本日より実践的な訓練を行う。まず、出席番号順に一人ずつ、

専用機もちにつけ！」

「よろしくね！デュノア君！」

各グループ賑わっていたが二つだけ静かなところがあった。

1つはラウラの班。まだそこはいい、一夏の班がひどかった。

全員1mは離れていた。

「それでは各班のリーダーの専用機もちの人はISを取りに来て下さい」

「はあ、何であたしがあれの班なの？」

「仕方無いじゃない。がんばりましょ」

一夏は打鉄を持ってくると・・・

「お前らで勝手にやれ。俺は何もしない」

そのままPICで浮いて横になってしまった。

「ふん、誰が貴様なんぞに頼るか！」

そういい箒がリーダーになってしまった。

「さあ、みんなやろうか？まずは1番の人から頼む」

「OK！」

放課後～～～一夏の部屋兼楯無の部屋～～
「聞いたわよ。一夏。転校生をぶっ飛ばしたんだって？」
「はあ～何で知ってんだ？」
「今、学園中で噂よ？一夏が暴行したって」
「悪いが暴行じゃない。まったく何もしらないクズどもが調子にのりやがって」
「まあまあ、一応生徒会の方で注意しておいたから」
「あっそ」
「そ、それよりも明日だよね？」
「あ、ああ」
二人して顔を赤くした。
「じゃあ、明日は１１時に駅前でいいかな？」
「何で？一緒にでればいいんじゃないのか？」
「もう！女の子には準備がいるの！」

「お、おう」
「じゃあ、御休み」
「ああ、って早すぎだろ！まだ９時だぞ！」
スー、スー
すでに寝息が聞こえていた。

はあ、何でこうなんだ？
一夏も夢へと落ちていった。

第１２話　デートと想い

ラウラ・ボーデヴィッヒの手記より抜粋～～
今日、織斑一夏に接触したがやはり教官の汚点にしか過ぎなかった。
奴は学園全体から軽蔑されており授業も全く聞かず、さらには教官以外の教師には
敬語を使っているが教官には一切使っていない。これは教官を侮辱しているとしか、
思えない。このことから一つやるべき事が決まった。

織斑一夏の抹殺。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー
午前１１時駅前～～～
「暑いなあ。もう夏か」
俺は炎天下のなか駅前へと向かっていた。
本来なら涼しい部屋の中で白式とライトとお喋りでもしているはずだが、
今日は違った。なぜか？それは・・・・

楯無とのデートがあるからだ。
未だにこの気持ちが分からない。授業中でも楯無の事が頭から離れないのだ。
おまけに昨日は全くと言っていいほど眠れなかった。
そして時間の３０分前についてしまった。
まったく俺は遠足が楽しみで眠れないガキか、と思っていると俺が座った隣のベンチで女の子が絡まれていた。所望ナンパである。
「ねえねえ君、可愛いね俺たちと一緒にお茶でもどう？」

明らか誰が見てもチャライと思うほどの奴がいた。
金髪にピアスにチェーンがじゃらじゃら着けているのが複数いた。
「すみません。人を待ってるんで。」
「ええ～いいじゃん。そんな奴よりも絶対俺達の方が楽しませられるって！」
「バ～カ違うだろ、気持ちよくさせれるだろ。」
{ばかなの？馬鹿なのか？}
「ごめんなさい。あなた達には興味が湧かないから」
{うわあ～ザックリ言うなあ～でも聞き覚えのある声だな}
そう思いとなりを見ると・・・・・・・・・

楯無だった。
「こっちが下手にいれば調子に乗りやがって、いいから来い！」
無理やり手をつかもうとした時、
「おい。くそ野郎。さっさと手を放せ。潰されたいのか？」
体が勝手に動いていた。
「あ？何だてめえ！」
「いいから手をはなせ。」
「もっぺん言ってみろや！」
「耳でも悪いのか？」
「てめえ！」
「はあ、やっぱりクズだな。」
「な！」
ヒュッ！ボキ！
「あ？骨いっちゃったかな？」
「いてぇぇぇぇぇ」
「ヒイ！に、逃げろ」
「あ、逃げた。ビビリだな」
「あ、ありがとう。格好よかったよ」

「お、おう」
「それよりも行こうぜ」
「うん！」

とあるデパート内～～～
「ねえ！これどう？」
「うん。可愛い」
「もう、さっきからそればっかりじゃない！」
「むちゃ言うなよ。何時間たってると思う？」
「う～ん。３０分？」
「違う！１時間半だ！」

そうさっきから服をとっては着て俺に見せまた脱ぐ。これの繰り返しだ。
「え！そうなの？」
「はあ～まあいいや。で？どれを買うんだ？」
「う～ん、今日は買わない」
「はあ！なんじゃそりゃ。まあいいや次行こうぜ」
「うん！」

「楯無、何してる？」
「ん？腕に抱きついてる」
「そんな真顔で言われても」
「だめ？」
「だ、だめじゃない」
上目づかいで思わず顔を赤くしてしまった。
「ふふ！なら良いじゃない」

夕方～～～
「どうだった？楯無、今日は楽しかったか？」
「うん！楽しかったよ！ありがとう！」
「そうか、初めてだったがまあいいか。」
「ねえ？一夏」
「ん？なん・・」
ちゅっ！
「は？」
「そ、その、今日は楽しかったよ！また誘ってね」
「あ、ああ」
ドクン、ドクン、ドクン
相手に聞こえるんじゃないかって言うぐらいに心臓が高鳴っていた。
〜ああ、そうか。やっと分かった。この気持ちが。この気持ちは・・・・

俺はこいつのことが好きなんだ。〜
一夏はようやく気づいたあの公園であったあの日から好き
だったと言う事が、しかし・・・

〜でも、これは叶わないんだろな。俺の場合〜
一夏は昔から自分を好いてくれる人などいなかったのだ。
〜だから、俺は・・・・〜

楯無ｓｉｄｅ

｛な、なんで、私はキスなんかしたんだろう?｝

ドクン、ドクン、ドクン。

胸が疼くような感覚が残っていた。すると・・・

「楯無。」

「ん?な、何?」

「楽しかった!ありがとう!」

一夏が満面の笑みで笑うと楯無の心臓は一気に高鳴った。

｛そうか～何で気付かなかったんだろ?ようやく分かった。

この胸の疼きといい、心臓の高鳴りの正体は・・・・・・

一夏が好きなんだ。初めて会ったあの日からず～～っと、今日まで｝

お互いに、ようやく気付いた気持ち。
果たしてお互いの気持ちが通じ合う日はくるのでしょうか。
この結末はいつか語られることだろう。
意外と近い日に。

第１３話　憎しみと掴む手

織斑千冬の手記より抜粋～～
私は最悪の間違いをしてしまった。
どうして、あいつをあの時信じられなかったのか。
一夏・・・許してくれないだろうが・・・・・すまない
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

一夏の部屋～～
「あ、あの織斑君。ちょっといいかな？」
「ん？何か用か」
「今日、一緒に訓練でもどうかな？っと思って」
「一夏で良い。で？なぜ、そう思ったんだ？」
「え？いや、えっと」
「まあいい。分かった。第２アリーナでいいか？」
「うん、分かった。先に行ってるね」
「ああ」

第２アリーナ～～～～
「あ！一夏」
「よう、じゃあ始めようぜ」
「うん」
そう言い二人は専用機を展開した。

数分後～～
結果から言えば俺の勝ちだった。

「一夏、強いんだね」
「そうか？」
「凄いよ！だってまだ一夏ってＩＳ動かして間もないのにここまで強いなんて」
そう言いシャルルは俺を褒めていた。
動きがどうとか、間合いの詰め方とか正直聞いててうざかった。
すると、そこへ・・・
「ねえ！あれ見て。」
「うわ！ドイツのＩＳだ」
「確かドイツの第三世代機って試験段階じゃなかったの？」

そこには漆黒のＩＳがいた。
「おい貴様。貴様も専用機もちだそうだな。私と闘え！」
「悪いが断る。」
「なぜだ！」
「理由もなしに闘っても時間の無駄だ。」
「そうか。ならば戦わざる様にしてやる！」
突然、ラウラがエネルギー手刀をコールし切りかかってきたが、それをかわし雪片二型をコールした。
「な！」
「隙だらけだ。零月！」
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
辺りが白に包まれた。

「ぐ、が、貴様！」
「どうした？こんなものか？やはり所詮は候補生レベルと言うことか。」
「貴様らそこで何をしている。名前と学年を言え！」

「終わりか。まあいいや。いい暇つぶしは出来た。帰るかな」
「待て・・・まだ勝負はついていない。戦え！」
そう言うも既にＩＳのダメージレベルＣを超えている。
「おい。ボーデヴィッヒ。まだお前がそんな玩具で俺と闘うって言うなら
殺すぞ」
ゾクッ！
何か得体のしれないものがラウラの体を駆け巡った。
{何だ。今のは。この私がこんな奴に恐怖しているとでも言うのか}
実際ラウラは気づいていないが手が恐怖で震えていた。

「はあ～。この程度か」
「ど、どこへ行く！」
「興ざめだ。お前と闘っても面白くない」
そう言い一夏は去って行った

夕方、一夏の部屋～～～
「おい、シャルル」
「ん？何かな？」
「いい加減、男装するのはやめたらどうだ？
シャルロット・デュノアさん。」
「！！！」
シャルロットの体が大きく動いた。
「な、何の事かな？僕はシャルル・デュノアだよ？」
「まだ、薄情しないのか？まあいい。証拠を見せてやる」
そう言い俺はシャルロットの胸に手を置いた。

「え？い、一夏？」
「シャルロット。呼吸してみろ」
「え？」
「人間には二つの呼吸方法がある。一つは腹式呼吸。もう一つは胸式呼吸。
男性は大体は呼吸するとお腹が動く。女性ならば大体は胸が動く。
つまりはお前が呼吸をして胸が動いたら女性、お腹が動いたら男性の確立が、
高いって訳だ。さあ、やってくれよ。呼吸ぐらい出来るだろ？」

「ごめんね一夏。」
「ようやく言う気になったか？」
「うん」
そう言うとシャルルは服の下からコルセットを取り出した。
「うん。一夏の言うとおり、僕は女の子なんだ。
僕の話聞いてくれる？」
「ああ」
シャルルは静かに話し始めた。

結果から言えばシャルロットはデュノアの実の娘ではなく、愛人の子だという。
「今、デュノア社は経営難でね、こうでもしないと政府から今度の、

選定で落ちればＩＳ製造の資格を剥奪されるんだ。」
「だから、イレギュラーである俺に広告塔として近づき、白式のデータを、
奪おうとした訳か」
「うん。ごめんね一夏」
「それで？お前はどうしたい？」
「え？」
「だからどうしたい？」
「僕は・・・」
「シャルロット。」
俺はあるものを見せた。

「え？これって！」
「デュノア社のデータだ」
そこにはデュノア社の見られたくはないデータが大量にあった。
「でも、どうやって！」
「そんなことは今はどうでもいい。このＥＮＴＥＲキーを押せば、このデータを世界中にばらまけるぞ」
「でも、そんな事をしたら！」
「まあ、今の社長は一生日の目を見れないな。」
「それは・・・・・」
「お前がしたい事をしろ。でも覚えておけ、もうお前は一人じゃない。
お前には俺がついている。俺の手を掴め。シャルロット」
「・・・・・・・・・・・・・」

数分考えたシャルロットは、ＥＮＴＥＲキーに指を近づけていき・・・
押した。

「これが、お前のやりたかったことか？」
「うん。僕が掴む手はもうデュノアじゃなくて一夏の手だから」
「そうか」
「一夏、君は一体何者なの？」
「俺か？俺は、ただの惨めで弱い学生だよ」
笑いながら一夏は言った。

余談～～～
翌日のニュースはデュノア社の社長が捕まり、
新しく建て直すことが決まり、騒いでいた。

翌日、第３アリーナにて～～～
「あら？鳳さんではありませんか？」
「ん？セシリア？何でいんの？」
「ええ、まあ少しＩＳを動かそうかと思いまして。」
「そう、じゃあこの前の決着と行こうかしら？」
「いいですわね」
二人がＩＳを展開し始めようとした瞬間、二人の間を何かが通った。
「何よ！」
「誰ですの！」
そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを展開した、ラウラが立っていた。

第１４話　戦いとタッグ

織斑一夏の軌跡その?～～～
俺には幼馴染と言われるものがいるらしい。
俺には自覚はないが。
まあ、そいつには一人、姉がいた。
篠ノ之束である。その人は天才だった。俺と同じくらい。
「へ～凄いね、君！お友達になろうよ！」
これが篠ノ之束との出会いだった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第三アリーナ～～～
「あなたは！」
「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」
「ふん。実物よりもデータの方が強く見えるな。やはり、古いのと人が多いことぐらいしか、
取り柄のない国と言うことか」
「な、なんですって！」
「あなた、イギリスを侮辱しますの？！」
「そんなことはどうでも良い、かかって来い」
「いいじゃない。ケンカ売ったこと後悔させてやるわ！セシリア！」
「ええ！そうですわね！」
「ふん」
戦いが始まった。

「おい、シャルル。新社長はどうだった？」
「うん。とても優しい人だよ！でも、まだ第三世代の着手には時間がかかるみたい。」
「まあ、そうだろうな。当分は無理じゃね？」
二人が第三アリーナに入ると騒がしかった。
「ん？なんだろう？」
「さあ？どっかの馬鹿どもがケンカでもしてんじゃねえのか？」
「ねえ。何かあったの？」

「今、鳳さんとセシリアとボーデヴィッヒさんが模擬戦してるんだよ！」
「ふ～ん。らしいよ一夏」
「あっそ。興味無いな」

「あ～もう！。何なのよ！あの武装は！」
「何だ？ＡＩＣを知らんのか？」
「ＡＩＣ！やはりそうでしたか。相性最悪ですわね」
ＡＩＣとは対象の物体の動きを止めることができるもの。

「やはり、こんなものか。そろそろ終わりにさせてもらおう」
そういいラウラは背中からロープ状のものを射出し、二人を捕らえた。
「くっ！」
「きゃあ」
「そらそら！こんなものか」

動けない二人をラウラは殴っていった。何度も。
それにより装甲が落ちていき、ダメージレベルがCを超えた。
「やばいよ。あの二人。すでにCを超えている！一夏！」
「ん、ほっとけよ。あんな奴ら」
「え？何で？」
「何でって、自業自得だろ？自分の実力もわかってないのに格上に挑むなんて」
「でも！それじゃあ、あの二人が！」
「はいはい。分かったよ」
そう言い一夏は白式を展開しアリーナのバリアを切り裂いた。

「ふん。こんなものか。やはり弱いな。」
「おい。」
「何の用だ。織斑！」
「そろそろ弱い者いじめはやめたら？惨めだぞ？」
「あなたねえ！」
「お前、俺を殺したいほど憎いんだろ？だったら今度のトーナメントで、
決着付けようぜ？」
「ふ。それもそうだな。」
そう言いラウラはＩＳを戻し、帰って行った。

保健室～～～

「大丈夫？二人とも？」
「ええ、大丈夫よ」
「まあわたくしもですが、なぜ、止めたのですか！」
「はあ。そんなことすら分からなかったのかよ」
「なんですって！」
「まあまあ。一夏も喧嘩を売らないの」
「失礼しまーす」
「あ、山田先生」
「先生。どうでしたか？」
「はい。二人のＩＳはダメージレベルがＣを超えていました」
「え？そんな！それじゃあ試合はどうなるんですか？」
「もちろん。棄権と言うことになります」
「そんな！じゃああいつに仕返しできないじゃない。」
するとそこへ・・・・
ドドドドドドドドドドドド
地鳴りのような音が聞こえてきた。
「ん？何の音だ？」
「「「「「デュノア君！私と組んで！」」」」」
「え！何の事？」
「これの事だよ！」
一人の生徒が一枚の紙を見せてきた。
「ん？なになに。個人別トーナメントは二人一組での出場とする？」
「はい！実はこの前の時のように非常事態が起こらないとも言えませんので、
その時の備え、とのことです」
「だから、」
「「「「「わたしと組んで！デュノア君！」」」」」
相変わらず打ち合わせしてるのかと言うほどのハモりっぷりである。
「えっと、僕は・・・・・」
「悪いがシャルルは俺と組むから」

「「！！！！！！！！！！！」」
「え？一夏？」
「なんだ？お前らその顔は？不満か？」
「まあいいか。でもデュノア君の足は引っ張らないでよ！」
そう言い軍団は出て行った。・・・・・・・・

一夏の部屋～～～～～
「一夏、ありがとう」
「ん？何が？」
「だって僕が女の子なのをばれないようにしてくれたでしょ？」
「へえ～いいことしたじゃない、一夏。」
「よう。楯無」
「え！会長さん！」
「大丈夫だ。シャルロット。こいつも関係者だから」
「そ、私も事情は聞いてるから大丈夫よ。」
「そうですか。」
それから三人で語り合った。

「じゃあそろそろ寝ようか。明日試合だしね」
「うん。そうだね」
「ああ」
そう言いベッドに入ったが問題が発生した。
ベッドが一つ足りないのだ。
「なあ、俺はどうすればいい？」
「ん～。一緒に寝る？」

「な！」
思わず顔を赤くしてしまった。
〜もしかして・・・〜
「それが良いよ！一夏。」
「はあ！ちょ、シャルロット！」
「会長さんはどうなの？」
そう言うと楯無は顔を赤くしながら、
「わ、私は別にいいよ」
「た、楯無！」
「一夏は嫌？」
涙目で下から見られた。
「う・・・・」
〜そんな目で見たら断れないだろ〜
「分かった。一緒に寝よう」
「うん！」
嬉しそうに楯無は顔を緩めた。
しかし・・・・・

〜〜眠れない！〜〜
結局こうなった二人だった。

番外編。　一夏の幸せな過去。

本篇から少し時間を戻してみよう。

本篇から約１２年前。一夏が幼稚園に入る所から始めようか。
「は～い。皆さんおはようございま～す」
「「「「「「「「「おはようございま～す」」」」」」」」」

「は～い。よくできましたね！私の名前は、村井静香で～す。
静香先生って呼んでね」

「「「「「「「「「は～い。静香先生～～」」」」」」」」」

「は～い。よくできました。それじゃあ、みんなのお名前を呼ぶから、
名前を呼ばれたら大きな声で返事してね～。いいかな～」

「「「「「「「「「は～い。」」」」」」」」」

みんな元気いっぱいに声を出した。
後ろにいる保護者も幸せそうに笑っている。
一人を除いて・・・・

「え～と、中原由美さん！」
「は～い」
「はい！元気いっぱいですね～。え～と次は、織斑いち・・・」
名前を呼び掛けて先生は止まってしまった。
後ろの保護者も不思議に思い先生の視線の先に目を移すと、そこに

は・・・
「ここはあれを使って・・・・」
到底幼稚園児が理解できないような単語を言いながら、問題を解いていた。
「え～っと。織斑一夏君？」
「はい。何でしょうか。先生。」
「いや、何でもありません」
つい、敬語を使ってしまうほど大人びていたという。
これが織斑一夏の入園式の様子である。

数ヶ月後～～～～
園児たちもそろそろ幼稚園に慣れ始め、友達と言うものができ始めたころ・・・・
「あの～織斑君？」
「はい。何でしょうか？先生」
「えっと、お友達と遊ばないの？」
「ええ。みんな、僕と遊ぶのを嫌がってますから」
「それ、本当なの？」
「はい」
先生が園児たちに聞くと・・・
「ねえ。みんなどうして織斑君を入れてあげないの？」
「え～だってあいつが入ると面白くなくなるもん」
「どういうことかな？」
「あいつとサッカーするとあいつがほとんど点入れるもん！」
「何点ぐらい？」
「ん～この前は相手が泣いちゃうぐらい！」

幼稚園ではこんな一夏だが家での様子も見てみよう。
「ただいま！お姉ちゃん！」
「おお！お帰り一夏！よいしょー」
「うははは。高ーい！」
一夏が帰ってくると千冬は必ず一夏を抱き上げた。
「ん？一夏。また大きくなったか？重くなったぞ」
「本当？嬉しいなあ～」
一夏は本当に嬉しそうに顔を緩めた。
「ああ。本当だぞ！いつかはお姉ちゃんも抜かされるかもな。」
「えへへへ」
幸せそうな二人の日常。これが普通だった。あれが起こるまでは・・・・

今回のところはこれでお終い。これはまだ少年が幸せだと思っている頃の、
過去のお話。この続きはまた次回語られるだろう。

設定集

人物設定

織斑一夏

原作よりも頭が良くなっており、小学生の時には高校生レベルだった。

篠ノ之束と同等もしくはそれ以上の頭脳を持っているが小学生時代にそのことでいじめをうけた為、頭が悪いように、見せかけている。

ＩＳに関しては教本を丸三日で並の開発者よりも高水準の知識を増やした。

楯無が好きだと気付き一度は諦めようとするが本音の激励とさやからの言葉により、

臨海学校後に告白。今では超がつく程のバカップル

＜専用ＩＳ＞

原作と同じ白式だが相違点は天使のような白い翼が備わっており機動力が大幅に上がっており、

速さも搭乗者の事を考えなければ、ハイパーセンサーにぎりぎり捕まるか捕まらないところまで出せる。

＜主要武器＞

原作と同じく、雪片弐型だが機能が増えている。

主に、刀身部分を伸ばす、零落白夜の効果を持つ斬撃をとばす

＜必殺技のようなもの＞

この作品の白式は必殺技のようなものがあり、それぞれ共通するのは一定値のエネルギーを消費すること。

1、キック
一夏の目の前にエネルギーの壁が１０枚出て、それを通過するごとに足にエネルギーがチャージされ１０枚目を通過すると同時に相手に蹴りをいれる。
元ネタは知っている人は知っているある仮面ライダーのライダーキック。

2、剣
二つ目は、刀身を伸ばした、もしくはノーマル状態の雪片弐型を構えると、キックと同じように、エネルギーの壁が出現し、通過するごとにチャージされ、相手を切るというもの。
元ネタはこれも仮面ライダーからの必殺技。

3、零月
３つ目は雪片弐型から放つ飛ぶ斬撃。
零落白夜の効果を持つ。

＜アクセルとブラスター、アクセルブラスターについて＞
贈り主不明の荷物から一夏宛に届いたもの。
ストップウォッチと3枚のカードが入っていた。
＜アクセル＞
１０秒間だけ何ものにも追随を許さない圧倒的な速さが手に入る代わりに攻撃力が、
下がるが相手が理解する前に多くの攻撃を与えカバーする。

＜ブラスター＞
１０秒間のみ全てを粉砕する破壊力を得る。

その代りに速さが落ちるため一撃必殺タイプ。

＜白式の人格とライトについて＞

この作品の白式は一夏に時々話しかけます。時には一夏に助言をしたりします。

後、ライトについては、これはあるウルトラマンのキーパーソンがモチーフです。

ちなみに、白式の待機形態は原作ではガントレットだが今作ではこれもあるウルトラマンからの登場です。

言うなら、ネ〇サスの、エボルトラスターのようなもの。ＩＳが近くにいると発光し光り輝く。

鞘を抜けるのは一夏のみでそれ以外の人が触れると電流が走る仕組みになっている。

織斑千冬

原作ではブラコンぎみ?だったが今作では、ある間違いをしてしまい、

一夏との関係は冷めきっている。

篠ノ之箒

今作では、一夏を自分よりも下にみている。元々は普通の関係だったが、

小学校時代にある理由で嫌うようになった。

姉の束との仲は原作より良好。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生でブルー・ティアーズの専属搭乗者。

今作では、近距離戦も原作よりかは強い設定。世の中の男性を下に

見ている節がある。

更識楯無
ロシア代表でミステリアス・レイディの専属搭乗者。
今作のメインヒロインで一夏が公園で会った少女。
一夏が好きだと気付いて告白。その後無事に付き合う事になり、
今では超がつく程のバカップルにまで成長。

桜木さや
一夏とは同じ中学校。
一夏とは腐れ縁みたいなものだが本当は一夏に一目ぼれしていた。
しかし、事故に遭い他界。
臨海学校で精神世界で一夏と再会。
想いを告白し激励する事で戦う目的を見つけさせ、成仏した。
＜今作のオリジナル設定＞
今作では、光と闇がキーワードになっている。
遥か昔からこの二つの力は人に受け継がれ、争ってきた。
しかし、遥か昔に光が闇を封印し、同時に己も眠りにつくことにより一時は平和になったが、
現代の人間は心の闇が多すぎて封印が解けてしまい解き放たれた。
そして、光も目覚め解き放たれた。
現在、光は一夏〜厳密には一夏と白式〜に受け継がれた。
闇は自らが器となることで半減のデメリットを無くした。

設定集（後書き）

おはようございます。ケンです。前に言っていた設定集です。
出すのが遅れてすみません。恐らくネタバレはありません。
これは随時更新致します。
それでは！さよなら～

第１５話　　決着と始まり

個人別トーナメント当日～～～
「おはよう！一夏！」
「ああ。おはよう。シャルル」
まだみんなには言ってないのでみんなの前ではシャルルと呼んでいる。
「１回戦は誰だろう？」
「さあ？見に行くか？」
「そうだね」

「え～と。１回戦の相手は・・・」
「ラウラと篠ノ乃ペアか」
「そうだね」
「シャルル」
「なに？」
「頼みがある」

「待つ手間が省けたというものだな。織斑」
「そうだな」
「あの時の借りは、晴らさせてもらうぞ」
「やれるもんならやってみろよ」

「そのつもりだ」
カウントが始められた。
5・4・3・2・1・ビー

「織斑！貴様の相手は私だ！」
「邪魔だ、どけ篠ノ乃！」
「悪いがあいつは私が倒す」
「ふざけるな！あいつの相手は私だ！」
「おい。何勘違いしてんだ？」
「「なに？」」
「かかってこいよ。二人で」
「！貴様、なめているのか？」
「なめてなんかないさ。シャルルには手を出さないように言っている。
俺の力を見せるにはちょうどいいだろ？」
「ほう。面白い。貴様の無能さを全員に見せつけてやろう」
「いいから。さっさと来いよ。」
「「いくぞ！」」

ビット内～～
「はあ～凄いですね。織斑君。二人同時に戦ってますよ」
「ああ、そうだな」
「そ、そんな」

「これで、分かったでしょ？一夏が強いの」

「あの～織斑先生？」
「どうしましたか？山田先生？」
「気になっていたんですが、どうして織斑君はあんなにも織斑先生を嫌ってるんですか？」
「・・・・・・また今度話そう」
「は、はい」
千冬の意外な反応にそれ以上口を出せなかった山田先生だった

楯無ｓｉｄｅ
今、一夏が二対一でありながら圧倒していた。
「あ、あれが織斑君？」
「す、凄い」
周りの生徒達は一夏の強さに驚いていた
「ふふふ、一夏は凄いな～」
それを見て楯無は嬉しそうに笑った。

「「ぐあ！」」
「おいおい。こんなもんかよ。情けないな。」
「貴様～～～～」

「もういいや。そろそろ終わりにしよう」
そう言い一夏は雪片弐型の刀身に触れると伸びた。
「の、伸びた!?」
「終わりだ!」
もう一度触れると剣にエネルギーがチャージされ青白く光っていた。
「ちっ!」
「お、おい貴様何をする」
箒を前に押し出し壁の様にした。
「余所見厳禁、火気厳禁ってな」
「しまっ!」
すぐさま箒が距離を取ろうとするが、
「遅い!せいやぁぁぁ」
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
箒の打鉄が戦闘不能になり停止した。
「くそ!」
「後は・・・・」
剣と剣がぶつかり火花が散った。
「見えてんだよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「織斑一夏〜〜〜〜」
「なぜ、貴様はそこまで俺を憎んでいる?」
「教官はかつてモンド・グロッソ二連覇と言う偉業を成し遂げられたのに、
貴様と言う存在のせいで教官はそれを逃した。この意味が分かるか!織斑一夏!」
その時白式から白いオーラのようなものが放出された。
「な!何だこれは!」
「ふざけんじゃねえぞ!俺はあいつのせいでどれだけ、
人生を狂わされたと思っている!」
「何?」
「あいつがブリュンヒルデなんかになったせいで、俺に近寄ってく

る奴らは、
みんな俺に勝手に期待して、勝手に失望して、勝手に離れて行った。
学校でもそうだ。全員、俺を俺として誰も見なかった。
俺は何もしていないのに、ただ友達が欲しいだけなのにできない。
お前にこの気持ちが分かるか？ラウラ・ボーデヴィッヒ！」
「！！！！！」

一夏は叫びながら泣いていた。
「一夏ぁぁぁぁぁぁ」
「「！！！」」
「君は一人なんかじゃない！友達なら既に近くにいる！
僕や会長さんも君の隣にいる！ずっと！」
「シャルル・・・」

「ふ、ふん！馬鹿馬鹿しい。そんな小さいものを望んでどうする。」
「小さくてなかなか見えないから望むんだ！」
「なら貴様はそんな物が力になるとでも？」
「そうだ！一人で倒せなくても二人、三人、それ以上いればその分、
力も上がる。それが真の強さだ！」
「違う！力の大きさが強さだ！そんな物に頼っていては、
強くはならない。」
「いいさ。見せてやる」
「「いくぞ」」

「ぐあ！」
ラウラは壁に叩きつけられた。
「まだ、終わってねえぞ！来いよ。」
「言われなくてもそのつもりだぁぁぁぁぁぁ」
ラウラはそう叫ぶと眼帯を外した。
「それは、確かヴォーダン・オージェだったか？」
「そうだ！貴様には使う必要はないと思っていたが、私の全力で貴様を潰す！」
「は！面白い。かかって来い」

そして、試合は終わりへと近づいていく。
「はあはあ」
「確かに反応速度等は飛躍的に上がったみたいがそれだけか？」
「黙れぇぇぇぇぇ」
ラウラは瞬時加速（イグニッションブースト）で一夏に近づくが・・・・
「これで、終わりだ」
一夏は雪片弐型を両手で持ち、そして・・・・

「零月！」
そのままラウラへとまっすぐに振り下ろした。

「終わったか。」
一夏は後ろを向き離れようとした時・・・
「！！！」
「何が終わっただって？織斑一夏！」
「ちっ！ＡＩＣか」
「左腕は無事のようだが片腕だけでは何もできまい。終わりだ！」
ラウラが一夏に砲撃しようとした時・・
「残念だが終わるのはお前だ！」
突然、雪片弐型の刀身が伸びラウラを壁際へと押し込んだ。
「くそ！こんなもの！」
ラウラが掴んでいる手を離し脱出しようとするが、
「いいのか？離すと一気に剣がお前を貫くぞ？」
「くそが！」
「さあ、フィナーレにしようか、ラウラ・ボーデヴィッヒ」
一夏が飛び上がると同時に１０枚の壁が現れた。
「くらえ！これが俺と白式の力だ！」
「くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」
壁をすべて通り、ラウラに蹴りを入れたと同時に試合終了を知らせる、
ブザーが鳴り響いた。

「やったね！一夏！」
「・・・・・」
一夏はずっと空を見ていた。
「一夏？どうしたの？」
「何か、来る。」

「え？」
その時・・・・・・
ズドォォォォォォォォォン
アリーナのバリアを突き破り何かが落ちてきた。

「あれは・・・・・」
〜一夏さん！〜
〜ライトか？どうした？〜
〜気をつけてください！あれが、闇です！〜
「！！あれが、闇。」

そこには、闇に包まれた何かがいた。

第１６話　　強さと理由

ＩＳ学園上空～～～
「ふむ。やはりこの方法で正解だったようだな。おかげで力も、１００％フルに使える。それにどす黒い闇を感じる。そいつを使うか。」
黒い発行体がＩＳ学園へと降下していった。

ビット内～～
「山田君。すぐに警戒レベルを最大にまで引き上げろ」
「は、はい！」
アリーナに非常事態を知らせる警報が鳴り響いた。
「それと、突入部隊をすぐさま編成する。部隊は教師陣で形成させ、一組５人で形成させろ」
「は、はい！」
そう言い麻耶は自分の装備を取りに走って行った。
〔何なんだ。今年は。襲撃が多すぎる〕

アリーナ内～～～
「お前、誰だ？」
「ふふふ。ここでは初めましてのほうがいいかな～？光」

「お前が闇の継承者か！」
「ん～半分正解で半分間違いかなあ～」
「何？」
「光は人に受け継がせたみたいだけど、それじゃあ力は半減する。
それではお前には勝てない。だから、私は人に受け継がせるのではなく、
自分がその器となり力を半減させずそのままつかえるようにしたの」
「つまり、その姿が今の貴様の姿という訳か」
「まあね～それよりも・・・」

闇は倒れているラウラへと近づいて行った。
「何をする気だ！」
「まあ、見てなって」
「だ・・・誰だ？」
「ねえ、あなた力欲しい？」
「な・・・に？」
「あなた、あいつが憎いんでしょ？」
「ああ、欲しい。私が最強である力、あいつを殺す力が欲しい！」
「ふふ、じゃあ、あげる」
そう言い闇は手から闇を出し、ラウラにぶつけた。
「さあ、その闇を解放しろ！」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
すると、ラウラが闇に飲み込まれ悪魔の様な姿へと変わった。
「これは？」
「これは私の力の一部よ。対象の心の闇を増幅させて暴走させる。
この暴走は誰にも止められない」

「おおおおおおおおおおおおおおおお」
「ちっ！シャルル！今すぐ篠ノ之を連れてこのアリーナから出ろ！」
「でも、一夏は！」

「俺はあいつを倒さなきゃならない」
「分かった。でも絶対に帰ってきてね」
「ああ。約束だ！」
そう言い一夏は暴走しているラウラに、シャルルは箒を背負ってアリーナから出て行った。

「あ～あ。逃げちゃった。」
「さあ、これでゆっくりとできる・・うお！」
暴走したラウラが一夏へと剣を振り下ろしてきた。
〜一夏さん！〜
〜どうした？〜
〜今、あの人は闇によって暴走しています。それを止める方法はただ一つ〜
〜どうすればいい？〜
〜闇と同じように光をぶつければいいのです〜
〜分かった〜
「ふ～。さてと。やるか」
「ん、どうしたの？もしかして降参？」
「いいや。あいつを止めるんだよ」
「言ったでしょ。それは無理だって」
「無理じゃねえよ。この世に絶対なんてないんだよ！」

すると一夏の周りに光が溢れて来た。
「これは？」
〜それをぶつけて下さい！〜
「分かった。なあ、お前確か、力が欲しいんだっけ？
ならその程度の力を貰ったくらいで暴走してんじゃねえよ！」
一夏は光を球状にしラウラへとぶつけた。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
ラウラのＩＳが解除され、倒れた。
「闇が消えた？」
「簡単な話だ。お前のやり方を真似ただけだよ。」
「だが、一度見ただけでそれを自分の物に出来るものなの？」
「俺は天才だからな」

「・・・貴方、名前は？」
「俺は織斑一夏だ。」
「そうか、覚えておく。今日のところはこの辺で、引き上げるとするわ」
「待て！」
闇が発行体となってアリーナから出て行った。

「織斑君！侵入者は？」
「帰りましたよ。」
「へ？帰った？」
「ええ」

ラウラｓｉｄｅ
「ん？ここは。」
「目が覚めたか」
「お前は・・・」
「ここは保健室だ。目立った外傷は無いが２・３日は全身に痛みが、残るが、まあ我慢しろ」

「なぜ、貴様はあそこまで強い？」
「悪いが俺はお前が思っているほど強くないさ」
「しかし、現に貴様は私に勝ったではないか」
「お前はなぜ、強くなりたいと思う。」

「私は・・・・」

「理由が無いのならこれから探していけば良い。
ラウラ。人生は長いからな」
「織斑・・・」
「一夏でいい」
「そうか。一夏、貴様にはあるのか？理由が」
「まだ俺にも無い。だから、これから探していくさ」
「そうか」
「ああ。じゃあな。ラウラ」

夕方～～～～
一夏の部屋～～～
コンコン。

「ん？誰だろう？は～い」
「あ！二人ともいましたか。」
「どうしたんですか？先生。」
「はい！実は今日から大浴場が使えるようになりました！」
「「え？」」
「曜日毎に使える日を決めたんです。さあさあ、二人とも行ってきてください」

大浴場～～～
「どうする？シャルロット。お前から入るか？」
「いや、いいよ。一夏から入りなよ」
「そうか、なら先に入らせてもらう」
「うん。ごゆっくり～」

「ふ～。いい湯だな」
ガラガラ
「は？」
そこにはバスタオルで体を隠し、顔を赤くしたシャルロットがいた。

「い、一夏入ってもいいかな？」
「何だ。シャルロットか。ああ、いいぞ」

「ねえ、一夏。」
「ん？何だ？」
「僕ね、明日みんなに言おうと思うんだ。」
「！そうか。お前の好きなようにすればいい」
「うん。ありがとう一夏」
「何がだ？」
「一夏のお陰で僕は自由になったんだよ？
そのお礼だよ。」
「俺は何もしていない。決めたのはお前だ。」
「それでもだよ」
「そうか。どういたしまして」
「ふふ。先にあがるね」
「ああ」
そう言いシャルロットは大浴場から出て行った。

翌日～～～～
「はあ～皆さん、おはようございま～す。」
その姿は疲れ果てていた。
「皆さんに転校生を紹介しま～す。」
「え？また転校生？」

ガラガラ。
「おはようございます。シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」
「え～と、デュノア君はデュノアさんでした。は～また部屋割り考えないと・・・・」

「「「「「え？女の子だったの！」」」」」

おっしゃる通りです。

「では、授業を始めま～す。は～」
ため息の多い山田先生であった。

屋上～～～～
「もしもし？」
「やあやあ～箒ちゃんお久～の金平糖～」
「実は・・・・」
「うんうん。皆まで言うな。欲しいんでしょ。
ちゃ～んと準備してあるよ。箒ちゃんのための箒ちゃんにしか、
使えない、白とは対をなす赤色が・・・・
その名は・・・・・紅椿」

第17話　楯無と想い

これは、ある恋する少女の物語である。

トーナメントから3日後～～

「ね、ねえ一夏」

「ん？どうした？楯無」

今俺は部屋で楯無と二人っきりでダラダラしていた。

シャルロットが女の子と判明し部屋割りが変えられた。

俺にとっては最高のシチュエーション、ゲフンゲフン。もとい元の、

部屋割りに戻ったのである。

「えっと。その」

「ん？トイレか？」

「バ、バカ！違うわよ！その、今日暇だし買い物にいかないかなあ～って

思って、どうかな？」

「つ、つまり、それはデートか？」

「う、うん」

二人して顔を赤くして俯いてしまった。

両想いなのに気付かないとは鈍感である。

ちなみに作者はそういう経験はない。

「じゃ、じゃあ、行くか？」

「うん！行く！行く！絶対に行く！」
「お、おう。じゃあ門のところ待ってるから」
「うん」
そう言い一夏はそそくさと行ってしまった。

数分後～～
「う～どうしよう。どの服きていこうかな～これもいいけど、これも良いし、
あーもう決められない！」
既に部屋はベッドの上も含めて服だらけである。
「あ！そうだ！こんなときこそ、彼女たちの出番だわ！」
そう言い楯無は携帯を取り出し誰かに電話し始めた。

5分後～～～
「やっほ～たっちゃん呼んだ～？」
「失礼します」
「おじゃ～ましま～す」
上から順に薫子、虚、本音である。

「うわ！どったの？たっちゃん。こんなに服を出して」
「もしかして、どこかに出かけられるのですか？」
「うん、まあ・・・」
「もしかして、おりむーとデートですか～？」
「！！！」

湯気が出るくらい顔を赤くしてしまった。
「むむ！それは本当なのかな？たっちゃん。」
「うん。まあ」
「では会長は好きなのですか？」
「べ！別に一夏の事なんかす、好きじゃないもん！」
「会長、わたしは誰も織斑君のこととは言ってませんが」
「！！うぅ」
「うわ！たっちゃん顔真っ赤！でもこれは良い取材材料ね。後で話を聞かせてもらうわよ。たっちゃん」
「それよ～りも～服～のこ～とだ～よ～」
「それもそうね。じゃあたっちゃん動かないでよ」
「う、うん」

数分後～～～～
「完成だわ！」
「ほえ～か～わ～い～いです～よ。会長～」
「これで織斑君も多少は気にするでしょう」
「そうかな？」

ＩＳ学園、校門前～
「はあ～暑いなあ～」
すると・・・
「お、おまたせ／／／／一夏」
「遅かったな。たてな・・・・」
「どうかな？」
「・・・・・・・・・・・・」
楯無の服装を見て一夏は固まってしまった。
「似合わないかな？」
「い、いや！めちゃくちゃ可愛い！可愛すぎて言葉も出ないくらい、見とれていただけだから！」
「本当？」
「ああ、本当だ！」
「ふふ、そうか、よかった」
「じゃあ、行くか？」
「うん！」

「今日はどこに行くの？」
「ん？今日は今度行く、臨海学校の水着を買いに行って、そこで昼飯でも食べようかなって思ってるんだが？」
「あ！そうか。もうすぐ臨海学校だったね」
１年生は夏休み前に臨海学校に行くことになっている。
ちなみに２泊３日。

デパート内～
「うわ～結構込んでんな。」

「そ、そうだね」
{どうしよ～薫子から言われたあれを実行するか、しないか。う～ん}
幸せな悩みである。
{え～い。ままよ}
そう言い、楯無は一夏の手をとった。
「た、楯無？」
「何？一夏？」
「何って、お前」
「さ！早くいこ！」
「お、おい！」
一夏の顔は言葉とは裏腹に幸せそうな顔だったと言う

「これなんてどう？一夏？」
「ん、そうだな。これにするか」
「分かった。じゃあ会計してくるね！」
「ああ悪い。頼む」
そう言い楯無はレジへと走って行った。
{はあ～何で楯無は俺みたいな奴と一緒にいてくれるんだ？俺と一緒にいてもあいつには迷惑しかかけないのに。}
するとそこへ・・・・
「ちょっと、そこの男子」
{出た～勘違い野郎}
{白式、そう言うなら勘違いブスだろ}
{はは！確かに}
「ちょっと！聞いてるの！」
「はあ～何だよ。何か用か？」

「そこの水着片付けといて」
ＩＳと言うものが世に出てから男尊女卑から女尊男卑に変わり、こういうことなどよくあることなのだ。

「嫌だ。自分でしろよ」
「何？あんた、立場分かってんの？」
「悪いが俺はあんたの言う事を聞く義理はねえよ。ば～か」
「あっそう。じゃあ仕方ないわね」
そう言い店員は警備員を呼ぼうとするが、
「すみません」
「ん？あんたの男？躾くらいしときなさいよね」
そう言うと立ち去って行った。
「ごめんね、一夏」
「いやいいよ。うざい勘違いブスがどっか行ってくれたし」
「ふふ。それはないでしょ。まあ確かにあれはないけどね」
「確かに」
「行こ！一夏」
「ああ」
そう言い二人はまた手をつなぎ出て行った。

夕方～

「あ！見て一夏」
「ん、あれは俺たちが初めて会った場所か」
そこは楯無と一夏が出会い、そして別れた公園であった。
「一回行ってみようよ！」
「そうだな」

「あ～懐かしい～何も変わってないな～」
「そうだな・・・・・・なあ楯無」
「ん？何～？」
「何でお前は俺と一緒にいてくれるんだ？」
「え？」
一夏は疑問に思っていたことを楯無にぶつけた。

「正直、俺はまだ学園の全生徒から認められてるわけじゃない。
実際、お前前に何であんな奴と一緒にいるのって聞かれてたろ？」
「聞いていたの？」
「ああ、偶然な。それで、何でいてくれるんだ？」

「・・・・・・・・・好きだから」
「え？」

「私は一夏が好きだから隣にいるんだよ？」
「え？ちょっと待て。その好きって言うのは友達としてだよな？」
「ううん。違うよ。私は一夏に恋しているんだよ？
初めて会ったときからずっと今まで」
「・・・・・・・・・・」
「別に今、返事をして、とは言わないから臨海学校から
帰って来たぐらいに返事をして？」
「分かった」
「一夏、もう一度言うね。
私、更識楯無は織斑一夏の事が大好きです」
「楯無、俺は・・・・・・・・」
「その後の言葉は帰ってきてから言ってね！待ってるから！」
そう言い楯無は走って行った。

ようやく、想いを告げた少女。しかし、過去が邪魔をして、
己の想いを告げられない少年。
果たして、この恋は実るのか、否か。
それを決めるのは何者でもない少年である。

番外編。　姉弟が姉弟ではなくなった日

これはある姉弟の絆が壊れた日の話である。

一夏が学校で授業を受けていた時のこと・・・・・・
「は～い。じゃあこの問題解ける人はいるかな～？」
「はい！」
「はい！織斑君！」
「２５４８です」
「凄い！よくできたね～何でこうなるかと言うと・・・」
この時の一夏はまだ純粋で楽しく生活していた。

休み時間～～
「あいつうざくねえ？」
「そうだよな。この前のあれ、あいつがちくったらしいぞ」
「まじかよ！」
「それに、お母さんから聞いたんだけどあいつ、やばいらしいぜ」
「は？どういう意味だよ？」
「あいつ、子供の癖に大人よりも頭いいらしいぜ」
「まじかよ！化け物じゃん！」
「なあ？いい考えがあるんだけど」
この頃から一夏はあまり他人とは話さないでいた。
たとえ、休憩中であっても。
話すと言ってもあいさつくらいである。
それでもまだ、かえしてくれる人がいた。

今日という日まで・・・・

翌日～
「おはよう、皆！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
誰も一夏の挨拶に反応しなかった。
〜どうしたんだろう？〜
不思議に思いながらも一夏は座席へと向かうが・・・・
「え？なにこれ？」
一夏の机は落書きだらけであった。
「死んでしまえ！・消えろ化け物」などひどいものだった。
「誰だよ！こんな事やったの！」
一夏は周りに叫ぶが、周りは一切反応しなかった。
〜何で？何で、こんなことされるの？〜
結局その後担任が来て緊急にクラス会が開かれて、一応は解決したかに見えたが、
ここからが地獄の始まりだった。

さらに翌日～
何度も友達に話しかけるが一切口を聞いてもらえなかった。
〜何で、みんな僕を無視するの？〜
すると、「おい」
後ろを振り向くと・・・
「え？」
何が起こったのか分からなかった。
殴られたと気付いたのは頬に痛みを感じてからだった。

「何で？」
「お前、うざいんだよ」
「そうだ、そうだ！怪物はこっちに来るなよ！帰ってしまえ！」
「何で？僕は怪物なんかじゃないよ？」
「うるせえんだよ！」
そう言い何度も一夏の体を蹴り続けた。大勢の人間が・・・
「い、痛い！やめてよ！」
「うるせえ！怪物は正義の味方に倒されるんだよ！」
「おい！先生がそこまで来てるぞ！」
「分かった。おい、この事言うなよ。言ったらもっとしてやるからな」
一夏は泣きじゃくりながら頷いた。

休み時間～
「ふう～終わった。トイレ行こっと」
一夏が教室から出て行くのを確認すると、数人の男子が教科書を取り出し・・・
「どうする？これ？」
「破ろうぜ！」
「あ！いいね」
ビリビリ。
一夏の教科書を躊躇いもなく破りだした。
それを見ていた周りの生徒は・・・
「ねえ、最近織斑君、うざくない？」
「あ、それ分かる～」
周りも同じく一夏をいじめていた。
そして、一夏が帰ってくると・・・・
「何してんだよ！」
「ん？怪物が使うものを破いてんだけど？」

「てめえ！」
胸倉を掴むが・・・
「こら！織斑！何をしている！」
「助けて！先生！織斑君が急に殴って来たんです！」
「何？織斑！ちょっと来い！」
「な！違います、先生！こいつらが俺の教科書を破ったんです」
そう言い後ろを向くが・・・
「あれ？無い」
「言い逃れはよせ！織斑！職員室まで来い！」

「申し訳ありませんでした！」
そこには先生たちに頭を下げている千冬がいた。
「今回はけが人も出ずに済みましたが、くれぐれも気をつけさせて下さい」
「はい、申し訳ありませんでした」

「一夏。何故あんなことをしたんだ？」
「違うんだよ。お姉ちゃん、あいつらが僕の教科書を破ったんだ」
「そうか。」
「本当だよ！」
「ああ、分かっている。お前はそんな事をする奴じゃないさ」
「お姉ちゃん」
「帰ろう。一夏」

「うん」

それからも一夏に対するいじめはさらにエスカレートしていった。
幼馴染は掛け合ってくれなかった。さらに、クラスに収まらず、他クラス、
他学年の生徒にまで、いじめられていた。
しかし、一夏は耐えていた。千冬との約束のために・・・

しかし、ある日のこと・・・
「いい加減にしろよ。てめえら！ぶっ殺してやる！」
遂に一夏の怒りが爆発した。
「ひい！た、助けて！」
「うっせえ！」
「ぎゃあ！」
「おらおら、どうした今までの勢いは何だったんだ？」
一夏はいじめていた奴らを片っ端から殴り飛ばしていった。
「こら！やめなさい！織斑君！」
「うっせえ！てめえらもあいつらと同じだ！ぶっ殺してやる！」
遂に警備員まで呼ぶ事態にまでなってしまい、当然千冬が呼ばれた。
「あなたの弟のせいでうちの子がケガしたじゃないの！
どう責任取るのよ！」

「申し訳ありません！」
「謝罪だけで済むと思ったら大間違いよ！」

一時は裁判ごとにまで発展しかけたが、ケガが軽傷だということで、裁判にまで行くことはなかった。しかし・・・・

自宅～

「一夏、何故あんな事をしたんだ？」
「違うんだ！お姉ちゃん、あいつらが僕をいじめてたんだ！」
「一夏、そろそろ本当の事を言うんだ」
「お、お姉ちゃん？」
「一夏、さっき先生が言っていただろう。そんな事は無かったんだ。いい加減にお姉ちゃんに・・」
「もう良いよ！！」
「！！！！」
一夏が怒るとこを初めて見た千冬は止まってしまった。
「い、一夏？」
「結局はお姉ちゃんもあいつらと一緒だったんだ！
僕の言う事なんか信じないんだ！」
「ち、違う、一夏、私はただ・・」
「もう良い！所詮あんたから見た俺はそんなもんだったんだ！」
「一夏、私は、」
「俺にもう関わんな！」
そう言い一夏は部屋に戻ってしまった。
「い、一夏・・・・・」

その後、部屋に響いたものは千冬のすすり泣く声だけであった。

この世界で最も失くしてはいけない物は何だろうか？
それは人との絆なのかもしれない。

第１８話　さやと答え

臨海学校当日～
「は～い。皆さん、バスに乗りましたか～？」
「せんせ～い。おりむ～がいませ～ん」
「ああ、織斑君は諸事情で遅れてくるそうですから大丈夫ですよ～」
「そろそろバスを出しますがよろしいでしょうか？」
「はい。よろしくお願いします」
バスは旅館へと出発した。

一夏ｓｉｄｅ
俺は今、ある所に向かっていた。
「ふ～何年ぶりだ？ここに来るのは・・・・」
一夏がいる場所、それは墓地だった。
花を持ってある人物の墓へと進んで行った。
「久しぶりだな。暇だったろ？さや」
墓には桜木さやと書いてあった。

「ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。くれぐれも迷惑は、かけないように」
「「「「「よろしくお願いします！！」」」」」
「ふふ、元気がよろしいようで。私はここの女将です。何か分からなければ聞いて下さいね」

「あ！、おり～む～だ。おは、おは～」
「おはよう。本音」
「あなたは？」
「申し遅れました。織斑一夏と申します。3日間よろしくお願いいたします」
「ふふ。礼儀正しいですね」
「このくらい常識です」
そう言い荷物を置きに旅館内に入っていった。
「あいつのせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません。」
「いえいえ」

「う・み・だーーーーーーーー」
「はしゃぎすぎよ。あんた。ねえセシリア？」

「いいではありませんか」
「そうそう」
するとそこへ・・・・
「わ～お。おりむ～鍛えてるね～」
「まあな。男だからな」
「おお～贅肉が全然ないね～」
あおのトーナメントの後一夏を見直したのか、女子とはうちとけていた。
その中には謝罪しにきた奴がいるほどである。

まあ、相変わらずの奴もいるが・・・・

「織斑君！向こうでビーチバレーしようよ！」
「ああ良いぜ」
「い～ちか」
「ん？シャルロットとラウラか？お前らもするか？」
「うむ。たまにはいいかもしれんな！」
「ラウラがやるなら僕もしよっと」
「じゃあ始めるぞ！」
「「「「「おー」」」」」

食事会場～
「く～鼻が～」
「馬鹿！本ワサビをそのまま食う奴がいるか！」

「だって～」
「ほら、これ飲め。水だから」
「ありがと」
こんな事もあったりなかったり・・・・

「あれ？おりむ～こんなところで何してるの？」
「本音か。ちょっとな」
「悩み事～？」
「まあ、そんなとこだ」
「もしかしてお嬢様関連？」
「なぜ、分かった？」
「なんとなく」

「この事は誰にも言わないと約束してくれるか？」
「うん」
「分かった。あれは俺が中学二年の時だ・・・・」

今から二年前、一夏が中学二年の時～
俺はこの時荒れていたんだ。学校にもたまにしか行かずに毎日、
そこらの不良とのケンカ三昧だった。
そして、俺がたまに学校に行くといつもあいつが近寄って来た。

「おはよう！織斑君！」
「・・・・・・」
「無視？無視なの？」
「何だよ？うるさいぞ」
「やっとしゃべってくれた」
そいつの名前は桜木さや。
こいつは全員俺を避けているにも関わらず俺にかかわろうとしてきた。
毎日、毎日うざいくらいに・・・
そのうちに俺はあいつに心を許していた。
毎日、一緒に授業をさぼったり、しゃべったりして笑い合ってたんだ。
俺は幸せだった。
やっと欲しいものが手に入ったような感じだった。

でも、幸せにはなれないのが俺らしい。

それはさやと遊んだ帰り道・・・・
「あ～楽しかった！一夏は？」
「ん？俺も楽しかった」
「ふふ。そっかよかった。よーし、あの信号まで競争だ～」
「おい、こけるなよ。どじさや」
「むう～どじじゃないもん！」
さやが信号を渡ろうとした時・・・・

「さや！」
「え？」
「さやーーーーー」
さやは車にひかれた。
原因は運転手の飲酒運転だったそうだ。
「さや！さや！しっかりしろ！今、救急車呼ぶから！」
そう言い俺は携帯を取ろうとしたが・・・・
「だ・・・・・め」
「さや？」
「あ・・たしは・・・・もう・・・・だ・・め・・だから」
「そんな事ない！大丈夫だ！」
「ううん。あ・・なた・・はも・う、わ・・かって・・・・る、げほっ！」
「・・・・・・・・・」
言い返せなかった。
「わ・・た・・しは、た・・のし・・・かった。いち・・・かは？」
「ああ、俺も楽しかった！だからもうしゃべるな！頼むから・・」
「あ・・のね。わ・・たし、いち・・・かのこ・・とす・・きだよ」
「さや？おい、さや！しっかりしろよ！さやーーーーーーー」

「さやは俺のせいで死んだんだ。だから誰かを幸せになんて俺には無理なんだ」
「おりむ～それはちょっと違うと思うよ」
「え？」
「確かにさやさんはおりむ～の前で死んだけどそれは、

あなたが殺したわけじゃない」
「でも・・・・」
「だったら一夏が守ればいい」
「え？」
いつものゆっくりとした本音ではなかった。
「あなたの傍にいて傷つくんだったら一夏がその人を守ればいい。
一夏はお嬢様の事どう思ってるの？」

「俺は・・・・楯無が好きだ。」
「だったらもう答えは出ているよ」
「答えが？」
「そう。でもそれを見つけるのはあなたの仕事。
私の仕事じゃない。よく考えてみて」
そう言い本音は自室へと戻って行った。

「俺の答えは・・・・・」

少年は答えを見つけた時、真の強さと守るべきものを手にいれ、
真の戦士へと変わりこの世界に変革を与える。

これが意味するものは一体何なのか？
それは今の時点では誰にも分かるはずはない。
例え神が存在していようとも・・・・・

第１８話　さやと答え（後書き）

皆さん、こんにちは～ケンです。
お気に入り件数３５件！ありがとうございます！
感謝感激です！これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします。
如何でしたか？オリキャラが一人出てきましたが特に物語に、影響は及ぼしませんが一夏には多大な影響を与えます。
それでは、また次回～さよなら～

第１９話　憎しみと助け

千冬ｓｉｄｅ
「失礼します」
「どうぞ」
今、千冬は部屋に山田先生を呼んでいた。
「どうしましたか？」
「ああ、前に言っていた事を言おうと思ってな」
「あれですか」
「あれは一夏が小学生ぐらいの時だ・・・・」
＜この話は番外編でやっていますのでカット致します＞
「そんな事が・・・」
「ああ、私はあいつを信じてやる事が出来なかった」
「だから、彼はあんなにも貴方の事を拒絶していたんですか・・・」
夜は静かに更けていく。

翌日～
「ね、眠れなかった」
結局、昨日本音に言われた答えというものを考えていたら、
一睡もできなかった。
「答えって何なんだよ？」

「おはよ～おりむ～」
「ああ、おはよう本音」
「今日は大変だね、一日」
「まあな」
二日目の今日は午前中から夜まで各種装備試験運用とデータ取りが
１日中あるのだ。
特に専用機持ちは大量だから大変である。

「まあ、俺は手伝いだがな」
「そういえ～ば、おりむ～はなかったんだっけ？」
「ああ、白式はこれ以上はいらないって言ってるからな」
白式は雪片二型で拡張領域がマックスなので後付装備が実質存在しないのだ。

「おりむ～はまるで白式を人間みたいに思ってるんだね～」
「俺にとって白式は俺の家族同然だからな」
「ふ～ん」
「全員集まったな。では、これより準備にかかれ」
「「「はい」」」
〜相変わらず軍隊並のチームワークだな〜
「ああ、それと篠ノ之はこっちに来い」
「はい」
「今日からお前は専用機ーーー」
「ちーーーーーーちゃーーーーーーーん」
後ろの砂浜から物凄い勢いで砂ぼこりがこっちへ近づいてきた。
「・・・・束」
「やっほー。ちーちゃん久し振り。さあ愛を確かめーぐぴゃ！」
「うるさいぞ。束。それとここは関係者以外立ち入り禁止だ」
その人物はＩＳの実の生みの親である天才、篠ノ之束だった
「あいもかわらずのアイアンクローだね～それよりも・・・」
そう言うと束は急に後ろを向き、そして・・・
「箒ちゃ～ん」
思いっきり抱きついた。
バキッ！
「姉さん、殴りますよ？」
「う～既に殴った～」
そう言うもどこか二人は嬉しそうだった。

「それと・・・いっくーん！」
「お久しぶりです。束さん」
「やあやあ、久しぶりだね。大きくなったかな？」
「さあ？」

「そんな事よりも箒ちゃん！贈りものだよ～」
そう言いスイッチを押すと何かが落ちてきた。
「じゃじゃ～ん。これが今、存在するＩＳの中で最強のＩＳ。第４世代機、紅椿だよ～」
「これが・・・・」
そこには全身赤色のＩＳがあった。

「さあ、箒ちゃん。フィッティングとパーソナライズを済ましちゃおうか？」
「分かりました」
そう言い箒は紅椿に乗り込んだ。

「よ～し。終了！流石、私だね～もう終わちゃった。さあ！行ってみよう。箒ちゃん！」
「はい」
するとものすごい勢いで紅椿が飛んで行った。
「は、速い。あれが第四世代機」
皆は驚いていたが俺は別に驚かなかった。
〰なあ、俺たちの方が速くね？〰
〰当たり前だのクラッカーだよ一夏。〰
「ひとまず武装を説明するね～。まず右のが雨月（あまづき）、

左が空裂（からわれ）の二刀流だよ～雨月は打突に合わせて刃部分からエネルギー波を放出、
空裂は斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーを放出するよ～試しにやってみる？」
「はい。織斑来い！」
「何で？めんどくさい」
「いいから来い」
「む、あいつ立場が分かっていないようだな」
ラウラが展開をしようとするが・・・・
「ちょったんま」
「だが！」
「良いの。俺がやるから」
そう言い一夏は雪片弐型と翼だけを部分展開した。
「そんな物で勝てると思っているのか？」
「雑魚に本気は出さないんだよ。俺は」
「織斑～～」

二人は戦闘を開始してしまった。
「織斑先生！早く二人を止めないと！」
「構わんよ。山田君。篠ノ之に一夏の強さを知ってもらういい機会だ」
「そういえば、ちーちゃん。いっくんとは仲直りしたの？」
「・・・・・・」
「まだ何だね」
「ああ」
千冬は悲しそうに空を見上げた

「いつまで、避けるつもりだ、織斑！そんな事では私には勝てんぞ！」
「え？何？勝っていいのこれ？」
「何だと！」
「いや～だってさ最強のＩＳが最弱に負けるところを見せたらダメだろ」
「織斑ー」
箒は激昂し一夏に切りかかるが・・・・
「でも、もう飽きたからいいや」

「な！消えーー」
ズバン！
紅椿の装甲が無残に粉砕された。
「な？言っただろ？雑魚だって」

「お疲れ様。一夏」
「流石だな。一夏」
「ん？まあ、あれでも威力は加減した方だから修理も長くはかからないだろ」

その時・・・
〜誰か！助けて！〜
「！！」
「どうしたの？一夏？」
「いや、何でもない」
〜白式今のは？〜
〜うん。空耳じゃないよ。多分この子は暴走してるね。それも人為的に〜

〜それに、この子から闇の力を感じます。恐らくあいつの仕業かと〜
確かに待機形態が光り輝いていた。
〜そうか、分かった〜
すると・・・
「織斑先生！大変です～」
「どうしましたか？」
「これを！」
「！全員注目！、試験稼働は中止だ！すぐに旅館に戻れ！」
「え？何で？」
「早くしろ！処罰を与えられたいのか！」
そう言われるとすぐに直して帰ってしまった。
「専用機持ちはすぐに集合！篠ノ之もだ！」
「はい！」

「状況を説明する。二時間前にハワイ沖で試験稼働中だった軍用ＩＳ・
シルバリオ・ゴスペルが暴走した」
「「「「！！！！」」」」
「衛星からの画像によるとこっちに向かっているという。到達予想
時間は今から約５０分後だ。
上からの命令により、我々がこの事態を収拾することになった。
。今、シルバリオ・ゴスペルは超音速飛行中だ。
アプローチは恐らく一回だろう。意見があるものは挙手をしろ！」
「そのＩＳの詳細なスペックデータを要求します。」
「分かった。しかしこれは国家最重要機密だ。漏洩した場合、
委員会による裁判と最低二年の監視がつけられる」
「わかりました」
「これが、スペック・・・無い！」

「え？」
「これの事か？」
「貴様！ふざけてるのか！」
「うるさい。黙ってろ。年増。ひとまずは雑魚だな」
「一夏から見ればでしょ！僕らからは強いよ」
「それよりもどうする？」
「決まってんだろ。俺が倒す。それだけだ」
「「了解」」
「あ、ついでに周りの事も考えて二人は俺から５ｋｍ離れた場所で待機。
何かあれば言ってくれ」
「つまり、我々は周辺海域の監視という訳か。」
「ああ、そうだ。頼むぞ」
「「了解」」
「じゃあ、各々武装のチェックとエネルギー補充、３０分後に砂浜に、
集合。」
「待て！貴様ら！勝手に決めるな！作戦は私が・・・」
「織斑先生の作戦より一夏の作戦の方が単純で良いと思いますが？」
「私も同感です」
「貴様ら！いい加減にしろ！作戦は紅椿と白式で行く。決定事項だ！」
「あっそ。勝手にすれば？別に邪魔さえしなければどうでも良い」
「まあいい。織斑と篠ノ之は３０分後に海岸に集合しろ。いいな！」
「はい！」
「・・・・」

「さ～て箒ちゃん紅椿の整備を始めるよ～」
「お願いします」
「そんな怖い顔しないで美人が台無しだよ？」
「すみません」
「そんなにいっくんが憎いの？」
「ええ。あいつは何も苦労せずに力を手に入れてきた。昔も今もずっと。私はそんなあいつを殺したい！」
「箒ちゃん・・・・」
束は悲しそうにメンテを再開した。

第２０話　再会と仇

任務開始時間～
「よし、集まったな。ではこれより任務を開始する！」
「来い！紅椿！」
「はあ～白式～」
箒を赤いエネルギーが包みこみ紅椿が現れた。
俺も鞘を抜き白式を呼び出した。
「さっさと私に乗れ！」
「別に俺だけで良いのに・・・・」
「さっさとしろ！」
「へいへい」
任務内容は紅椿が白式を乗せて目標まで行くというものだった。
〔織斑、篠ノ之聞こえるか？〕
〔はい〕
オープンチャンネルから千冬の声が聞こえた。
〔今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間で済ませ。いいな？〕
〔はい〕
正直俺は聞かずに二人にプライベートチャンネルで話していた。
〔悪いな。せっかく準備してくれたのに〕
〔別にいいよ。頑張ってね〕
〔一夏、おそらく篠ノ之は浮かれてるぞ。気をつけてくれ〕
〔ああ。了解した〕
〔では！始め！〕
作戦が始まった。
物凄い速度で紅椿が動き始めた。
そして、数分後・・・
「あれか！」
見えたのは真っ白なＩＳだった。

「目標まで残り8秒・・・」
「もういい、結構だ」
そう言い俺は瞬時加速で奴に近づいた。
「おい、貴様！命令違反だぞ！」
{一夏！目標まで残り、3・2・1}
「消えろ」
俺はゴスペルに零月を喰らわせた。
「Laaaaaaaaaaaaaa」
甲高い声が聞こえた。
{流石だね～}
「まだだ」
ゴスペルはようやく戦闘モードに切り替わり翼が生えた。
「やっとか。さあ！始めようぜ、俺たちの殺し合いを！」

箒side
「何なんだ？この戦いは眼で追い切れない」
二人は高速で移動しながら、剣で切り、エネルギー弾丸を何発も撃っていた。
「なぜ、あんな奴があそこまでの力を持っているんだ！」
箒は二人に近づいて行った。

「弱いな、こんなものか」
既にゴスペルの装甲は所々砕けて、翼もボロボロだった。

「終わりにしよう。」
そう言い一夏が雪片を構えると目の前に１０枚、壁が現れた。
〜ライト！この攻撃に光を混ぜてあいつの闇は払えるか？〜
〜大丈夫です！〜
〜了解！〜
「喰らえ！」
一夏が放とうとした時・・・
「はぁぁぁぁ」
「な！邪魔だ！どけ！篠ノ之！」
紅椿を纏った箒が間に入ってきた。
「うるさい！こいつは私が倒す！そこで見ていろ！」
そう言い箒は福音と戦闘を始めてしまった。
「くそが！」
一夏も慌てて追いかける。

「はぁぁぁぁぁぁぁ」
箒は雨月と空裂で攻撃するがすべて避けられていた。
「くそ！なぜだ！なぜ、当たらない！」
「どけ！篠ノ之！早くしないとパイロットが死ぬぞ！」
「そんな事はどうでもいい！」
「ふざけんじゃねえぞ！」
一夏は箒に叫ぶ。
「力を手に入れて何様のつもりだ！優先すべきは人の命だ！」
「黙れ！私は奴を倒すそれだけだ！」
「てめえ！それでも専用機持ち・・・・」
突然一夏がしゃべるのを止めた。
ゆっくりと視線を下ろすとそこにはゴスペルの腕が一夏の腹部を貫いていた。
「て・・てめえ・・がはっ！」

ゴスペルは腕を戻し、一夏に向けて特大のエネルギー弾丸を浴びせた。
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「くっ！」
辺りに鮮血が舞った。
「ぐ・・・ま・・だ・・・だ」
一夏はゴスペルへと手を伸ばすがＩＳが解除し、海へと落ちて行った。
福音は戦線を離脱しどこかへ行ってしまった。
「くそ！織斑！」
箒が一夏を追いかけるが・・・・
突然、一夏を光が包みこみ消え去ってしまった。
「な！何だあれは！」
｛｛篠ノ之！命令だ、いったん戻れ｝｝
｛｛はい｝｝

「福音は現在、調査中だ。次の指示があるまで全員待機だ。」
「「「はい」」」」
辺りの空気は冷え冷えとしていた。
そこへ・・・
「おい。篠ノ之」
「なん・・ぐあ！」
ラウラが箒の胸倉を掴み壁に押し付けた。
「なぜ！貴様はあの時一夏の邪魔をした！あのまま攻撃が通っていれば、
作戦は何の被害も出さずに済んだんだぞ！答えろ！」
「離せ！」
「ラウラさん！落ち着いて下さい！」

「黙れ！答えろ！篠ノ之！」
「私は・・・・」
「どうせ、専用機を貰って自分が倒して評価をあげようとでもしたんだろう？」
「・・・・・」
「図星か？」
「もういいよ。彼女と話してても時間の無駄だよ。ラウラ」
「シャルロット。しかし・・・」
「それよりも福音の居場所を見つけるのが先決じゃない？」
「そうだな。すまない」
「良いよ。行こ？」

一夏ｓｉｄｅ
ここはどこだ？
何だか高い所から落ちているような・・・
ん？落ちている？
まさかと思い目を開けると・・・・・
「またかよーーーーーーーーー」
バッシャァァァァァァァァン
盛大に海に突撃した。
「お！来た来た。久しぶり～一夏～」
「ゲホッ！しょっぺ！久しぶりじゃねえよ。」
そこは初めて白式とライトに会った場所だった。
「で？俺は死んだのかよ？」
「いいや、死んでいませんよ」
「誰だ？お前」
そこには白く輝く甲冑を纏った女性がいた。
「はじめまして、マスター」

「は？いや、だからあんた誰？」
「ここで問題です。誰でしょう～？」
「ライト」
そこには３人の少女がいた。
「誰って言われても知らないぞ？」
「ふふ、知ってるよ？一夏は昔からずっっっっっとね」
「昔から？」
「これを見れば分かるでしょう」
そう言い騎士はある剣を出した。それは・・・・
「それって、雪片？」
「はい」
その剣は先代の雪片だった。
「まさか！いやそんなはずは・・・・」
「そのまさかだと思うよ。一夏」
「お前は・・・白騎士なのか？」
「はい。そうです」

「シャルロット。出たぞ。場所は３０キロ離れた沖合だ」
「流石ドイツ軍特殊部隊だね」
「そっちの準備は？」
「勿論、万全だよ」
「では、行くか。」
「了解」
そう言い二人はＩＳを展開し飛び立った。

「それでね、もう一人お客さんがいるんだよ」
「ん？まだいるのか？」
「ええ。どうぞこちらに」
「うん！ありがと」
その人物は・・・・

「さや。」
「久しぶりだね。一夏」
死んださやがそこにいた。

ラウラｓｉｄｅ
「覚悟は出来てるか？シャルロット」

「一生分なら」
「ふ、上等！」
ラウラのレールカノンが火を噴いた。
「Ｌａａａａａａａａ」
「初段命中！」

「織斑先生！これは明らかに命令違反です！」
「ちっ！こうなるとは思っていたが本当になるとは・・・・」

戦いは始まった。
親友の仇を討つ者。
そして、死んだ親友に会う者

そして、心優しき戦士は自分の涙を仮面に隠し、友の為そして愛する者の為に
剣をとり立ち上がる。全ては誰かの笑顔の為に。

第２０話　再会と仇（後書き）

こんにちは～ケンです。
如何でしたか？今回の話。
それでは～さよなら～

第２１話　決着と真の光

ラウラ・シャルロットｓｉｄｅ
海上で激しい戦闘が繰り広げられていた。
「ラウラ、お願い！」
「任せろ！」
ラウラが巨大なレールカノンを地面に置き、福音に向けて何発も放つが、
その全てをその機動力を用いて全て回避し、ラウラにむけ翼から、形成したエネルギー弾を拡散させながら放った。

「ラウラ！」
「大丈夫だ！シャルロット！戦闘方式を変更だ！一気にたたみかけるぞ！」
「分かった！」
そう言いシャルロットが何丁もの銃を出し一斉に撃ち始めた。
「今だよ！ラウラ！」
「ああ！」
福音の動きを銃の乱射によって動きを止めると、
ＡＩＣを使い、停止させた。
「シャルロット！そう長くはもたない。お前のシールドピアスで、とどめをさせ！」
「分かった！」
シャルロットがシールドピアスを展開し福音にめがけて何発も当てた。
「くらえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」
福音のエネルギーが尽きると同時に海へと落ちて行った。
「やっと、終わったね」
「ああ、後はパイロットと一夏を探せば終わりだ」

その時・・・・・・・
ドォオオオオオオオオオオン
「な、何？」
「まさか、セカンドシフトか！」
福音の翼が４枚から６枚に増え、
壊れていた装甲も全て回復していた。
「Ｌａ♪」
楽しそうな音を出しながらエネルギー波を海に向けて放った。
「な！海が割れただと！」
「ほんとにあいつ軍用なの？」
圧倒的な破壊力を秘めた兵器へと進化していた。
「く！行くぞシャルロット！」
「もちろん！」
二人は戦場へと行った。

一夏ｓｉｄｅ
「さや」
「久しぶりだね、一夏。二年ぶりかな？」
「あ、ああ」
「どうしたの？一夏らしくないよ？」
「すまない！」
一夏は急に土下座をしだした。
「一夏？」
「俺のせいでお前を死なせてしまった。俺がお前の人生を奪ったんだ！」
「一夏、顔をあげて？」
「さや」
「あなたのせいで私が死んだわけじゃない。一夏に責任はないよ？」

「でも・・・」
「はあ～いつまでそうやって現実から自分を切り離すつもりなの？
だから、弱いんだよ。いつまでたっても」
「・・・・・・・・」
「言い返せないの？呆れた。そのままじゃ、また失くすよ？大切な
人をいつまでも守れないよ？」
「俺に守る資格なんか・・・」
「ふざけないでよ！」
「！！！」
「いつまで、そうしてる気なの？あなたは何がしたいの？」
「俺は・・・・守りたい」
「聞こえない」
「俺は！守りたい！楯無をこの手で！でも誰かを愛したら弱くなる
気がするんだ。」
「確かに弱くはなるよ、でもそれを恥ずかしがることはない。
だって、それはあなたの本当の弱さじゃないから。」

「さや。俺、見つけたよ。答えを」
「何？」
「俺は守る。楯無を、ラウラを、シャルロットを
俺に少しでも関係があった人を守る！」
「どうして？」
「みんなの笑顔のためだ！」
「ふふ。それで良いよ。ようやく君は強さを手に入れた。
目的の無いに強さの行きつく先は獣だからね」
徐々にさやの体が薄くなっていく。
「さや」
「そろそろかな。目的も達成したし成仏するね一夏」
「ああ」

「一夏！好きだったよ！」
「ありがとう」
さやは光となって空へと上って行った。
「さや・・・・」
「一夏、そろそろ行かなきゃ。」
「ああ、あいつらが呼んでるからな」
「うん」
「お前らこれから俺と一緒に戦い続けてくれるか？」
「「「もちろんです！」」」
「じゃあ、行くか？」
「「「はい！」」」
俺は鞘を抜き空に高く振り上げると、光が集まって来た。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」
一夏が光に包まれた。

現実～～
「ぐふ！」
「ラウラ、大丈夫？」
「これが大丈夫に見えたら眼科をお勧めする」
「はは、そうだね」
二人の装甲はボロボロで動くことすらままならない状況だった。
その二人に福音がエネルギー弾をぶつけようとしていた。
その時・・・
「え？何これ？」
「これは！」
突然、周りの海が光はじめ、上空に光が集合していく。

「何だろう?何だかあたたかい」
「ああ」
そして、光が降り注いだ。
「うわ!」
「眩しい!」

「待たせたな、二人とも」
懐かしい声が聞こえた。
「「一夏!」」
そこには白式、第二形態、雪羅を纏った一夏がいた。

「織斑先生!」
「こんな事が・・・」
モニターには一夏が映っていた。
「白式、第二形態、雪羅・・・」
そこには全てを浄化する白が立っていた。

「大丈夫なの！一夏？」
「まあな。待ってろ、すぐに終わらせる」
「Laaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa
aaaaaaaaaaaaaaaaaaa」
まるで待ちわびていたように福音から闇が放出された。
「な、何だあれは！」
「大丈夫だ。」
そう言い一夏は手に光を集め始め、それをぶつけた。
「laaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa
aaaaa」
「よく、耐えてくれたな福音。さあ！かかって来い！」
「Laaaaaaaaaaaaa」
「さあ、始めようぜ！俺たちの闘いを！」
最後の戦いが始まった。
「凄いとしか言いようがないな」
「うん。」
眼前には音速で動きながら闘いをしている二人がいた。
福音はひたすら進化したシルバーベルから弾丸を散弾銃のように放っていた。

それを一夏は新たな武装、雪羅のシールドモードで防ぎつつ、
カノンモードと零月でひたすら攻撃していた。
「何だか、一夏楽しそう」
「そうだな」
二人は一瞬たりとも視線を放さず戦いの行く末を見ていた。

「楽しいなあ！福音！」
「Ｌａ♪」
福音も楽しそうな機械音を奏でていた。
そして、戦いはクライマックスへと向かう。

「せいやぁぁぁぁ」
「Ｌａａａａａ」
二人はお互いの全てを出していた。
「福音、そろそろケリをつけないか？時間の無駄だ」
「Ｌａ♪」
「潔し！行くぞ！」
一夏は翼を羽ばたかせ空高く飛んだ。
福音も全てのエネルギーを集結した特大の物を作った。
「行くぞ！福音！これが最後だ！」
１０枚の壁を通過するごとに輝きを増していく。
「Ｌａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ
ａａａａ」
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」
力は均衡していた。
「「いっけー、一夏！」」

「うおぉぉぉぉ。せいやぁぁぁぁぁぁ」
福音の弾丸を押し切り蹴りが入れられた。
「Ｌａ・ａａ」
まだ、手を伸ばそうとする福音に一夏は手を取り・・・・
「よく、やった。眠っていいぞ」
〜あ・り・が・と・う〜
それを最後に機能を停止した。
「「一夏！」」
「お疲れさん。」
きれいな夕焼けが３人を祝福していた。

「作戦完了、と言いたいですが命令違反なので反省文と事情聴取です♪」
「「え〜」」
一夏も教師には勝てなかったり・・・・

束ｓｉｄｅ
「ふふ〜ん。紅椿の稼働率は３０パーセントか。上々だね。それに、」
束の横にはモニターがあり一夏の戦いが記録されていた。
「僅か数ヶ月でセカンドシフト、それに生体再生、まるで、」
「まるで、白騎士の様だな。束」
「やあ、ちーちゃん」
「おう」
「ねえ、ちーちゃん」
「何だ？」

「仲直り出来るといいね。」
「本当にできるだろうか？」
「出来るさ。だってちーちゃんだもん」
「はは、意味が分からん」
「ねえ、ちーちゃん？この世界は楽しい？」
「そこそこにな」
「そっか。私はねー」
そこにはもう束はいなかった。

翌日～
「「「「ありがとうございました～」」」」
「はい。さよなら」
「おりむ～」
「本音」
「見つかった？」
「ああ。おかげさまでな」
「よかった。じゃあね」
「ん」
そう言い本音はバスに戻って行った。
一夏も乗ろうとした時、
「あなたが織斑君？」
「あんたは？」

「ナターシャ・フィルス。あの子のパイロットよ」
「そうか。で？何か？」
「ええ、ありがとう」
「そりゃ、どうも。ああ、それと伝言だ」
「誰から？」
「自分で考えろ。ナターシャ今までありがとう。また会えたら一緒に空を飛んでくれる？だとさ」
「それって！」
「ふふふ」
一夏はそのままバスに行った。

少年は過去を受け入れ力と守るべきものを手にいれ真の戦士となった。

第２１話　決着と真の光（後書き）

こんばんわ～ケンです～
眠たいです。如何でしたか？
ひとまず一段落しましたね
ここまでお読みいただきありがとうございます
感想も待ってます
では、さよなら～

第２２話　愛と楯無

ＩＳ学園～
「ふ～終わった～」
「皆さん、お疲れ様でした。明日はお休みですのでゆっくり休んでくださいね。
それと明後日は終業式ですからそれも忘れないでくださいね」
「「「「は～い」」」」

「お帰り。一夏！」
「ああ、ただいま、楯無。明日、暇か？」
「え？うん。暇だけど、どうかした？」
「明日、遊びに行こうぜ」
「それってデート・・・な訳ないか」
「何言ってんだ？デートだぞ」
「ふぇ？」
「ん？嫌か？」
「全然！いやじゃない！」
「はは。なら良い、じゃ、明日の１１時にここ集合で良いか？」
「うん」

翌日～
デート当日の日になった。え？時間を飛ばしすぎだって？それは作

者に言え。
「おまたせ。一夏。待った？」
「いや、全然。」
「今日はどこに行くの？」
「遊園地」
「遊園地？」
「そう、家を整理してたら無料券が出てきてさ。それで、期限がちょうど今日まで
だったから誘った」
「そっか、ありがとう！」

「着いたぞ。ここだ」
「ふぇぇぇ～すご～い！」
「ひとまずこれ見せてくるからちょっと待ってろ」
「うん！」

数分後～
「おまたせ。これを腕に付けとけ。証明書みたいなものだから」
「了解」
「じゃあ、行くか」
「うん！」

「うわ～すご～い！」
「はしゃぎすぎだろ！初めてじゃあるまいし」
「初めてだよ？遊園地きたの」
「へ？」
「私の家、ちょっと違うからこんなところとかは来た事がないんだ」

{そう言えばそうか。よし！}
「だったら楯無。今日は存分に楽しむぞ！」
「うん！」

「じゃあ、まずどこ行きたい？」
「う～ん、ジェットコースター！」
「分かった」
だが、失敗だった事を俺は数分後に思うのであった。
「一夏！もう一回行こ！」
「ちょ、ちょっと待ってくれ、うぇ、吐きそう」
かれこれ同じものを１０回は乗っている。
「じゃあ、次はあれ行こ！」
「ちょ、だから待ってくれ。吐きそう」

「ふ～楽しかった」
「・・・・・・」
既に一夏はヘトヘトだった。
「次はどこに行こうかな～」
「じゃあ、お化け屋敷行こうぜ」
「へ？」
「ん？怖いのか？」
「べ、別に怖くないもん！」
{勝った！これで少しは反撃できる}
しかし、これも間違いであった・・・・・

＜ここからは音声のみでお楽しみください＞
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ」
「ちょ！待った楯無！俺だ！俺だから攻撃しないで～」
「悪霊退散～」
「ちょ！待て。部分展開するな！俺に向けて撃つなぁぁぁぁ」
「お化けなんか消えて～」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「はあはあ、怖かった～」
「お前の方が怖いわ！」
何とも不運な一夏であった。

「そろそろ、終わりにしないと門限だぞ。楯無」
「え？もうそんな時間？」
「ああ」
「ん～じゃあ、最後にあれが乗りたい」
楯無が指さしたものは・・・
「観覧車？」
「うん」
「分かった。行こうか？」
「勿論！」

「それでは、お楽しみくださ～い」

従業員さんの明るい声と共に徐々に登り始めた。
「楽しかったか？楯無」
「うん！とても楽しかった！ありがとう一夏！」
「お、おう」
楯無の笑顔につい顔を赤くしてしまった。
〜そろそろ言うかな〜
一夏は臨海学校で見つけた答えを言うことにした。
「楯無」
「ん？何一夏？」
「この前の返事何だが聞いてくれるか？」
「う、うん」

「俺さ今まで怖かったんだ。大切な人が目の前からいなくなるのが。」
「一夏・・・」
「それでこんな目に遭うんだったら二度と大切な人は作らない。そう決めてたんだ」
「・・・・」
楯無は静かに聞いていた。
「でも、それはただ逃げてただけなんだ。あんな悲しい目には遭いたくないって。
でも、俺は決めた。大切な人が消えないように俺が守っていけばいいって、だから、楯無」
「何？」
不安そうな顔で一夏を見つめる楯無。
「楯無！」
「は、はい！」
「好きだ！初めて会ったときからずっと好きだ！だから、俺と付き合ってくれ！」
「！！！」

楯無が急に泣き始めた。
「ど、どうしたんだよ！」
「ううん。嬉しくて涙が勝手に・・・」
「返事は？」
「もう。分かってるくせに、私も好きです！付き合って下さい！」
「楯無！」
「きゃ！もういきなり抱きつかないでよ～」
「ハハ、悪い。嬉しくてな」
二人はいつまでも抱き合っていた。

「ふふ」
「どうしたんだ？楯無？」
「別に。」
「そっか」
二人は手を繋ぎながら幸せそうに歩いていた。

「ふ～ただいま～」
「ただいま」
「じゃあ、私はお風呂に入ってくるから」
「ああ、またな」
〜一夏、幸せそうだね〜
〜白式か。ああ、幸せだよ〜
〜ふふ、良い笑顔ではありませんか。ねえライトさん？〜
〜そうですね〜
俺は最高に幸せだった。
数分後～
「ふう～いい湯だった」

「お帰り、楯無」
「うん、ただいま。ねえ一夏？」
「なんだ？」
「髪の毛乾かしてくれないかな？」
「ああ、いいぞ」
「お願い」
そう言い俺は楯無の髪を乾かし始めた。
「サラサラだな。楯無の髪の毛」
「ふふ、ありがと」
「終わったぞ」
「ありがと」
その時、俺は楯無と目が合った。
「「・・・・・・・・・・」」
何かに引き込まれる様に俺は楯無の顔に近づいていった。
「一夏・・・」
「楯無・・・」
どんどん近づいていき、そして二人の唇が重なった。
「一夏・・・・・」
「楯無・・・・・」
二人はその夜何度もキスをした。

第２２話　愛と楯無（後書き）

こんにちは～ケンです。今日で３連休が終わると思うとめっちゃ憂鬱です。それよりも如何でしたか？
遂に一夏と楯無がつながりました！
これからはイチャイチャの話も挙げて行こうと思いますので、よろしくお願いします。
それでは、さよなら～

番外編　姉弟が姉弟ではなくなった日～後日談～

その後の兄弟について語ろう

一夏～

一夏はあれから学校でのいじめはなくなったものの誰とも話さないでいた。

「おい、見ろよあいつ」

「また、やってるよ」

まじめだった一夏はそれまでの素行が嘘のように消え、

授業は全ての時間で寝る、さらには先生の言う事も全く聞かなかった。

「ちょっと！織斑君！いつまで寝てるの？早く起きなさい！」

「うるさいです。人が寝てる時に起こさないでください」

「そう言う問題ではないの！授業はキチンと起きて受けなさい！」

「小学生の問題なんか解いても暇だし」

それは中学生になっても変わらなかった。

放課後は他校の生徒と喧嘩の毎日。

学校もほとんど登校せず、たまに行ったとしても授業は、

全部、睡眠状態、校外学習も全て休み、修学旅行すら行かなかった。

普通ならば教師も言うだろうが、

一夏は模試では全国トップの成績を取り、定期考査も全教科満点。

この事により教師達は何も言えずにただただ傍観していた。

千冬について～
「ちーちゃーーん」
「ああ、束か。おはよう」
「やあ！おはおはー。何かあったのかな？」
「まあ、ちょっとな」
「ならばその悩み私が解決してしんぜよ～」
「・・・・・・」
～ありゃりゃ、これは本当にやばいかもね～～
いつもならば、何か言い返すのだがその日の千冬は何もしてこなかった。
「ねえ、私に話してみてよ。」
「束、実はな・・・・」

「あのいっくんが学校で問題を起こした？」
「ああ、昨日、先生に呼ばれて行ってみたらそう言われた」
「でも、あのいっくんがそんな事をする筈は・・」
「ああ、私も最初はそう思っていた。だが、私は一夏を疑ってしまったんだ」
「それで、いっくんは怒って俺に関わるなって怒って姿を見せなくなったと」
「ああ、部屋にいる事は分かってるんだがいくら呼び掛けても一向に、
返事がないんだ。」
「ん～だったら私が調べてあげようか？」
「本当か！束！」
「うん、１週間程待ってもらえば情報は集められるよ」

「分かった。頼む束」
「任せなさ～い」

1週間後～
「ちーちゃーん」
「束！どうだった？」
「いっくんの言うとおりいじめはあったみたいだね。
それに確かＰＴＡが調べたんだって？」
「ああ、そう言っていた」
「実はいっくんの同級生にＰＴＡ会長の息子がいたんだ。
それで自分の地位が危ないとでも、思ったんだろうね。
事実を隠ぺいしていたみたいだよ」
「ほ、本当か！」
「うん、本当だよ」
「そ、そうか・・・」
だが千冬はあまり嬉しそうではなかった。
「どうかしたの？嬉しそうじゃないけど」
「ああ、だがどれだけ真実が分かっても私が一夏を疑ったのには変わりはない」
「馬鹿じゃないの！」
「！！！！！」
束が怒ったのはこの日が初めてだった。
「た、束？」
「ちーちゃんはそれで良いの？いっくんとまた笑って過ごしたくないの？」
「私は・・・・・過ごしたい！また、一夏と笑って過ごしたい」
「目が覚めた？ちーちゃん」
「ああ、ありがとう。御蔭で目が覚めた」
「ふふふ、私も出来る事は手伝うよ。」

「ああ、ありがとう束」
「どういたしまして」
千冬は真実を知り、一夏との関係の修復を目指していく。
この行動が後に英雄を生むキッカケになるとは思わずに。

第２３話　生徒会と副会長

一夏の部屋にて～～
「う～ん？朝？ん～よく寝た～」
初めましてかしら？私はＩＳ学園生徒会長の更識楯無よ。
隣で寝ているのは誰かって？
え、えっと
私のか、彼氏、きゃー、言っちゃった。
ゴホン、彼は私の彼氏の織斑一夏。
世界で唯一男性でＩＳを動かせる人。
「やっぱりいつ見ても良い寝顔。最高！」
私の日課は朝、一夏より早く起きて一夏の寝顔を拝むこと。
え？そんな毎日見てたら飽きるんじゃないかって？
ちっち、甘いよ。シュークリームよりも甘いわ。

毎日見てても飽きないのが一夏なの！
「にしても、キレイな顔ね～」
一夏の顔を見ていると昨日の事を思い出すわね
「昨日、キスしたんだよね？」
思い出すだけでも顔が赤くなるわね。
だって！好きな人とのファーストキスだよ？
赤くならない方がおかしいわよ。
ねえ？作者さん。
『え？僕ですか？』
そうよ、あなた以外にだれがいるのよ。
『え～っと普通は話しかけられないんですけど～』
関係ないわよ！で？どうなの？
『作者はそう言う経験が皆無なので分からないです』
え～？高校生ならあるでしょう？

『無いんですよ。あなた達とは違って』
そう。なら良いわ。じゃあ、さよなら
『え？ちょっと！』
あれ？私、誰と喋ってたんだろ？まあいいか。

「キスしちゃおっかな？」
今、一夏は昨日、遅かったのかまだ寝ている。
＜ちなみに今の時間は午前９時です＞
「良いよね？うん良い。だって恋人同士なんだから」
顔を徐々に近づかせていく楯無。
後、２ｃｍ、１ｃｍ、０になりかけた瞬間・・・
「んん！」
後ろから何かに抑えつけられた。
「まさか朝から寝込みを襲われるとは思わなかったよ。楯無」
「い、一夏！いつから起きてたの？」
「ん？寝顔がどうちゃらこうちゃらからかな？」
「最初からじゃない！」
「ん、まあそうだな」
不覚だわ。まさか起きていることに気付かない何て・・・

数分後～
「なあ、楯無～いい加減機嫌直せよ～」
「ふん！知らないもん！」
楯無が何故か不機嫌になっていた。全く分からない。
こんな時は作者を呼ぶか？
『お～い、作者～』
『ＺＺＺＺＺＺＺ』
『さっさと起きろ！オタク！』
『んぎゃ！何でしょうか？眠いんですけど？』

『ネットのしすぎだ！それよりも楯無の機嫌が悪いんだ。どうにかしてくれ』
『ひとまず、状況説明を』
『ああ、そうだな』
＜説明中～～＞
『と、言うことなんだが』
『はあ～一言いいすか？』
『何だ？』
『リア充死ね！自分で考えろ！馬鹿野郎ー』
『あ、どっか行っちまった』

「楯無～」
「・・・・」
「はあ～」
俺は最後の手段を使うことにした。
「ちょっ！一夏！」
最後の手段とは後ろから抱き締めるである。
「い、一夏」
「好きだ」
「！！！！」
「ごめんな？楯無。嫌だったか？」
「違う。だってキスしたのに一夏、恥ずかしそうじゃなかったから・・・」
「はあ～ほら」
そう言い一夏は楯無の手を取り自分の心臓にあてた。
ドクドクドク
「分かるか？さっきのキスからだいぶたつのにまだドキドキしてるだろ？」
「うん・・・・」
「どれだけ楯無とのキスが恥ずかしいか分かったろ？」

「ふふふ、一夏～」
「うお！どうしたんだよ」
「ふふふ、別に～少し甘えたくなっただけ？」
「そうか」
それから二人は少しの間抱きしめあっていた。

数分後～
「ねえ、一夏」
「ん、どうした？」
「ちょっと、お願いがあるんだけどいいかな？」
「別に良いが」
「なら少し生徒会室まで来てくれる？」
「分かった」

生徒会室～
「失礼しま～す」
「は～いって、おりむ～だ～」
「ん？本音何でここにいるんだ？」
「だって私も生徒会役員だも～ん」
「まじで？」
「ま～じで」
「こら、本音、お客様に失礼でしょ」
「は～い」
「初めまして、私は・・・」

「布仏家、長女の布仏虚（のほとけうつほ）、だろ？」
「どうして、それを！」
「もう一夏ったら驚かしちゃダメでしょ」
「別に俺はそんな気は・・・」
「あの～会長この方は？」
「ああ、この人は私の彼氏の一夏よ」
「はあ、彼氏ですか。でもどうして私たちのことを？」
「禁則事項よ？」

「で？楯無、用件てのは何なんだ？」
「ああ、そうだったわね。一夏。生徒会に入って頂戴」
「・・・一応聞くが何故だ？」
「それはねみんなからの苦情がありすぎるのよ」
「苦情？」
「本来、学園の生徒はクラブに入っていますが今のところ織斑君は無所属なので、いい加減にどこに所属しているのかをハッキリ、しろと言う苦情が多いのです」
「はあ～」
「だからお願い！一夏。生徒会に入って頂戴」

「いいぞ」
「本当に？」
「ああ」
「ありがと！一夏！」
「お、おい、いきなり抱きつくな！」
「嫌なの？」

「嫌じゃない」
「ふふ、ならいいじゃない」

{{本音}}
{{な～に？お姉ちゃん？}}
{{お嬢様、変ったわね}}
{{そうだね～おりむ～のお蔭かな？}}
{{そうね}}

「ということで一夏は副会長に任命するわ」
「了解」
「じゃあ～任命パーティーでもしましょうよ～」
「そうね。虚ちゃん。ケーキと紅茶をお願い」
「分かりました」

「ってことで一夏、副会長就任おめでと～かんぱ～い」
「「かんぱ～い！」」

「ふ～楽しかった」
「騒ぎすぎだろ。もう夕方だぞ？」
「一夏は楽しくなかった？」
「・・・久々にあそこまで笑ったよ」
「ふふ、そうでしょ」
「なあ、楯無」
「ん？何？いち、んん！」

「楯無・・・」

「どうしたの？急に」
「俺から離れないでくれ」
「へ？」
「もうこれ以上大切な人が離れていくのはコリゴリだ」
「一夏・・・・」
「ずっと、一緒にいてくれるか？」
「勿論！ず～っと一緒だよ！一夏」
「ありがとう、楯無」
もう一度二人はキスをした。
永遠の誓いを立てるようにず～っと

＜余談～＞
その現場を新聞部の薫子（かおるこ）に写真を撮られ、翌日に掲示板に張り出され恥ずかしい、
一日を過ごしたとか過ごさなかったりとか

第２３話　生徒会と副会長（後書き）

こんばんわ～ケンです。
今日は遅めの更新ですみません。
次回はラウラとシャルロットの話をします。
夏休み編は次回で終わりです。
では、さよなら～

第２４話　模擬戦と証明

「ん～朝？ふあぁ～」
「ようやく起きたか。シャルロット」
「相変わらず起きるのが早いね」
「当たり前だ。軍人たるもの日々の生活を疎かにしては戦闘に支障が出るからな」
今、喋っているのはラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツの代表候補生。
現役軍人でありながら１５歳にして隊の隊長をしている。
「流石、軍人だね」

金髪碧眼の少女はシャルロット・デュノア、フランス代表候補生である。
実はある事情により男装していたが一夏のお陰でその必要もなくなり、
こうして本来の性別で在籍している。
「それよりも、シャルロット、今日暇か？」
「うん。今日は暇だけど、どうかした？」
「まあな、少し模擬戦をしないかと思ってな。夏休みで体が訛(なま)っては困るからな」
「そうだね。良いよ。いつからする？」
「ふむ、ひとまずは朝ごはんの後にでもと考えているが大丈夫か？」
「うん、良いよ。じゃあ行こうか」
「うむ」

食堂～
「あ！一夏おはよう！」

「ん？シャルロットか。おはようさん」
「私もいるぞ」
「ラウラもおはようさん」
「おはよう」
「あれ？今日は会長さんは一緒じゃないの？」
「ああ、楯無は今、事情でロシアに行ってるんだ」
「ふ～ん。あ！一夏、今日暇かな？」
「ん、まあ暇だがどうかしたか？」
「実はねこの後ラウラと模擬戦するんだけど一夏もどう？」
「そうだな～いいぜ。やろうか模擬戦」
「オッケ～ラウラも良いよね？」
「勿論だ。むしろ大歓迎だ」
「はは、そりゃどうも」
「じゃあ、僕たちも食べようか？」
「そうだな」

１０分後～

「「「ごちそうさまでした～」」」
「お前たちは仕事は無いのか？」
「うん。僕はもうこの前に終わっちゃったし。ラウラは？」
「私も、先日に終わらせた」
「ふ～ん、そうか。じゃあ行くか？」
「そうだね」
「分かった」

第二アリーナ～
「準備はいいか？二人とも」
「うん、オッケ～だよ」
「私もだ」
「分かった。じゃあ勝敗の決め方はどちらかのエネルギーを０にすること。では、始め！」
先手はシャルロットだった。
まずはショットガンを展開しラウラに牽制として撃ち始めた。
それをラウラは避け、プラズマ手刀を使いシャルロットへ当てようとするが、
一瞬時加速≪イグニッションブースト≫で大きくラウラとの距離を取り、
再びショットガンをコールしラウラへ撃っていく。
「やるな！シャルロット！流石わ高速切替（ラピットスイッチ）だな！」
「そっちこそ！相変わらず１対１は反則的に強いね！」

〈〈やっぱり二人とも代表候補生だな。動きに無駄が無い。そう思うだろ？白式、白騎士、ライト〉〉
〈〈そうですね〉〉
〈〈だね～〉〉
〈〈二人と同感です〉〉

数十分後～
「そこまで！勝者はラウラだな」
「ふ～疲れた。流石わラウラだね」
「それはこっちのセリフだ。シャルロット」
「「・・・・・・・・・・」」

「「ぷはははははははははははは」」
「大丈夫か？暑さにでもやられたか？」
「ふふ。別に～」
「そうだな」
「よく分からん」
「一夏はどっちとする？」
「そうだな～」
その時・・・
「あ～やっと終わった～」
「お疲れ様ですわ。鈴さん」
「やはり代表候補生は忙しいものだな」
いつもの3人組がやってきた。
「ん？一夏じゃない。こんな所で何してるの？」
「ほっとけ。そんな奴」
「そうですわ。こんな奴と話す価値もありませんわ」
「まあまあ、そう言わないで。もう気づいてるでしょ？
一夏は私たちよりも強いの。それにこいつのしてる事って全部正しいと思わない？」
「そ、それは・・・・・」
実際、一夏の行ったことには何も口出しができなかった。
それに二人は一度、一夏に助けてもらっているので尚更言えない。
一方、箒は・・・
「私は認めん！織斑！私と闘え！」
「ちょっと！箒！」
「ああ、良いぜ。やろうか？」

「では、ルールはさっき説明したとうりだ。では、始め！」
「はぁぁぁぁぁぁぁ」

剣がぶつかり合う。
「本気でしてるのか？」
「黙れ！貴様に負けるわけにはいかない！」

「何で箒さんはあそこまで織斑さんに執着心があるというか、憎んでいらっしゃるんでしょうか？」
「さあ～知らない」

「はあ、はあ、はあ」
「ん？何だ？降参か？別に良いぞ？」
「！！！」
箒の中で何かが音をたてて切れた。
「貴様ーーーーーーーー」
その時、紅椿が輝き始めた。
「単一仕様能力（ワンオフアビリティー）か」
「あぁぁぁぁぁぁぁ、織斑一夏ーーーーー」
バキィィィンン！
何かが割れる音がした。
「まあ、いいっちゃ良いが興奮しすぎだ。ば～か」
紅椿の２本の刀が粉々に砕けて地面へと落ちていった。
「・・・何故、勝てない？」
「自分で考えろ」
箒のエネルギーが尽きた。この瞬間一夏の勝利が確定した。

一夏の部屋～
「はあ～それで派手にドンパチしちゃったと？」
「そうですね」
「うむ」
「何で二人がここにいる？」
「「なんとなく」」
「まあ、いいけど。楯無は用事は終わったのか？」
「まあね～それよりも早く帰りなさいよ～時間よ？」
「それもそうだな。シャルロット帰ろうか？」
「そうだね。御休み一夏！」
「ああ、御休み」
「じゃあ、私たちも寝ようか」
「そうだな。御休み」
「御休み～」

こうして二人は夢へと落ちていった。

第２４話　模擬戦と証明（後書き）

こんばんわ～ケンです。眠～いです。
如何でしたか？少し長めですが・・・
感想も待ってます。
それでは、さよなら～

第２５話　文化祭と亡国企業

第二アリーナ、始業式会場～
「以上で校長先生のお話を終わります」
『じゃあ、一夏、準備お願いね？』
『了解』

「続いては生徒会からのお知らせです」
「皆、おはよう。夏休みはどうだったかしら？」
「「「「会長～」」」」
「一年生は初めてね。私は貴方達生徒の長の生徒会長、更識楯無よ。よろしくね？」
『初対面』と書かれた扇子を持った楯無がいた。

「それより皆にお知らせがあるわ。」
「「「「？？？？？」」」」
「紹介したい人物がいるの、どうぞ～」
今まで騒がしかったのが嘘のように静かになっていた。

「生徒会副会長に任命された織斑一夏です。俺が副会長ってのに反論があるなら、
俺とＩＳで戦え。俺が負けたら辞めてやるよ。以上」
「「「「・・・・・・・・・」」」」
「え～っとこれで生徒会からの諸連絡を終わります」
「ありがとうございました。これで二学期の始業式を終わります」

一組教室内～
「全く、一夏ったら相変わらずだね」
「そうか？俺としては普通だが？」
「まあ、あれくらいが良い具合だろう。それに最近、一夏に対する態度も徐々に治ってきている。」
「どうでもいいがな」
「ところで一夏は文化祭の日はどうするの？よかったら一緒にまわらない？」
「悪い。その日は楯無とまわることになってるんだ」
「そうか～わかった。じゃあ僕はラウラとまわっておくよ」
「ああ、悪いな」

文化祭当日～
ＩＳ学園は大勢の人でごったかえしていた。
この日は一般公開される滅多にない日なのだ。一目見ようとかなりのお客さんが来る。
とはいっても大部分は立ち入り禁止だが。
「一夏～」
「遅かったな。楯無」
「ごめん、ごめん。クラスの催し物の交代時間が延びちゃってね、ごめんね？」
「別にいいさ。行こうぜ」
「うん！」
「何から行くんだ？楯無。」
「ん～まずはあそこにでも行ってみない？」
看板には爆弾解体ゲームと書いてあった。
「別に良いけど」

「じゃあ、レッツ・ゴー！」

「いらっしゃいませ～お二人ですか？」
「はいそうです」
「ではまず難易度を選択してください♪」
「ハード、イージー、アルティメット・・・・最後のは何なんだ？」
「最後のは超難しいモードと言うことです♪」
「じゃあ私はハード、一夏はアルティメットで」
「かしこまりました～♪」
「おいおい、勝手に決めるなよ～」
「だって、一夏、天才だからそれぐらいじゃないとね～」
「それでは、お願いします！」
「え～とここを切って、これは外して後は起爆装置をｏｆｆにしてっと出来た！」
「おお！さすがは会長！景品としてこの箱の中から好きなものを選んでください」
「は～い。一夏はどう？」
「ん～あと少しだよ」
～ふふふ、残念だけどアルティメットは絶対に起爆するように設定してあるのよん♪～
ちなみに爆弾が爆発すると小麦粉が辺りにまき散らせれる事になっている。
しかし、天才の一夏はとうにそんな事は気づいていた。

～なかなか、巧妙に作られてるな。こう言うときは～
「ん。出来たぞ」
「え？嘘！絶対に爆発するようにしたのに！」
そう言い爆弾の中身を確認しようと覗き込むと・・・
ボン！！
「ゲホッ！ゲホッ！」

「絶対に爆発するように設定してあったみたいだが、
プログラムを書き換えれば意味はない」

「そうきたか、ゲホッ！はあ～お好きなものをどうぞ～。ぅぅ赤字だ～」
「楯無決めたのか？」
「ちょっと待って。う～んどっちにしよう？」
「何迷ってんだ？」
楯無は指輪とネックレスで迷っていた。
「指輪もいいけどネックレスも良いし、う～ん。指輪で良いかな。これ貰うね」
「は～い。ありがとうございました～」
「一夏は決めたの？」
「ああ、まあな。行こうか？」
「うん！」

「ちょっとトイレ行ってくる」
「ああ、分かった」
楯無を待っていると一人の女性が近づいてきた。
「あの～織斑さんですよね？」
「はい？」
「わたくし、ＩＳ装備開発企業『みつるぎ』渉外担当・巻紙と申します」
「聞かない会社だな～本当にあるのか？」
「え、ええありますとも。最近出来たものでして・・・・」
〜あり得ないな。新しい企業が出来たならば俺の情報網に引っかかる筈だし、
それより殺気を抑えきれていないダダ漏れだ。〜
「それでですね是非わが社の装備を使っていただけないかなと」
「すみませんが白式は嫌だと言ってるのでお断りさせていただきま

す」
「まあ！そう言わずに！」
「はあ～だったら条件がある」
「何でしょうか？」
「感情を押し殺す訓練をもっとしろよ。殺気がダダ漏れだぞ」
「・・・・」
「ま、いいや興味無いし。さよなら」

「あ、一夏！おまたせ。さっきの人誰なの？」
「その事について話がある」
「へ？」
「実はな・・・・」

「分かったわ。誘導はお願いね」
「勿論。で？次はどこに行く？」
「じゃあ～あっち！」

数時間後～～
「じゃあ一夏私は仕事があるから。またね」
「ああ、またな」
俺は楯無と別れた後、滅多に人が来ない場所にまでやってきた。
「は～さっさと出て来いよ。亡国企業（ファントムタスク）」
「！！なぜ、それを！」
「さあ？」
「まあいい。白式を渡してもらおうか？」
「馬鹿か。断る」
「そうか、なら！」

そういい一夏に何か液体をかけた。
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「はははははははは！どうだ、リムーバーの威力は！」

「とでも言うと思った？」
「な、そんなバカな！」
「確かに優れものだが欠陥が多すぎるし既に俺は対策を当ててるし、当ててなかったとしてもそんな者で俺たちを引き離すのは不可能だ」
「ちっ！だったら、殺すまでだ！」
そう言いＩＳ＜アラクネ＞を展開させた。
「私の名はオータム！」
「知るかよ。」
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「相手が俺だけだと思うなよ？」

「がはっ！」
オータムが何かに吹き飛ばされた。
「誰だ！お前は！」
「一夏に触っていいのはラウラちゃんとシャルロットちゃんと私だけよ」
水を纏いし女神がそこにいた。

第２５話　　文化祭と亡国企業（後書き）

こんばんわ～ケンです。
今日は中途半端でしたがいかがでしたか？
それでは、さよなら～

第２６話　戦闘

倉庫～
「誰だつってんだよ！お前！」
「そう言えば言ってなかったわね。生徒会長の更識楯無よ。よろしくね？」
「死ねぇぇぇぇぇ」
「もう少し品格を持ちなさいよ。美人が台無しよ？」
そう言いながら楯無はオータムの攻撃を全て避けていた。
「くそ！何で当たらねえんだ！」
「当たり前じゃない。そんな大雑把な攻撃喰らうとでも思う？」
「くそがぁぁぁぁ」
オータムは８本の足で攻撃するがことごとくかわされていた。
「ねえ、それにしても暑くない？ここ。」
「何？」
「いや、違うわね湿度が高くない？ここ」
「！！！！！」

「ふふ、その顔が見たかったのよ。その失策した顔がね」
パチン。
楯無が指を鳴らすと爆発が起こった。

「げほげほ！もう少し加減しろよな～楯無」
「あら、そう言いながらちゃっかり翼で守ってるじゃない」
「てめえら！殺してやる！」
「あらら、まだやるの？」
「待て、俺がやる。下がってろ」
「了解」

「は！てめえごときで勝てるとでも思ってんのか？」
「当たり前だろ？」
そう言い一夏は翼と雪片だけを展開した。
「てめえ、なめてんのか？」
「なめてもまずいだろ？」
「くそがあぁぁぁぁ」
オータムが8本の足を同時に攻撃にまわすが・・・

「な！」
アラクネの足が全て一撃で切り落とされた。
「な～んだ。亡国企業（ファントムタスク）の幹部だから強いかと思ったけど、雑魚だな。残念。」
「だから、言ったじゃないの～」

「てめえらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「「邪魔だ～よ～。零月！～クリアパッション～」」
ドカァァァァァン！
倉庫が大爆発を起こし大破してしまった。
「やりすぎたか？」
「いいわよ別に。取り壊す予定だったし」
「まあ、いいか。それよりも・・・」
「それは？」
「えっと、ちょっとかけてっと」
オータムの体が痙攣した。
「ふ～コアの摘出完了。装備も装甲も完全大破、上出来かな？」
「すごいわね。相変わらず」
「そりゃ俺だもん・・・楯無！」
「え？」
突如、上空からレーザーが降り注いだ
「雪羅シルードモード」

「これは？」
「それは後だ。コアが盗まれた」
「え？誰に！」
「上だよ」
「上？」
見上げるとそこには青いＩＳを展開し、オータムを抱えた少女がいた。
「一夏！大丈夫か？」
「ラウラか。よく分かったな」
「あれだけの爆発は気づくよ」
「それよりも、誰だお前？」
「・・・・・・・・・・」
「言う気なしか。上等！」
ラウラが瞬時加速（イグニッションブースト）で近づくが・・・
「ラウラ！目をつむれ！」
「な！しまっ！」
閃光弾が何発も輝きだした。
「逃げられたか？」
「そうみたいね。でもコアを馴染ませるのに時間がかかるから結果オーライね」
「そうだな」
「大丈夫？ラウラ？」
「ああ、大丈夫だ」
「戻ろうか」
「ええ」

理事長室～
「報告は以上です。理事長」
「お疲れ様です。更識さん」
「いえ、それ程でも」
「やはり更識さんは人気者ですね。取られちゃいましたが・・」
「そ、それよりも、お茶でもいかがですか？」
「おお！虚さんのですか！」
「ええ、そうですよ」
「あの子のは素晴らしいですからね」
「ちょうどお菓子もあるのでお茶会でもしましょう」
「ええ」
年甲斐もなくはしゃぐ姿はとても、７０近くには見えない。
友達同士がするような光景である。
その光景を見て、学園の真のトップと生徒たちの長とは
だれも思わないだろう。

とあるマンションにて～
「てめえ！どういうことだよ！」

高級マンションの最上階は一部の富豪が住める場所だった。
「・・・・・」
「何とか言いやがれ！少女（ガキ）が！」
オータムは少女を壁に押し付けどなり散らすがそれでも怒りは収まらなかった。
「ぶっ殺してやる。」
「やめなさい。オータム」
「スコール・・・」
バスルームから女性が現れた。
「怒ってばっかだと老けちゃうわよ？」
「だが・・・」
「それにエムもまだ未完成品だって言ってたじゃない。この世に無い発明には、失敗はつきものよ？」
「だが！織斑一夏は対策を立てていた。つまり、あいつは完成品を完成させたんじゃないのか！」
「何？」
初めて少女が口を開いた。
「それは本当か？」
「ああ、そうだ！てめえが初めて作ったんだよな？どういう意味だ！」
「ああ、そう言えば」
「何だ？」
「何年か前に言われてたのよ。篠ノ之束と同格かそれ以上の天才がいるって、
でも、所詮噂だから真実は知らないけど」
「お前はそれを知ってたのか！」
「ええ」
「何で！私はお前の・・・」
「恋人でしょ？」
「ああ・・・」

「ふふふ、髪を洗ってあげるわ。疲れたでしょ？」
「ああ、頼む」

少女は一人、胸のロケットを握りしめていた。
{もうすぐだ。もうすぐで私の復讐が始まる}
「織斑千冬（ねえさん）」
少女の口元は人知れず邪悪に歪んでいた。

徐々に始まる復讐。最後に残るのは平和か、それとも破滅か。

第２６話　戦闘（後書き）

こんにちは～ケンです。
如何でしたか～？それでは、さよなら～

第27話　戦闘と異常

一夏の部屋～
「ああ、忘れてた。ほらこれやるよ。」
「え？これって」
それは楯無がどちらかにするか迷っていたネックレスだった。
「お前は指輪を選んだろ？その指輪を俺にくれないか？」
「良いけど、何で？」
「お前が選んだものと俺が選んだもの交換すればずっと一緒だろ？」
「馬鹿」
そういうも嬉しそうに楯無は交換した。
「ねえ、一夏が着けてよ」
「ああ、分かった」
〜近くから見るとキレイ〜カッコいい〜なあ〜〜
「出来たぞ」
「ありがとう」
気づくと二人の距離はキスが出来るほどの距離にまで縮まっていた。

「一夏・・・」
「楯無。愛してる」
浅いキスではなく、深いキスだった。
チュ、クチュ、クチュ、
「ん、はあ」
楯無の口からどちらのものか分からない唾液が垂れてきた。
「楯無」
一夏が楯無をベッドに押し倒した。
「初めてだから優しくして」
「ああ、愛してる」
「私も愛してる。一夏」

二人の唇が重なろうとした瞬間・・・
ガチャッ
「「「・・・・・・・」」」

「あわわわわわわわわわわわ、すみませんでした～」
「うぅぅぅ」
顔を真っ赤にして楯無は布団にくるまってしまった。

廊下～
「山田先生？何の用でしょうか？」
「あわわわ、破廉恥です」
「せめてノックして下さい」
「・・・・・すみません」
「別に良いですけど、何の用ですか？」
「ああ、そうでした！実は倉持技研から白式のデータが欲しいから、明日の日曜に模擬戦をして欲しいとのことです」
「相手は誰でも良いんですよね？」
「ええ、まあ指定はありませんが・・・」
「分かりました。考えておきます」

翌日～
はあ～結局楯無は機嫌は直ったものの恥ずかしくて出られないとか言って、
部屋から出ないし。はあ～今日の相手どうしよ。はあ～
一夏が憂鬱になっているとそこへ・・・・
「ねえ、織斑君」
「はい、何ですか？」

そこには二年生の生徒が数人いた。
「模擬戦で負けたら副会長を辞めるんだったわよね？」
「ええ、そうですが？」
「だったら私と闘いなさい。織斑一夏！」
「ちょ、ちょっと！止めときなって！瑞樹（みずき）！」
「何でよ、薫子？」
「織斑君は会長と同じかそれ以上に強いんだって！」
「そんな訳ないでしょ！こんな奴と会長が同等なわけないでしょ！」
「だから～」
「良いですよ？ちょうど今日は白式のデータ取りだからやりましょうか」
「分かったわ。でも、こんな奴が弟だなんて最悪ね千冬様も」
「馬鹿！今すぐ謝って！」
「何でよ？薫子。」
「良いから！そうしないと・・・」
バキィィィ！
「「！！！！！！！」」
「遅かったか」
一夏が雪片を展開してテーブルを粉々にしていた。
「第二アリーナに来い。ぶっ殺してやる」
「上等よ！」

第二アリーナ～
「え、えっと。それではデータ取りを始めますがよろしいですか？」
「ええ、いいですよ」
一夏から発せられてる殺気で研究員は半泣きである。
「で、ではなるべく長く戦って下さい。」
泣いているのと大差ないくらいの涙目で去っていった。
「女を泣かせるなんて最悪ね」

「・・・・・・」
「無視？あっそ良いわ。ボコボコにしてあげる」

ビット内～
「で？山田先生。何があったんですか？」
そこには楯無、シャルロット、ラウラ、山田先生がいた。
「何やら、一悶着あったみたいですよ？」
「でも、あそこまで怒ってるのは初めて見たよ？」
すると、そこへ・・
「たっちゃん！」
「あれ、薫子。どうしたの？」
「実はね・・・・・・」

「え！それ本当なの薫子！」
「本当よ！だから注意していないと大変なことに・・・・」
「あ、始まった」

瑞樹はまずショットガンをコールし、距離を取りながら一夏に向け発砲した。
〜あれ、外れた？座標はあってるのに、計算ミス？〜
もう一度座標を計算し発砲するが・・・
〜まただ、何で？〜
「不思議に思ってんだろ？何で当たらないか。教えてやろうか？」
「結構よ！」
そう言い瑞樹は威力のあるスナイパーライフルを両手にコールし、

乱射し始めた。
「これなら、どうよ！」
しかし、それも全てかわされた。
「何で！当たらないのよ！」
「教えてやるよ！これは俺が考え出した、
新しい瞬時加速（イグニッションブースト）、小規模加速（ティーブースト）だ。」
「ペティーブースト？」
「こいつは通常の半分以下までチャージして、ごく僅かだけ移動し
弾丸を避ける。簡単だろ？」
「なら近距離で攻めるだけよ！」
ブレードをコールし、一夏に切りかかる。
「はぁぁぁぁぁぁ」
「うざい！」
そう言い一夏は翼を展開しブレードを粉砕した。
「嘘！」
「そら！もういっちょ！」
「きゃあ！」
一夏は翼で風を起こし砂ぼこりをたてた。
〜ああもう、見えないじゃない！いったん上に行くしかないわね〜
そう言い風から逃れるために上昇するが・・・

「あぐ！」
強烈な衝撃が頭に直撃し、地面に叩きつけられた。
〜何で、シールドを突き破って衝撃が来るのよ！〜
「そろそろ終わりにする？」
「くっ！」
物理シールドをコールするが・・・・
「邪魔だ！」
バキィィィィィィン！
「そんな！」

「さあ、行くぜ！」
一夏は物理シールドを砕くと次々と打撃を与えていった。
「そらそらそら！どうしたこんなもんかよ！」
「あぐ！ぎゃう！」
「そらよっと！」
「きゃぁぁぁぁ」
瑞樹は壁にまで蹴り飛ばされてしまった。
「終わりかよ？あっけないなあ～」
一夏は帰ろうとするが・・・
{私では絶対に勝てない、だけど諦めたくない！}
ボロボロになりながらも立ち上がった。
「そうこなくちゃなあ！」
「これで最後よ！喰らえぇぇぇぇ！」
全ての武器をコールし、一気に乱射し始めた。
「ひゃはははははははは！」
それでも、一夏は雪羅をチャージしながら徐々に近づいていった。
「あぁぁぁぁぁぁ！」
「ひゃはははは！雪羅カノンゼロォォォォ」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁ」
ラファール・リヴァイブのエネルギーが尽き、瑞樹は気を失ってしまった。

「はあ～やりすぎよ。一夏。」
「ああ、悪い。少しやりすぎたか」
「お灸をすえるには十分だがな」
「鈴木さんは幸い軽症でしたがやりすぎですよ？」
「すみません」
「ふ～帰りましょ？一夏。」

「ああ、それではさよなら」
「はい、さよなら」

束ｓｉｄｅ
「ふんふん。凄いなあ～いっくんは」
モニターには先程の戦闘が映されていた。
「昔からいっ君はケンカとかしてるし、武道もしてたから強いね
でも、武道は辞めたのにブランクを全然感じないね～」
ピピピピッ！
「お！出た出た。結果はどうだったかな？」
そこには白式について記されていた。
「ふむふむ、へえ～凄い凄い・・・・え？」
束はもう一度その項目を見直した。
「そんな！こんな筈は！」
その項目にはこう記されていた。
稼働率：９９，９％
ＩＳランク：ＳＳＳ
搭乗者との適合率：測定不能
「ちーちゃんでも９０％、ランクＳがやっとなのに、それ以上って、
異常すぎだよ」
結果に驚きながらも束は解析に意識を移した。

天才すら予想外の結果。この結果がどのような影響を与えるかは、
一夏自身が決める事である。

第２７話　　戦闘と異常（後書き）

こんばんわ～本日二度目です～
如何でしたか？少し長めです。
雪羅カノンゼロと言うものはゼロ距離で撃つからこうしました。
ちなみにペティーとは小規模の、と言う意味です。
それでは、御休みなさ～い

第２８話　侵入者とアクセルと一夏

ＩＳ学園～
「え！一夏の誕生日って今月なの？」
「ああ、９月の２７日。」
寮での夕食、楯無と楽しく食べていると急に驚きだした。
「じゃ、じゃあその日！一夏の家に行っても良い？」
「ああ、いいぞ」
「やった！」
楯無は嬉しそうに喜んだ。
「そういえば、２７日ってキャノンボール・ファストだよな？」
「うん、まあね。忙しくなるわよ」
キャノンボール・ファストとは、簡単に言うとレースである。
「めんどくさいだけだろ？」
「よく言うわね。高機動用のパッケージつけなくていいじゃない」
「まあ、それもそうかな」
第四世代機にはパッケージが不要なので整備の必要が無いのだ。
すると、そこへ・・・・

「え～と、あ、いました！織斑君～」
「山田先生、どうしましたか？」
「織斑君に届物です！」
「俺に？」
箱を受け取り中を見ようとすると・・・
「何だろ？これ？」
「ふむ」
両隣りにシャルロットとラウラがいつの間にかいた。
「いつからいたんだ？お前ら？」
「そんな事より早く見ようよ！」

「そうだぞ、一夏」
「へいへい」
箱の中にあったものは・・・
「ん？ストップウォッチかしら？」
「カードが三枚あるぞ？」
「えっと、アクセルとブラスター、それにアクセルブラスターだって」
「だが、アクセルブラスターのカードは色が付いていないぞ」
「ほんとだ」
「何だこれ？差出人は不明だし、訳わかんね」
「ひとまず、もらっておきなさいよ。一夏」
「そうだな」
そう言い三枚のカードとストップウォッチをポッケに入れた。

翌日～
「は～い、皆さ～ん。今から高機動についての授業を始めま～す」
相変わらずロリ先生だな～と思っていると・・・
「この第六アリーナについては先週言いましたね？では、まずは専用機持ちの人に、
実演してもらいましょう！」
先生が手を向けた先には俺とセシリアがいた。
「では、この二人にアリーナを一周してもらいましょう！」

「準備できましたか～？」
「ええ」
「はい」
「では・・・・・3・2・1・ゴー！」

開始の合図とともに動きだした。

〜ふふ、あれが相手では私とブルーティアーズには勝てませんわね。〜

そう思っていると後ろから何かに抜かれた。

「え？」

それは翼を展開した白式だった。

〜な、何ですの！あの速度は！おかしいでしょ！〜

あっという間に差が半周にまで開けられた。

「お疲れ様でした〜順位は見ての通りです。」

「いいか、今年は異例の一年参加だがやる以上は各自結果を出すように。

それでは訓練機組の選出を行うので各自割り振られた機体に乗り込め。

ぼやぼやするな。開始！」

相変わらずの鬼教官。いつも通りの日常だった。

男子更衣室〜

「あ〜疲れた」

一夏が更衣室で着替えていると・・

「い、一夏」

「！！！織斑千冬！」

そこには千冬がいた。

「何の用だ！俺に関わるなと言った筈だ！」

「ま、待ってくれ！お前と話がしたいんだ！」

「黙れ！お前と話す事などない！」
「い、一夏！」
そのまま、千冬を無視し出て行ってしまった。
「い、一夏・・・・」
千冬のつぶやきがひどく響いた。

キャノンボール・ファスト当日～
「さ～遂にこの日が来ました！最速を決めるこの勝負を制するのは一体誰なんでしょうか！」
アリーナは全席満席の大盛況である。
「あ～めんどくせ～帰りてえ～」
「まあまあ、そう言わないの」
隣には既に展開したラウラとシャルロトがいた。
「そうは言っても意味ないだろこれ」
「まあ、そうだが仕方がない」
「はあ～さっさとやって終わろ」
カウントが始められた。
3・2・1・ゴー！
「先に行くね。一夏」
「させるかよ！」
そう言い雪羅カノンモードと銃の乱射が始まった。

しかし、異変は二周目に入ったとたんに始まった。
ズドォォォォォォン！
「シャルロット！ラウラ！大丈夫か！」
「微妙かな？そっちは？」
「こっちもだな、それよりも誰だ？」

「久しぶりだな。サイレント・ゼフィルス」
そこには青色のＩＳがあった。

「あ、あのＩＳは！」
「ちょっと！セシリア、落ち着きなさい！」
「離してください！鈴さん！」

「茶番にも程があるな」
「俺も同感だ」
二人は上空でにらみ合っていた。
「何か用でも？」
「どうでも良い！死ね！」
そう言いビットから大量に撃ち始めた。
「はあ～シールドモー・・！！」
突然、レーザーが曲がり始めた。
「偏向射撃（フレキシブル）か。やるね～」
「どけ、邪魔だ」
「じゃあ、俺もやってみようかな？」
「馬鹿か？貴様、見よう見まねで出来るものか」
「どうかな」
一夏が一発放ったがかわされてしまった
「どうした？出来ないのか？」
「余所見厳禁だぞ？」
「何？」
突然、一つのレーザーが複数に分裂し侵入者に襲いかかった。
「バ、バカな！」
「拡散射撃（スプレッド）とでも名づけようか」
「くそ！」
次々に襲いかかってくるのをかわしていくが徐々に壁際に追い詰められていった。

「しまっ！」
「残念。終わりだ」
ドォォォォォン
複数の雪羅、全てが着弾した。
「こんなものかよ」
「まだに決まっているだろうがぁぁぁぁぁ」
突如、全ての発射口から一斉に発射された。
「うお！危なえなあ～おい！」
「大丈夫か一夏！」
「ん、まあな。あ！そうだ」
「どうかした？」
「新しい力を試してやる。」
そう言い右腕にストップウォッチを取り付けた。

「何だ？それは。」
「見てろ。これが新たな力だ！」
そう言いアクセルのカードをスキャンした。すると・・・
『白式、グレード・アップ。アクセル！』
白式の装甲が徐々に開いていった。
「それは？」
「白式・アクセルフォームとでも名付けようか。何者にも追随を許さない速度を得る」
「ほざけ！」
一夏がスタートボタンを押した。すると・・・
『スタートアップ』
突如、一夏が消えた。
「あ、あれ？」
そして、気づくと隣にいた。
『タイムアウト。ディフォメーション』

元の白式に戻ってしまった。
「え？いったい何が？」
すると・・・
ズガァァァァァン
「「「「！！！！！」」」」
気づくと侵入者が壁にめり込んでいた。
「がはっ！いったい何が？」
「アクセルは１０秒間だけ全てを凌駕する速度をくれる。つまり・・・」
「１０秒で私に攻撃したというのか？」
「正解だ、お前を拘束する」
侵入者を拘束しようと近づくが・・・
「一夏！上だ！避けろ！」
「な！」
ズドォォォン
突如、上空から光が降り注いだ。
「ちっ！奴は？」
「ダメだ。逃げられた」
「残念。みんな怪我は無いか？」
「ああ、大丈夫だ」

「サイレント・ゼフィルス。次こそは・・・」
一人だけ違う方向を見て意気込んでいた。

？？？ｓｉｄｅ
「全く、相手をなめるからこうなるのよ？エム？」
エムと呼ばれる少女を抱えながら女性が言った。
「貴様に言われる筋合いはないが？スコール」

「ふふ、それもそうね」
スコールと呼ばれた女性は楽しそうにほほ笑んだ。まるで女神の様に・・・

「ふふふ、なかなか面白いじゃないの？織斑一夏君」
しかし、その後の笑みは邪悪に歪んでいた。

第２８話　侵入者とアクセルと一夏（後書き）

こんにちは～ケンです。
如何でしたか?今回はオリジナル装備が出てきましたが、
基本的には仮面ライダーですので知っている人は知ってます。
作者は仮面ライダー大好きですから。
それでは、さよなら～

第２９話　マドカと初めてと一夏

とある人物の家の前～
「ふ～ようやく着いた。ここよね？えっとインターホンは・・・・え？無い！何でないのよ？あ～もうこれじゃあ水の泡じゃない！」
「何してんだ？お前？」
「ひ！って一夏か。驚かさないでよ～」
「驚かすも何も俺の家の前で何してんだ？」
そう実は今日は一夏の誕生日なので祝おうという事で来ているのである。
「インターホン無いの？ここ」
「ああ、無いんだよ」
「何で？」
「ん？車がぶつかってグチャグチャになったから。インターホンだけ」
「ある意味それ凄いわよ」
「そうか？まあ立ち話も何だし入れよ」
「あ、うん。お邪魔しま～す」
｛やっと、ようやく入れた～後は夜まで待ったら｝
しかし、そのはかない希望は打ち砕かれる。
「あ、お帰り。一夏、遅かったね」
「まあな」
「何で、貴方達がここにいるの？」
「ああ、呼んだんだよ。少ないより多い方がいいだろ？」
「それに友達の誕生日くらい祝いたいしね？ラウラ」
「うむ。その通りだ」
「まあ、ちょっと待ってろ。すぐにご飯作るから」
「分かった～」

「で？どうなんですか？会長さん？」
「な、何がかしら？」
「もう！惚けなくても良いじゃないですか～一夏との事ですよ！」
「え？」
「どこまで行ったんですか？最後まで行っちゃいましたか？」
「べ、別にそこまでは・・・・」
「ふむ、これがガールズトークと言うものか」

それから数分後～
「うぅぅ」
「ふふふ、顔が真っ赤ですよ？会長～」
こってり赤裸々トークを絞られトマトの様に真っ赤になった楯無の出来上がり♪
「お～い、出来たぞ～ってどうしたんだ？」
「べ、別に何もない！」
「なら、いいけど・・・」
「で、何を作ってくれたの？」
「ん、ああ今日はスパゲティーでもどうかと思ってな、」
「「「す、凄い」」」
「そうか？慣れれば簡単だぞ？」
テーブルにはレストランで出されるようなスパゲティーがあった。
「「「いただきま～す」」」
「は～い」
「ん！おいしい！」
「本当ね。ここまで出来ると逆に悔しいわね」
「確かにウマい」
「そりゃ、どうも。じゃあ俺は少し飲み物買ってくるから」
「あ、良いよ一夏～今日は一夏が主役なのに・・」
「良いってことよ日頃の感謝だよ。じゃあ、行ってくる」

「じゃあ、そろそろ準備しましょうか？」
「そうですね」
「ふむ、分かった」
着々と誕生日会の準備が進められていた。

「ただいま～」
パァン！パァン！
「誕生日おめでとう！一夏～」
「は？」
「もう！忘れたの？今日は一夏の誕生日だよ！」
「あ、ああ。そうだったな」
「ほらほら、こっちにきて。ケーキもあるから」
「はは、ありがとう！お前ら！」
「さあ～盛り上げるわよ～！」
「「「「お～～」」」」

「じゃあ、一夏。僕たちは帰るね？」
「ああ、また明後日。御休み」
「「おやすみ～」」

「ふ～楽しかった」
「そうね～」
・・・・・・・・
「てっ！何でお前がここにいるんだよ？」
「え？私も今日、ここに泊るよ？」

「いやいや、泊まるたって荷物は？」
「ここにあるわよ？」
そこにはちゃっかり荷物があった。
「ダメ？」
｛そんな目で見られたら断れね〜よ｝
「別にいいけど」
「ありがと。一夏」
「あ、ああ」
「じゃあ、お風呂借りていい？」
「ああ、いいぞ」
「ふふ、ありがと」
｛何だ？今日の楯無、妙に色っぽい。襲いたくなる｝
襲いたくなる衝動を強靭な理性の壁で防いだ。

数十分後〜
「ふ〜いい湯だった〜」
「ん？あがったか。じゃあ俺も入ってくるわ」
「うん、どうぞ〜」

「ふ〜危なかった。襲いかけたぞ、全く・・・
あれ？タオルが無い！あ、部屋に忘れたのか。取りに行くか〜」
そう言い部屋に上半身裸で行った。
ガチャッ！
「一夏？どうかし・・・・・・・」
「ん？どうした楯無？」
「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

／／／」
突然、ゆでダコの様に一気に真っ赤になってしまった。
「大丈夫かよ！楯無」
心配になり顔に手をあてると・・・・
「ふあぁぁぁん」
「・・・・・・」
辺りに妙な空気が流れた。
「じゃあ、俺は入ってくるから」
バタン！
「ん、何これ？体が暑いし、疼く。それにさっきの声、私の声じゃないみたいだった」

「ふ～いい湯だった。さ～て寝るかな？楯無～入るぞ～」
「い、一夏」
「た、楯無」
お互いに見つめあったまま動かなくなってしまった。
「一夏～何だか体が暑くて疼くの～どうにかして？」
〜わ、馬鹿！そんな目で見るな、理性が崩れる！〜
「一夏～聞いてる～？」
そう言いながら楯無は腕に胸を押し当ててきた。

プツン！
一夏の中で何かが切れた。
「楯無！」
「きゃ！一夏？」
「もう我慢の限界だ」
「私も限界なの、一夏～」
「何だ？」
「私の初めてを貰ってくれる？」

「当たり前」
そう言い一夏は楯無の耳たぶを甘噛みしながら服を脱がせ始めた。
「ん！やん！ふぁぁ」
この日の夜、二人は繋がりさらに二人の愛が深まった。

「ふ～涼しいな。もうすぐ秋だな～」
今俺は楯無との諸事を終えて飲み物を買いに来ていた。
〰〰そうだね～〰〰
〰〰ですね～〰〰
〰〰紅葉が楽しみです～〰〰
「紅葉か今度みんな誘って行くかな～」
〰〰〰〰賛成～〰〰〰〰
〰〰それにしても、凄かったね～さっきのベッドシーン〰〰
〰〰〰〰そうですね～〰〰〰〰
「うるせ」
自販機に千円札を入れ込みいくつかジュースを買うと向こうから人影が見えてきた。
〰〰ん？珍しいな。この時間帯、ここは人気が少ないんだがな・・・〰〰
「織斑一夏・・」
自分の名前を呼ばれその人に視線を移すと・・
「お前、あの時の！」
「そうだ。織斑一夏。私が私たる為に・・・・死ね」
相手の顔が電灯の光によって映し出された。
「な！お前、織斑千冬！」
「違う。私は織斑マドカだ」
パァンッ！と、乾いた銃声が響いた。

第２９話　マドカと初めてと一夏（後書き）

こんばんわ～ケンです～
如何でしたか～ではまた次回。
さよなら～

第３０話　楯無と妹と一夏

｛おいおい！まじかよ！ここ日本だぞ。発砲するか？普通。｝
そう皮肉りながらも翼を展開し弾丸をはじき返した。
｛これなら避けるだろ！｝
しかし、マドカは素手でその弾丸を受け止めた。
「普通、素手で弾丸を受け止めるか？」
「さあな？」
マドカの手からは大量の血が流れていた。
「で？何の用だよ？」
「さっき言っただろう？貴様を殺す、それだけだ。」
「いいぜ。来いよ。」
二人は臨戦態勢に入るが・・・
「今日はこの辺にしておこう」
マドカは暗闇へと消えていった。

一夏の家～
あの後、世界中にハッキングして亡国企業（ファントムタスク）について、
調べたがあまり出てこなかった。もちろん、マドカの事も。
「はあ～一体何なんだよ？」
まだ、ベッドで眠っている楯無を見ながら呟いた。
「楯無、お前だけは何があっても俺が守ってやる。何があってもな・・・」
青色の髪を撫でながら呟いた。
「ふぁぁぁ～俺も少し眠るかな？おやすみ・・・」
一夏も楯無の隣で眠りについた。

「う～ん。よく寝た～。あ」
隣の一夏を見て昨日の事を思い出し顔を赤くしてしまった。
「そういえば昨日、一夏としちゃったんだよね？」
幸せそうに顔を緩めていた。
「ん？起きたか、楯無。腰は大丈夫か？」
「うん。まだちょっと痛いけどうれしい痛みだよ」
「そ、そうか、ならいいや」
「ねえ、一夏～」
「ん？」
「私を傷物にしたんだから責任とってくれるよね？」
「当たり前だろ？一生一緒だ！」
「嬉しい！一夏～」
「うおっ！急に抱き着くなよ」
「ふふ、いいじゃない」
二人は幸せそうに抱き合った。いつまでも、いつもでも・・・

この約束が後々に楯無を苦しめる事になるとも知らずに・・・・

翌日～ＩＳ学園生徒会室～
生徒会室でいつもの放課後の仕事をしていると・・・・
「へ？タッグトーナメント？」
「そう！専用機持ちの技術向上を図る為に専用機持ちだけでタッグを、組んで行われるの。」

「でも、何で今更？」
「それは、ほとんどの行事ごとがトラブル続きで流れてるからですよ」
「あ～そういうこと・・・」
確かに行事ごとであまりいい思い出がない。
「その事でお願いがあるんだけどいいかな？」
「べつにいいけど？」
「私の妹を助けてあげて！」
急に頭を下げそう言った。
「お、お嬢様！」
「いいの。このぐらいしないといけない事だから」
「え～と意味があまり分からないんだが？」
「私に妹がいるのが知ってるでしょ？」
「ああ、まあな」
「その子ね、ちょっと性格が暗いというか・・・・」
「つまり、その子とタッグを組んで少しは改善してほしいと？」
「うん。いいかな？」
「ああ、良いぜ。彼女の頼みだからな」
「もう！」

翌日～
「ここか？四組ってのは」
今、一夏は四組の教室の前にいた。
「まあ、入るか。」
そう言い教室のドアを開けると・・・・
「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」
賑やかだったのが一瞬、静かになりまた騒がしくなった。

〜え〜と、青髪、青髪・・・・見っけ！〜
列の最高尾に青い髪をした女の子がいたが・・・・
〜うわ〜確かにあれは根暗だな〜
その様子は空中投影ディスプレイを凝視し、指を忙しく動かしながらキーボードを叩いていた。
〜ああいうタイプは苦手なんだがな〜仕方無い！〜
「なあ、更識簪だよな？」
「・・・・・・・」
一度視線をこちらに移すがまたすぐに画面に戻ってしまった。
「ふ〜ん。自分の専用機を自作してんのか〜」
「！！！！」
簪は驚きすぐさま一夏の方向を向いた。
「ああ、悪い、驚かしたな。やるねえ〜自作の専用機か〜」
「何の用・・・」
「ようやく喋った。まあいいや、タッグマッチのタッグ組もうぜ！」
「嫌だ」
すぐさま切り捨てられた。
「ふ〜ん。お前さあ〜馬鹿だろう？」
「！！！！」
驚いたようにこちらを向いた。
「そうだろ？自分一人で専用機を作ってるみたいだがさっきから失敗ばっかだろ？」
「・・・・・・・・」
「肯定したと取るが、何でだか分かるか？」
「・・・・・・・・」
「それは、お前がひとりだからだ」
「どういう意味？」
少し怒ったように言葉を強めた。
「それは自分で考えろよ。でも、一つ言っておくが誰の手も借りないって事は、

強いわけじゃねえぞ。それだけは覚えておけ」
その言葉を残し一夏は帰っていった。
{誰の手も借りないって事は、強いわけじゃない・・・・・}
その言葉が簪の心の中で反響していた。
{あんなセリフ俺が言う資格は無いか}

放課後～整備室～
簪が一人で大型のディスプレイと睨めっこしていると・・・
「おお、ここにいた」
「また・・」
「そんなつれない顔するなよ～ほらコーラやるから」
「炭酸は飲まない」
「じゃあ、リンゴジュース？」
「・・・頂戴」
「はいよ」
一夏はリンゴジュースを渡し簪の隣に座った。
「悪いな」
「え？」
突然一夏が謝りだした。
「俺のせいでお前の専用機の打鉄弐式は中途半端に放置されたんだろ？」
「うん、まあ」
「だから、そのお詫びとして俺が手伝ってやる。異論は認めねえぞ。」
そう言い、ちゃっちゃと作業をし始めた。
「貴方、分かるの？」
「当たり前だ。ＩＳの事はほとんど学習した」
「・・・ありがとう」

その後の部屋に響いたのはキーボードを叩く音だけだった。

「ふ～今日のところはお終い！」
「うん」
二人とも疲れたように体を動かし始めた。
「じゃ、また明日」
「えっと、その、今日はありがとう」
「どういたしまして」
そう言い二人は分かれた。
～いつもよりも速くにノルマが超えれた。
ひとりよりも二人か・・・・・・・・・～

ちょっと進歩した箸ちゃんでした。チャンチャン！

第３０話　楯無と妹と一夏（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？今回は少し短めです。
もうすぐ中間考査ですので更新が遅くなります。
では、さよなら～

第３１話　完成とファウストと一夏

第六アリーナ～～
一夏は簪に呼ばれて来ていた。
「出来たのか？」
「うん、調整するだけだから手伝ってくれる？」
「ああ、分かった」
そう言いお互いＩＳを展開した。
「何だか一夏のＩＳの待機形態って他とは違うね。」
「そうか？」
「そうだよ。普通はアクセサリーとかになるんだけど一夏のって何だろ？」
「さあ？どうでもいいしな。着いたぞ」
第六アリーナのタワーの頂上まで来た。
「ひとまず飛行しようか？」
「うん、分かった」
そう言い、簪はタワーから飛行し始めた。
｛うん、スラスターもちゃんと動いてる。特に異常は・・・ん？｝
一夏は一つのスラスターが弱まってきていることに気付き、簪に言おうとした時、突如スラスターが破裂しバランスを崩し始めた。
｛まずい！｝

｛何で？何で、出来ないの？やっぱりあの人には追い付けないの？｝
「簪！前！前見ろ！」
「え？」
一夏に叫ばれ前を見ると目の前には壁が近くにあった。
｛あ、間に合わない｝
そう思い衝撃を覚悟したとき・・・

「ぐぅっ・・・・！」
ＩＳの操縦者保護があるとは言え衝撃を全て殺し切れきれずに一夏は、
苦痛に顔を歪めた。
「お・・・・おりむら・・・くん」
「ふ～大丈夫か？」
「うん。おりむらくんが・・・」
「ああ、俺は大丈夫だよ、もう慣れてるから」
「ちょっと！どうしたの？こっちからは事故って出てんだけど」
管理者の先生から連絡が入った。
「大丈夫です。少し事故っただけですから」
「分かったわ。でも書いてもらうものがあるからこっち来てくれるかしら？」
「分かりました。行こうか簪？」
「う・・・うん」

あの後、始末書とフィジカルチェックをして今回は帰された。
「大丈夫？・・・・」
「あのくらいで怪我するほど軟じゃねえよ」
「でも・・・・」
簪は申し訳なさそうに一夏を見るが・・・
「だから、大丈夫だって心配するな」
「うん・・・」
「でも、当日までには間に合わないからちょっとあいつらを呼ぶか？」
「あいつらって？」
「俺の彼女のお友達」
そう言い誰かに電話し始めた。

「あ！もしもし織斑ですけど今暇ですか？
暇なら第二アリーナに来てくれませんか？え？無理って？
じゃあ、楯無の秘蔵写真あげますから、え？もうちょっと？
じゃあ、取材応じてあげますよ。あ、マジですか！じゃあ今すぐ来てください。
お願いしま～す」
「あの～織斑君？」
「一夏でいいぞ。で？なんだ？」
「い・・一夏の彼女ってもしかして・・・・」
「お前の姉の楯無だよ」
「・・・・そう」

十分後～
「やっほ～織斑君！例のものは？」
「これです」
「ふふふ、織斑やお主もワルよのう」
「いえいえ、薫子様ほどでは」
「「ふふふふふふ」」
「「「・・・・・・」」」
冷ややかな目線が二人に降り注いでいた。
「まあ、ここまでにして手伝ってくれますよね？」
「もちろん！じゃあ、早速取り掛かろう！」
「「「おー」」」

簪の打鉄弐式は着々と進んでいった。
「織斑く～ん。ここはどうしようか？」
「そこは出力を下げて武装にまわしましょう」
「織斑く～ん。ここはここでいいかな～？」

「そうですね。後はこれを・・・・・」

二十分後～

「「「出来た～」」」

アリーナの中央には打鉄弐式を纏った簪がいた。

「ありがとうございました～お礼は後にしますので」

「マルチアンロックシステムは未完成だけどね」

「そこら辺はまた今度でいいんじゃな～い？」

「そうね。帰りましょうか？」

「「「賛成～」」」

「一夏？」

「ん？どうした？簪？」

「どうしてみんな、私なんかの為に手伝ってくれるの？」

「さあな？自分で考えろ」

「でも、私はあの人のように強くなんか・・・・」

「はあ～じゃあ、あいつは最初から強かったのか？」

「・・・・・」

「違うだろ？楯無も周りの人に教えてもらい支えてもらってようやく、

あの強さを手に入れた。そうだろ？」

「うん」

「そうやって皆に支えてもらう事は恥ずかしい事じゃないんだよ」

「私も強くなれるかな？あの人には追いつけなくても、私なりに強くなれるかな？」

「当たり前だろ。俺だってそうやって強くなっていった」

誰も最初から強いわけではない。誰かに教えを乞い、支えてもらい、時には叱ってもらう。そうする事によって力というものは手にいれる。

「うん、分かった。今日、お姉ちゃんに会えるかな？」
「ああ、今日は確か非番だった筈だ。行って来いよ」
「うん、ありがとう」
簪は楯無のもとへと走って行った。

「はあ～出てこいよ。隠れてんのは分かってんだぞ。闇」
何もないところから突然、闇が現れ一人の少女が現れた。
「その名前じゃ呼びづらいでしょ？今日から影って呼んで？」
「で？何の用だよ。ファウスト」
「別に～ただお知らせかな？」
「お知らせだと？」
ファウストと呼ばれる少女が楽しそうに顔を緩めながら言った。
「明日、生き残ってね？」
「は？どういう意味だよ？」
「それは自分で考えなさい。じゃあね～」
ファウストは闇に包まれ消えていった。
「明日に何が起こるってんだよ。全く。」
そう言いながらも一夏も部屋へと帰っていった。

第３１話　完成とファウストと一夏（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？最近は文字数を少なめにして投稿していますが、どうでしょうか？出来たら感想でアドバイスなどをくれるとありがたいです。
明日は早いめに更新します。
それでは、さよなら～

第３２話　襲撃の始まりと集合

専用機持ちタッグマッチトーナメント当日～
「おはよう、一夏！」
「ああ、おはよう。楯無」
「その・・えっと・・・」
「ん？どうした？」
「簪ちゃんの事ありがとう！」
昨日、急に生徒会室に簪が来たと思ったら急に謝りだし、
何年かぶりにお姉ちゃんと呼ばれ、二人の仲はやわらかくなったらしい。
「ああ、その事か。別にいいさ。楯無の頼みだったら何でもやるし。」
「もう！それでね？お礼がしたいんだけど、何が良い？」
顔を赤くしながら聞いた。
「何でも良いのか？」
「まあ、限度は考えてね？」
「ああ、じゃあこっち来て」
突然、楯無を人気のない場所にまで連れて行った。
「い、一夏？」
「何でも良いんだったよな？」
「うん、何でも・・・んん！」
突然、楯無の唇が一夏に塞がれた。
所望キスである。それも深いのを。
チュッ、クチュッ、クチュッ、チュッ
「んん、はあ～いちひゃあ～」
その場所には舌と舌がねじりあう音しか無かった。
「はあ～一夏？」
「最近、楯無成分が不足しているからな。補給させてもらった」

「もう！馬鹿、行くよ！」
「はは、そうだな」
二人は開会式が行われる会場へと向かっていった。

会場～
「校長先生、ありがとうございました。続いて生徒会長からのお話です。」
「はい、皆さん。おはようございます」
「「「「「「「「おはようございま～す」」」」」」」」
「ふふ、皆さん元気ですね。今日、行われるタッグマッチトーナメントは、
専用機持ちが主役ですが、皆さんが得る物はとても大きいと思います。
この機に是非、それを確かめてみてください。あと・・・・・」

「ふぁぁぁぁ～ネムネム」
「本音。俺もネムネムだよ」
「お～奇遇だね～」
「そうだな。ふぁぁぁぁぁ～」
「「ネムネム」」
あくびをしている二人に鉄拳が降り注いだ。
「「痛～い」」
「ネムネムじゃないですよ！二人とも！先生方が睨んでいますよ！」
「「だって、ネムネムだしね？～」」
「はあ～もう少しで終わるから我慢しなさい！」
「「は～い」」
「ということで、皆さんも今日の試合を見て何かを感じてもらったらと思います。

しかーーーーーし！」
「は？」
思わず口に出してしまった。
「それだけでは皆は暇すぎて何も面白くないわよね？」
「「「そうですね！」」」
「そこで！こんなものを考えてみました。聞きたいかしら～？」
「「「聞きた～い！」」」
「ふふ、名づけて！タッグトーナメント博打を開催するわ！」
「「おおおおおおおおおおおお！」」
「ルールは簡単よ！今から配布する用紙に名前を書いて、
どのタッグが優勝するかを、予想する。簡単でしょ？」
「「かんた～ん！！」」
「そして見事当てた人たちには学食デザート3か月分を贈呈よ～」
「「うおぉぉぉぉぉぉ！」」
「欲しいかしら～？」
「「欲しーーー」」
「ふふ、当てたらねあげるわ」

「はあ～お嬢様・・」
「仕方ありませんよ、虚さ・・・・・！！！」
「どうしましたか？織斑君？」
突然、白式が輝きだした。白式が輝くという事は近くにＩＳがいるという事になる。
つまり・・・・
｛｛一夏！上だよ！｝｝
｛｛何！｝｝
白式に言われ上を見るとそこには・・・
｛｛無人機！しかも数が多い！｝｝
｛｛主人（マスター）！一体が発射態勢に入ってます！｝｝

{ちっ！くそが！}
一夏が翼を展開し上空に飛び上がったと同時に発射された。
「くそが！雪羅シールドモード！」
「な、何なの！」
生徒たちが騒ぎ始めた。教師達、そして楯無も呆気に取られていた。
「全員聞け！避難しろ！先生達は生徒の避難を手伝ってくれ！」
「「一夏！」」
「ラウラ、シャル！」
「状況は！」
「数は全部で８だ。それぞれ別の場所にまでおびき寄せてタッグで１機ずつ潰せ！
後コアも破壊しろ！」
「「了解！」」
「全専用機持ちに告ぐ！それぞれ別のアリーナに誘導しタッグで１機ずつ潰し、コアも破壊しろ！」
「分かったわ！行くわよ！セシリア！」
「分かりましたわ！」

「はあ～しゃあねえなあ～行きますか。先輩？」
「はあ～めんどい～」
「さっさと行け！」
「「え～い」」
学園に存在するすべての専用機持ちが勢ぞろいした。
「くそが！ファウストの言ってた事はこれか。行くぞ簪！」
「うん！」

「私たちも行こうかしら？箒ちゃん。」
「ええ！」

本来は集まることがない力が一人の少年によって束ねられた。

それぞれの内に秘めたる正義を振りかざし侵入者に向かっていく。

第３２話　襲撃の始まりと集合（後書き）

こんばんわ～本日二度目です～
如何でしたか？このストーリーが終わったら、
過去編と日常を数話出してオリジナルへと向かいます。
一応、オリジナル辺はいくつか案がありますが恐らくいくつかすると思います。
では、おやすみなさ～い

第３３話　戦いの始まり

シャルロット・ラウラペア
二人は今、目の前にたたずむ黒いＩＳと対面していた。
「ねえ、もしかして無人機かな？」
『ゴ・・・レ・・・ム・・・・？』
「ゴーレム？と言うらしいが無人機だな」
「つまり、手加減しなくても」
「良い訳だ。行くぞ！シャルロット！」
「うん！」
二人が動くと同時にゴーレム？も動き出した。
「シャルロット！お前は遠距離で行け！私が近距離で叩く！」
「了解！」
シャルロットがショットガンでゴーレム？の動きを制限しラウラがビームサーベルで、斬る。
これがいつものパターンだが・・・
『パ・・ターンに相当。最・・・善の・・・回避を行う。』
そう言い放つと四肢を人間では不可能な角度に曲げ、
全ての弾丸とエネルギー手刀を避けていった。
「な！馬鹿な！」
「くっ！ラウラ一旦こっちに戻ってきて！」
「どうする？シャルロット？」
「なら、ラウラがＡＩＣで動きを止めて僕がシールドピアスで貫く！」
「了解！」
ラウラがＡＩＣで動きを止めようとするがゴーレム？は捕まりまいと高速で動いて行く。
「逃がすか！」
ラウラはそれをさらに追いかけていく。

「捕まえたぞ！シャルロット！やれ！」
「うん！わかった！」
シールドピアスをぶつけようとするが、
突然、ゴーレム？からエネルギー波が広範囲に放たれた。
「「な！」」
「くっ！何だこれは？」
「エネルギー波が・・・・ラウラ、避けて！」
「しまっ！」
ゴーレム？の大剣がラウラを切り裂いた。
「ラウラー！！」

「くっ！はあはあ」
「大丈夫？ラウラ！」
「まあ、ぎりぎりに瞬時加速（イグニッションブースト）でずらしたが、
長くは持たないな。どうする？」
ラウラの体からは少し血液が流れ出ていた。
「奥の手を使うしかないね」
「奥の手があるのか？」
「まあね、ラウラ見ててね？」
すると、シャルロットのＩＳから大量の銃器が出てきた。
「じゃ～ん！名づけてバー○デイ！」
「・・・パクリはだめだぞ。シャルロット」
「じゃあ、ウエポン・デイ！」
「そのまんまだな」
「これで終わらせる！喰らえ！」
全ての銃器から一斉に銃弾が放たれていく。
その全てがゴーレム？に向かっていく。
凄まじい火花と爆音が鳴り響く。
「これで最後だぁぁぁぁ！」
最後にミサイルが１０発放たれ大爆発を起こした。

「ふ～終わった。」
「ああ、これであいつも・・・・！！」
砂ぼこりの中から影が現れた。
「これを喰らってまだ立ってるって言うの？」
「いや、よく見ろ」
その姿は腕がほとんど無く、体もぼろぼろな姿だった。
「な！逃げた！」
「後は任せろ！」
ラウラのＩＳからワイヤーが射出されゴーレム？を縛った。
「これで終わりにする！」
縛ったゴーレム？を自分側に引きよせエネルギー手刀を伸ばした。
「貫けーーーーーーー」
ラウラの伸ばしたエネルギー手刀が貫いた。
「貫いたぁぁぁぁぁぁぁ！！」
その中からコアが空中に放出された。
「これがコアか！」
コアを掴み地面へと降り立った。
「やったね！ラウラ！」
「ああ、ひとまずこのコアを潰さなければな」
「そうだね。」
手刀でコアを貫き粉砕した。
「終わったね。ラウラ」
「ああ、そ・うだ・な」
「おっと！大丈夫？ラウラ？」
「すまないな、肩を借りるぞ」
「良いよ。皆は大丈夫かな？」
「当たり前だろ。あいつらが負けるはずがないだろう？特に一夏はな」
「確かに」

シャルロット・ラウラペア勝利。
残り七機。

第３３話　戦いの始まり（後書き）

おはようございます。ケンです。
この後に学校の芸術鑑賞があるので早めに投稿しました。
如何でしたか？原作では全員分の戦闘描写が無いので、
オリジナルで書いてみました。下手くそで短めですが・・・・
では、また次回、さよなら～

第３４話　終結と裏

セシリア・鈴ペア
「あ～もう！何なのよ！こいつは？さっきから攻撃避けられてんじゃないのよ！」
「落ち着いて下さい！鈴さん！」
「そうだけど・・・・」
今の状況は鈴の衝撃砲とセシリアのピットで同時に攻撃しているが、余り当たっていなかった。
「どうする？ちまちまとやってもラチ明かないわよ？」
「それでも、やりますわよ！」
「了解！」

ダリル・フォルテペア
「あ～どうすっかな～」
やる気のない声を出したのは三年生のダリルだった。
「御先にどうぞっす！先輩！」
そう言ってガッツポーズしたのは二年生のフォルテだった。
「てめ～フォルテ、それが先輩に対する態度か」
「なんですと～それが後輩に対する優しさっすか」
やる気のない二人にもゴーレム？は超高密度圧縮熱線で攻撃していたが、
二人は話しながらかわしていた。
「あれ、熱そうだな。お前試してきてくれよ」
「嫌っすよ！先輩こそ試して下さいよ」
そう言いながらも鉄壁の防御で攻撃を全て防いでいた。
「でもさあ～これ攻撃しねえと終わらねえよな？」

「そうっすね。じゃあ、いっちょ反撃と行きますか。」
バシィン！
二人はトマホークの様なハイキックを命中させた。

「行くぞ！簪！」
「うん！」
二人はそれぞれの敵へと向かっていった。
「はぁぁ！」
簪は刀を使い1対1で戦っていた。
一夏はと言うと・・・・
「ウオォォォォ！」
雪片弐型を使い5機を同時に相手をしていた。
「遅いんだよ！ノロマが！」
一機の攻撃を防ぎ別の奴に攻撃を加える。その繰り返し。
「一夏！」
「大丈夫だ！先に自分のを片づけろ！」
「分かった」

楯無・箒ペア
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
箒が2本の剣でゴーレム?を切っていった。
「箒ちゃん！交代よ！」
「はい！」
一定時間、片方が攻撃し途中で交代、隙を与えずもう片方が攻撃していく。
「もう少しよ！箒ちゃん！踏ん張りなさい！」

「はい！おぉぉぉぉぉ！」
ズバァァァァン！
箒が片方の腕を刀で切断した。
「やれる！この紅椿とならもっと先に行ける。」
その時、突然紅椿からウィンドウが現れた。
『一定の戦闘経験値が蓄積されました。新武装が構築完了しました。
出力可変型ブラスターライフル穿千（うがち）は一点突破型の・・』
「ええい！訳の分からん説明は良い！」
ウィンドウをかき消した箒は何故か一瞬で武装を理解し腰を屈めた。
「もう片方の腕を貰うぞ！」
ビシュゥゥゥッゥン！
両肩二門から放たれた真紅のレーザーによって腕が吹き飛ばされた。
「楯無さん！」
「ええ！任せなさい！」
後ろから楯無が蒼流旋を構えゴーレム？へと向かっていった。
「これで終わりよ！ミストルティンの槍、全力バージョン！」
蒼流旋がゴーレム？を貫きコアごと爆発四散した
「後は・・・あいつらか」
簪と一夏がまだ戦っていた。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
簪が夢現（ゆめうつつ）を使いゴーレム？に切りかかっていた。
「もう時間をかけない。これで終わりにする」
簪は打鉄弐式の主力武器の山嵐を発動させた。
「大気の状態、良し・・・システムも問題ない。終わらせる！」
打鉄弐式から大量のミサイルが発射されていく。
その全てをかわしきれないゴーレム？が爆発に巻き込まれた。
「終わった」
簪が後ろを向き、去ろうとした時・・

「油断はだめよ？簪ちゃん。」
「お、お姉ちゃん」
そこには蒼流旋に貫かれたゴーレム？と楯無がいた。
「最後まで見ないのは昔からの癖よ？」
「あ、ありがとう」
「ふふ、どういたしまして」
「あ！一夏を手伝わないと・・」
「その必要は無いわ」
「え？でも」
「見ていなさい。簪ちゃん。あれが真の学園最強よ」

「雪羅シールドモード！！」
複数から同時に放たれた熱線も雪羅には無意味だった。
〜一夏！そろそろ終わりにしよう〜
「ああ！とっておきを見せてやる」
ブラスターと書かれたカードを取り出しスキャンさせた。
『白式、ハイパーアップ。ブラスター』
白式が徐々に装甲が多くなっていった。
「姿が変わった？」
「す、凄い」

「この姿はスピードを殺す代わりに全てを粉砕する力を１０秒間だけ得る」
『スタートアップ』
「行くぞ！」
ゴーレム？を次々に一刀両断していった。
「１匹目・２匹目・３・４・ラスト」

『タイムアウト。ディフォメーション』
ドカァァァァァァン！！
白式の姿が戻ると同時に全てのゴーレム？が爆発四散した。
「終わったか。」
「「一夏！」」
「よう！皆、お疲れ様。怪我無いか？」
「みんな、それ程ひどい怪我は無いよ。」
「そうか。良かった。」
すると、オープンチャンネルが開き山田先生の声が響いてきた。
『皆さん！状況は！』
「ふふふ、たった今終わりましたよ。山田先生。」
『え？・・・えーーーーーーーーーーー』
「「ぷはははははははははははは！」」
結局、最後の最後まで癒しキャラの山田先生でした。＾ー＾

一夏の部屋～
「結局、けが人が出なくて本当に良かったよ。ウノ！」
「ああ、そうだな。ドロー２だ。」
「本当よね～ドロー２返しよ！」
「でも、あの後こってり事情聴取で絞られたけどね。ドロー４二枚返し！」
「げ！１２枚も引くのかよ！運悪いなあ、俺って」
「「ぷはははははは！！」」

「でも、どこから送られたんだろうね？」
「さあな、軍からも不審な組織の情報は上がってなかったからな」
「そうよね～」
「・・・・・・」

「一夏？どうかした？」
「あ、いや別に何でもない。もう一戦だ！」
「「「え～また～？」」」
かれこれ１０回程していたのだった。

とある基地にて～
そこでは５人の女性が話していた。
「計画はさっき言った通りよ。分かった？」
「ああ、分かった」
「ｏｋだよ～～この私に任せなさ～い！！」
「ふふ、気を付けてね。みんな。」
「ええ。全員分かってると思うけど我々の目的はただ一つ」
「「「亡国企業（われわれ）が世界を支配する！！！」」」

誰も知らないところで進められている物。
それは、まだ誰も知らない事。
これは、あれが起こる僅か数か月前の事である。

第３４話　終結と裏（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
このお話で原作編は終わりにさせていただきます。
次回からは何話か番外編を出してオリジナルへと向かいます。
これからも、よろしくお願いします。

第35話　イチャイチャなカップルの一日

とある部屋での朝の一部始終
「ふあぁぁ～。よく寝た～」
「ああ、起きたかシャルロット」
「あ、おはよう。ラウラ」
「ああ、おはよう。さっさと朝ごはんを食べに行こうか。」
「そうだね。着替えるからちょっと待ってくれる？」
「勿論だ。」
数分後～
「おまたせ。じゃあ行こうか？」
「うむ」
二人仲良く並んで食堂へと歩いていった。

これがごくごく普通の朝の場面である。対外の人はこうだろう。
しかし、一組だけまったく異なる朝の迎え方をしているのがいた。
今度はそっちを見てみよう。

「ふあぁぁ～よく寝た～」
「ん～楯無～」
「きゃ！」
隣の住人が突然、抱きついてきた。
「ふふ、もう、朝から甘えん坊さんね？」
一夏であった。実はとても寝相が悪く、さらには朝にも弱い。
たいがい、寝ぼけて抱きついてくるのである。
「ん？ふあぁぁ～おはよう楯無。」
「おはよう！一夏！」

二人の日常はさらに続いて行く。
「ねえ、一夏～」
「ん？」
「何か忘れてない？」
「ああ！、忘れてた」
「もう！早くしてよ～」
そう言い目をつむった。
「了解。」
それを合図に一夏が顔を近づけて行き、そして・・・・
チュッ
唇が重なった。
「ふふ、おはよう一夏！」
「ああ、おはよう楯無！」
これが毎朝恒例のおはようのキスである。
「じゃあ、食堂に行こうか？」
「ええ、そうね」
楯無が一夏の腕に抱きつき鍵を閉めて出ていった。
廊下に出てもそれは一緒。
しかし、これだけではない。

「はい、一夏！　あ～ん！」
「あ～ん」
食堂でもイチャイチャしていた。周りにはかなりの数の生徒がいるのにも拘らず。
「相変わらずお熱い二人だな。」
「ふふ、でも幸せそうじゃない、二人とも」
シャルロットとラウラは見慣れた様子でそれを見ていた。

今度は一般生徒を見てみよう。

「ねえねえ、見て～またやってるよ。あの二人」
「いいなあ、いいなあ私も彼氏欲しいな～」
「はあ～何か忘れてない？貴方たち。」
「ようやく忘れかけてたのに～～～」
「それを言ったらだめだよ～かなりん」
「はあ～胸やけがしてきた」
「あたしも～」
「「「はあ～」」」

彼女たちが胸やけを起こす原因は何なのだろうか？

今度は教室に視点を変えてみよう。
「で、ここがこうなるので・・・」
キーンコーンカーンコーン
「あ！終わっちゃいましたね。この続きは次回にまわしましょう。
号令お願いしま～す」
「起立！礼！」
「「「ありがとうございました～」」」
すると、物凄い勢いでドアが開けられた。
「一夏～～～～」
楯無であった。
「うお！いきなり抱きつくなよ～」
「嬉しいくせに」
「まあ、それもそうだな」
「ねえ、いつものして？」
「ああ、楯無。愛してる」
「私もだよ。一夏」
チュッ
～～～～～～～～～～～～またしてるよ～～～～～～～～～～～～
全員の心が一つになった。

いつも授業が終わると楯無が1組まで来るのだ。
校舎が離れているのにも関わらず。
「ふふ、だ～い好き！一夏！」
「俺は愛してる」
「もう！　ば～か」
「天才だし」
「ねえ、もう行くからもう1回して？」
「勿論」
チュッ
～～～～～頼むから余所でしてくれ～～～～
また心が一致した。
「またね！　一夏」
「ああ、またな」
これが1日中、毎日続くのである。

部屋にて～～
「一夏～もう寝よ～」
「ああ、そうだな」
そう言い二人一緒のベッドに入り楯無を抱きしめた。
「温かいね。一夏は」
「お前はいい匂いがする」
そう言い首元に鼻を近づけていった。
「ん！」
「感じてるのか？淫乱だな～」
「べ、別に感じてなんか無いもん！」
「誘ってるのか？」
「へ？い、いや別に誘ってなんか」
すると・・・
「きゃ！い、一夏？」

突然、楯無に馬乗りになった。
「それが誘ってるって言うんだよ。楯無」
チュッ。
「んん！　や、いちか～」
「我慢できない。愛してる。楯無」
「私も、んひゃあ！　愛してるよ、ひゃん！」

その夜は一夏の部屋の前を通った生徒たちは顔を赤くして、前を通ったとか。
え？なぜかって？それはね・・・
「ああ！ら、らめ！いちか！はげひい！いちか！あたひもう！」

こんな声を聞いて平常心で貴方は通れますか？
そう言う事ですよ。

第３５話　イチャイチャなカップルの一日（後書き）

こんにちわ～ケンです。
今日、ＭＦのメルマガが来たんですが１１月分にも、
ＩＳ新刊が予定されてませんでした。
それはさておき如何でしたか？
今回はイチャイチャ回でした。
オリジナルの方ですが結構頭の中では出来てんですが、
文章化がむずいです。
それでは、また次回！

第３６話　一夏と王女の約束

とある場所での一部始終
パンパン！
森の一角から銃声が何発も聞こえてきた。
「はあ、はあ」
一人の少女が追手から必死に逃げていた。
〖何で追いかけられるんですか！〗
少女は身に覚えの無い事で追いかけられていた。
〖誰か、誰か助けて！〗

日本～
「ん？」
〖どうかしたの？一夏？〗
〖誰かに呼ばれたような気が〗
〖気のせいじゃないの？まだ夜中だよ？〗
〖それもそうだな〗
再び一夏は眼を閉じた。

翌日～
「おはよ～」
「あ！おはよ～ねえ、見た？今日のニュース？」
「うん！見た見た。イギリスの王女様が日本にいるかもしれないってニュースだよね？」
「そうそう。でね、その人は国を裏切ったらしいよ？」
「え～本当？」
「うん、でね・・・」

「おはよ～」
「あ！おはよ～織斑君。」
「さっきの話って本当か？」
「みたいだよ～」
{まさかな}
キーンコーン、カーンコーン
「座れ！小娘ども。ＳＨＲを始めるぞ。号令！」
「起立！礼！」
「「「「おはようございま～す」」」」
「おはよう。皆もニュースで知っていると思うが一国の王女が日本にいるらしいが、
その事については何も詮索しないように。いいな！」
「「「「は、はい！」」」」

放課後～
「「「ありがとうございました～」」」
「は～い、さよなら～」
「一夏～帰ろう？」
「悪い！今日、用があるから先に帰っといてくれ。」
「もしかして、・・・・浮気？」
「違う違う」
「ならいいけどあまり遅くならないでね？」
「ああ、悪いな！」

「ありがとうございました～」
「ふ～危なかった。うっかり忘れるとこだったぜ」
それは家に届く予定になっていた仮面ライダーのＤＶＤセットだった。
「これがないとね～さてと帰ろっと」
上機嫌に帰り道に着こうとすると・・・
「助けて下さい！」
「ん？どうした？って大丈夫かその傷！」
その女の子は全身にひどい怪我をしていた。
「助けて下さい！追われてるんです！き、来た！」
すると後ろから大勢の男たちが追いかけてきた。
「おい、坊主。その子をこっちに渡してもらおうか？」
少女は全身を大きく振るわせていた。
「断る。何で追いかけてんだよ？」
「それは言えないな～殺せ」
「「はい」」
後ろから武器を持った男が近づいてきた。
「ちっ！下がってろ。」
「で、でも！」
「いいから。邪魔だから」
「は、はい！」

「ひゅ～カッコいいね～女の子には見せたくないのかい？」
「何がだ？」
「自分がやられるとこだ、ぐべ！」
「な！やりやがったな、てめえ！」
「良いから来いよ。お説教だ。」
「調子に乗ってんじゃねえぞ！コラ！」

数分後～
「痛え～」
「うう！すみませんでした。」
「言葉の割には弱いな」
物の数分で決着は着いた。
「な！何だてめえは！」
「答えろ。何であの子を追いかけていたんだ？」
「言うかよ。ボケ」
ボキッ！
「ギャァァァァァァァァ」
「ほらほら言わないと全部の骨が折れちゃうぞ～」
「ヒィ！言います！言いますから！」
「で？何で追いかけてたんだ？」
「雇われたんです。」
「誰にだよ」
「知らない」
ボキッ！
「あ”ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”」
「もう一度聞くぞ？誰に雇われた？」
「し、知らない！本当なんだ！」
「あっそ」
「こ、これで許して・・・」
「とでも思うか？」
ボキッ、ボキッ、ボキッ！
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「あ～あ気絶しちゃった。もう良いぞ」
「す、すごい・・・」
「まあ、ひとまず家に来いよ。怪我の手当てだ」

家にて～
「しみるぅぅぅぅぅぅぅ！」
「我慢しろ！これくらい。はい、終わったぞ！」
「うぅ、お嫁にいけない」
「な訳あるか。で？お前は誰なんだ？」
「言いませんか？」
「ああ、言わねえよ」
ジーーーーーー
「言わない。言ったら死んでやるよ。」
「・・・分かりました。貴方は信じても良さそうです」
少女は重い口を開き始めた。

「私はイギリス王女のライト・エリンと申します。」
「あっそ。それで、その王女様が何でここに？」
「はい、実は・・・・・・」

２０分後～

「はあ～つまりはエリンのお母さん、つまり女王様が病気で亡くなり、
しきたりで行くとエリンが継ぐはずだったのにそれを気に食わない、
奴らがあんたに無実の罪を着せてやめさせようという訳か。」
「はい」
「そして、あんたは今や反逆者だという訳か」
「はい。だからお願いです！私を匿って下さい！」
「と言われてもなあ～」
「無理なお願いだと承知の上での事です。お願いします」

「・・・・・」
「無理ですよね。すみません」
そう言い出口に向かおうとするが・・・
「誰が嫌だなんて言った？」
「え？」
「やってやるよ。お前の無実を証明してやる。」
「ありが、ひっく！とうごじゃいまず。うぅぅ」
「泣くなよ～王女だろ？」
「はい。ひっく！」

こうして一夏の無実を証明するための戦いが始まった。

？？？ｓｉｄｅ
「××様。」
「何だ？見つかったのか？」
「はい、ですが少し厄介な場所にいます」
「どこだ」
「ＩＳ学園でございます」
「ほう。何故そんな所に？」
「どうやら織斑一夏に拾われたかと。」
「ふはははは！面白い！だが、あいつは必要だ。すぐにここに連れて来い！良いな！」
「はっ！」

戦いはもうそこまで近づいていた。

第３６話　一夏と王女の約束（後書き）

こんばんわ～ケンです。ようやくオリジナル編です！
下手くそですがよろしくお願いします！
感想も待ってます！
では、御休みなさ～い。

第37話　IS学園分裂!!

IS学園～
「で？つまりはこの王女様を匿って濡れ衣を晴らそうと言う訳」
「ああ、頼む！手伝ってくれ！」
一夏は今、楯無を説得している所だった。
「ん～いいよ」
「本当か？」
「うん、一夏がその子を助けるって言うんなら私も手伝うよ。」
「ありがとうございます！えっと・・・」
「楯無で良いわよ？」
「は、はい。楯無さん」
「それで、私は今こちらではどうなってるのですか？」
「今はね、エリンはこっちではまだ、捕まえてくれとしか、
言われてないけど、徐々に噂として国家反逆者だって流れてる」
「ん～やばいな」
「どうしましょう」
「ひとまず、今日のところは寝ましょ？疲れてるはずだし」
「そうだな。寝るか」
「はい、御休みなさい」

翌日～
「ひとまず、エリンは教室には連れていけないからこの部屋で、
待っていてくれ。誰が来ても開けるなよ？」
「はい、分かりました」
「じゃあ、行ってくるわね」

「どうする楯無？」

「ん～見つかるのも時間の問題だしね～」
「どうすれば良いんだ？」
悩みながら過ごした日だった。

それから数日後事態は急変した。
「どこに行ったんだ？エリン！」
放課後、帰ってくるとエリンが部屋からいなくなっていたのだ。
〜まさか、もう追手が？いやないな〜
「一夏！いた？」
「いや、まだ見つかってねえ。そっちは？」
「こっちもよ」
「くそ、どこ行ったんだ！」

その頃、エリンはというと・・・
〜少しぐらいいいですよね？〜
部屋から外に出てしまっていた。
「ふえ～なかなか広いですね。屋敷よりは狭いですけど」
ブルジョワ発言をしながら学園中を廻っていた。
「ここが、アリーナですか～」
そこでは専用機持ち達が特訓をしている最中だった。
「ふ～お疲れですわ。皆さん」
「そうね～結構したからね。でも相変わらず箒のは性能が凄いはね。」
「いや、性能が良くても私はまだ未熟者だ」
「まあ、そう謙遜なさらずに。」
「ん？あの子って」
「へ？どこですか？」
「ほらあの子よ。あれ」
そこには観客席を歩いているエリンの姿があった。
「おい、あの子はもしやニュースの子ではないのか？セシリア？」

「！！そうですわね。捕まえますわよ！皆さん！」
「ちょ、ちょっと！どうしたのよ！セシリア！」
「あの少女はイギリス王女ですが今では国家反逆者ですわ！」
「そうか、分かった。捕まえるぞ！」

エリンｓｉｄｅ
「ここが観客席ですね？」
気づきもしないで遊んでいた。
すると・・・
「見つけたぞ！国家反逆者、ライト・エリン！」
「！！！！」
「捕まえるよ！ラウラ」
「ああ」
「こんな所で捕まるわけにはいかない！」
追いかけてくる二人から必死に逃げていた。
「ここなら、すこしは・・！！！！」
エリンの隣に一筋の青い光が落ちてきた。
「止まりなさい。国家反逆者」
「セ、セシリア・オルコット」
「追い詰めたぞ。さあ、もう観念しろ。」
「こんな所で捕まらない！！！」
エリンが逃げ出そうとすると・・・
「ひっ！」
「次は外しませんわ。」
「セシリア・オルコット！どうして貴方までもが私を！」
「私も撃ちたくはありません。ですから王女、捕まってください」
「イヤです！」
再び逃走を図ろうとし後ろへと逃げだした。
「待ちなさい！」

「待て！セシリア！殺すな！」
「殺しはしません」
一筋の青い光がエリンに向けて放たれた。
「ひぃ！」
もう無理だと悟り目を瞑った。
すると、突然突風が吹き荒れた。
「きゃあ！」
「あ～もう何なのよ！」
「くっ！」
あまりの強風に全員が目を瞑ってしまった。

「おいおい、幼い少女に向けて撃つとはどういう量見だ？」
「な！貴様は、」
「織斑」
「一夏」
そこにはアクセルフォームの白式を纏った一夏がいた。
「なぜ、一夏はそいつを守る？」
「その子は国家反逆者として手配中の人物だよ？」
「そうだぞ！堕ちるとこまで堕ちたか！」
「はあ～何も知らない哀れな奴ら」
「い、一夏さん！」
するとそこに・・・
「捕まえたか、お前たち！」
「皆さん大丈夫ですか！」
教師達が数人来た。
「お～お～これは勢ぞろいで」
「お、織斑君？何でそっちにいるんですか？」
「織斑、そいつをこちらに渡せ。そうすれば処分は考えてやる」
「嫌だ」
「何故だ！お前もそいつが誰か知っているんだろう！

そいつは手配中の、国家反逆者だぞ！」
「そうだ、一夏！考え直せ！」
「織斑君！」
「一夏！」
全員が一夏を説得しようとするが・・・・
「うるさい！」
「「「！！！！！」」」」
「俺はこいつを守る。そして証明してやる！こいつが反逆者じゃないって事を」
「なぜ、そんな奴を守る必要がある？」
「こいつと約束したからだ」
「ふん！話にならんな。一人で何ができる？」
「一夏は一人じゃない！」
上空からミステリアス・レイディを纏った楯無が降りてきた。
「更識！貴様もか！」
「ええ、私は一夏と共にあります。それに世界よりも一夏の方が信じれますから」
「お前たちはどうする？俺につくか、つかないか。どっちだ？」
「「「「・・・・・・・」」」」
「私は一夏につくよ。」
「簪ちゃん」
「更識妹！なぜだ？」
「一夏のやる事は正しいと思う。それに恩返しもしたいし」
「簪・・・・」
「私も一夏につこう」
「な！ラウラ！」
「僕も行こうっと」
「シャルロットまで、何で！」
「簪と同じだ。一夏のやることは正しい。それに少し疑問を感じていたからな。」

「僕も同感かな。」
「貴様ら！それでも代表候補生か！」
「教官。私は一夏に会って知りました。この世には国よりも大切な物があると」
「私も一夏に出会えたからここにいる。私は一夏を信じます！」
「こんなけか？」
・・・・・・・・・・・・
「私も織斑君につきます。」
その人物は・・・・・
「や、山田先生？」
「なぜだ！山田君！」
「生徒を信じるのも先生の役目ですから」
「決まりだな。行くぞ！」
「「「了解！」」」
「行かせるか！」
「そうですわ！」
セシリア・鈴・箒が捕まえようと追いかけるが・・・
「邪魔だ。零月！」
「「「キャァァァァァ！」」」
「今だ！山田先生はすぐに打鉄を、お前らは俺と来い！」
「「分かった！！」」
「捕まっとけよ。エリン。」
「はい」
「お待たせしました！織斑君！」
「よし行くぞ！」
「「了解！！」」

一人の少女を救うために行動する者。
それを捕まえる者。
そして裏で動く者。

これがあの大事件の序章だとはだれも知る由もなく進んで行く。

第３７話　ＩＳ学園分裂！！（後書き）

こんばんわ～ケンです。
中間考査がもう残りわずかです。作者も来年で受験生なので、更新が遅れますがご承知ください。
では、また次回！！さよなら～

第３８話　二人の襲撃者

「ひとまず、どこに行こうか？」
「考えてなかったの！？」
「うん。まあ流れで言ったというかなんというか・・・」
「では、ひとまずわが軍に行こう。場所的にも近いからな」
「ああ、すまないラウラ」
一夏一行はラウラの所属するドイツ軍へと向かった。

その頃ＩＳ学園では・・・・
「織斑先生！どうしますか！」
「ひとまず、全員待機だ。作戦ができしだい連絡する」
「分かりました」
〜まさか、山田先生までもが向こうにつくのは誤算だった。御蔭でこっちの戦力は、かなり減った。あれの準備が出来しだい使うか？〜
「大丈夫か？セシリア？」
「え、ええまあ」
「でも、なんであいつ犯罪者をかくまう訳？」
「分かりません。これはイギリスの問題です。私が国を裏切るわけには・・・・」
「真意はともかく今は、奴らを捕まえる、それだけだ」

ドイツ軍基地〜
「た、隊長！どうなさったんですか？」
「ああ、少し野暮用でな。少しこいつらを匿う。」
「わかりました。って隊長！」
「どうしたクラリッサ？」
「その子は確か・・」

「何だ？お前もこいつを反逆者とでもいうのか？」
「一夏！」
一夏がクラリッサに雪片を向けるが・・・
「ち、違います！その子はライト・エリン。
今、イギリスで行方不明中の王女です。わが軍にも捜索指令が出されています」

「ちょっと待て。そっちではどういう風に聞いてるんだ？」
「こちらではイギリス政府直々の指令で行方不明中のライト・エリンを、
探してくれと言われているんです。」
「それは本当か！クラリッサ。」
「はい、こちらにはそう来ていますが？」
「おかしいよね？一夏。」
「ああ、こっちには捕獲しろ、
と言われてましたよね？山田先生」
「は、はい、職員会議ではそう言われています」
「それは本当ですか！」
「え、ええ」
ドイツ軍には政府直々の捜索指令が出されているのに、
日本では国家反逆者として発表されている。
「クラリッサ！今すぐイギリスの内部情勢を細かく調べろ！
全隊員総員でだ！」
「「はい！！」」
ラウラの一声でさっきまで集まっていた者たちが蜘蛛の子を散らすように、
動き出した。
「エリン。一つ聞かせてくれないか？」
「なんでしょうか？」
「お前はイギリスで誰に追われていたんだ？」

「誰にってそれは国の人たちにです」
「言い方を変えよう。お前はお前の部下に追いかけられたか？」
「そう言えば・・・」
「どうかしたんですか？織斑君？」
「不思議に思っていたんです。こいつと初めて会った日もこいつは、日本人に追いかけられていたんです」
「え～っと」
「つまり、どうしてイギリスの人が追いかけてこないかって事でしょ」
「あ～確かに国家反逆者が逃げたら普通は追いかけますよね」
「なのに全く追手が来ていなかった」
「つまりは誰かが日本に嘘の情報を流し込んだってこと？」
「だが、こちらには捜索者として国から直々に指令が届いているんだぞ。
これはどう説明するんだ？」
「恐らく地位が高い人物が図ったんだろう」

その時・・・
ウーーーーーー
『未確認ＩＳがこちらに接近中！繰り返す！未確認ＩＳがこちらに接近中！』
「何だ！どうした！」
「この基地にＩＳが一機こちらに向かっています！」
「国籍は！」
「国籍は・・・イギリスです！」
「遂に来たか！どうする一夏！」
「ひとまず、ぶっ倒して事情聴取だ」
「分かった！」
「エリンちゃんはここにいてね？」
「は、はい」

ドイツ軍基地上空～
「ここが言われていた場所ね。全くあの方もめんどくさい事を言ってくれるわね」
そこにはセシリアのブルーティアーズによく似たＩＳが立っていた。
『そう言わずにさっさと始めろ』
「はいはい。じゃあ一発お見舞いよ」
基地に向けて青い光が一筋落ちていった。
「させるかよボケ」
「！！あら、貴方は織斑君じゃない」
「そりゃどうも。で？何の用だ。」
「ふふ、分かってるでしょ？王女を貰いにきたの。いや、今は反逆者か」
「よく言うな。お前らがそう仕向けたくせに」
「へえ～気づいたの？」
「まあな、まあエリンは渡さねえよ」
「そうはいかないわ。あの方が王になるには必要だからね！！」
すると相手はビットを起動させ一夏に向け放ち始めた。
「うざい。シールドモード」
しかし一夏はその全てをシールドモードで防いだ。
「ちっ！」
「行くぜ？」
二人の攻防が始まった。

基地内部～
「今の状況は！」
「現在、織村殿が敵機と交戦を始めました！」

「分かった。」
「隊長！」
一人の隊員が慌てて走ってきた。
「どうした！」
「先程のイギリスについての調査結果がでました！」
「見せろ！」
報告書を取り見ていくと・・・
「こいつか」
「はい、恐らくこの人物が一連の首謀者かと」
「何か分かったの？ラウラちゃん」
「ああ、首謀者が分かった。名前はエドワード・クロック。エリンの姉だ」
「そんな！姉さまがこんな事をする筈がありません！何かの間違いです！」
「だが、事実だ」
「そんな・・・」
「エリンちゃん・・・」
すると・・・
「ふふふ、意外でしょ？」
「「「「！！！！！！」」」」
「きゃ！」
「エリン！貴様！どこから入って来た！」
「さあ～自分で考えるのも戦闘の醍醐味よ？」
「エリンちゃんを離しなさい！」
「嫌よ。せっかく捕まえたのに、離す訳がないじゃない。さよなら」
「逃がすか！」
全員が専用機を起動させ攻撃に移るが・・・
「ふふふ」
「しまっ！」
バァン！

「眩しい！」
「何も見えない！」
「エリン！」
閃光弾を投げられ視界が潰されてしまった。

『任務達成よ。離脱しなさい』
「了解。遅いわよ」
「逃げる気か？」
「まあね、目的のものは取れたし」
「まさか！」
「そのまさかよ。じゃあね。」
すると目の前にエリンを背負ったもう一人が来ていた。
「エリン！」
「じゃあね。哀れなナイトさん」
「逃がすかぁぁぁぁぁぁぁ！！」
エリンを取り戻そうと近づくが・・・
〜一夏！目を瞑って！〜
「な！」
「遅いわよ」
閃光弾が破裂にまばゆい光に包まれた。
「くそ！どこだ！エリン！エリンーーーーーーー」

第３８話　二人の襲撃者（後書き）

こんばんわ～ケンです。
明日で中間考査１週間前なので更新が遅くなります。
それでは、さよなら～

第３９話　信じる理由

「エリン！くそ！どこだ！まさか、イギリスか？」
『一夏！すぐに戻ってきて！』
「うるせえ！黙ってろ！」
オープンチャンネルから簪の声が聞こえても一夏は止まろうとしなかった。
エリンが連れ去られたことにより冷静さを失っていた。
「すぐに行ってやるからなエリン。」
一夏が瞬時加速（イグニッションブースト）を発動しようとした時・・・
『一夏！早く戻ってきなさい！』
楯無の怒号が響いた。
「ちっ！一旦そっちに戻る」

基地内部～
「お、お帰り一夏」
「ああ、ただいま」
辺りは微妙な雰囲気だった。すると、
「一夏」
「何だ？楯・・」
楯無が一夏の頬をはたいた。
「「「「！！！！！」」」」
「楯無？」
「貴方何様のつもりなの？貴方一人で取り戻せるとでも思ってんの！」
「・・・・・・」
「「「・・・・・」」」
初めて楯無の怒りを見て、全員固まってしまった。

「確かに貴方は強い。強いけど自己中心的になったら誰も守れないわよ！」
「悪い。少し興奮してた」
「頭冷えた？」
「ああ、もう大丈夫だ。それでエリンはどこに？」
「今、調べているから少し待ってくれ。それと黒幕が分かったぞ」
「！！誰なんだ？」
「ライト・クロック。エリンの姉だ」
「でも、何で姉がこんな事を？」
「エリンが生まれてから継承権の争いをしていたんだが、クロックの政策の考え方が酷かった為エリンに移ったんだ」
「つまり、自分が女王になる為にエリンを反逆者に仕立て上げたの？」
「ああ、そうみたいだ。どうする一夏」
「決まってんだろ。エリンの濡れ衣を晴らす。後はエリン自身に任せる」
「決まりね。専用機の整備が終わり次第イギリスに向かいましょう」
「「「ああ！！！」」」

その頃、イギリスでは・・・・
「只今、戻りました。クロック様」
「帰ってきましたか。それで例のものは？」
「はい、こちらです」
女性は気を失っているエリンを見せた。
「ふふふ、よくやった。二人とも。もう戻っていいぞ」
「「は！！」」

「ん～ここは？」

「ようやく目が覚めたか？エリン。」
「お、お姉さま！どうしてこんな事を！」
「どうして？決まってるでしょ？あんたを殺すためよ」
「！！な、何で？」
「そんなの決まってるでしょが！」
パチィィン
「痛い！どうして！」
「あんたの所為で私は女王になれなくなった。あんたさえ生まれてこなければ、
今頃、私がこの国を支配できたのに！それをあんたが潰したのよ！」
何度もエリンの頬をはたいた。
「うぅ！」
「あんたの所為で、あんたの所為で！あんたの所為で！」
「あぐ！うぎゃ！」
「はぁ、はぁ」
「わ、私は貴方が女王にならずに済んで嬉しいですよ。」
「何ですって！」
「貴方は全く国民の事を考えていない！」
「それの何が悪い！本来、国民どもは王によって支配されてきた！」
「確かに昔はそうかもしれません。ですが今は国民がいて初めて国と言うものは、
成り立つんです！我々がこうやって裕福に、
暮らせるのも彼らがこの国に、いてくれているからです！」
「うるさい！うるさい！うるさい！貴様は何もわかっていない！」
「何もわかっていないのはあなたの方です！」
「ふん！まあ良い。そんなに威張れるのも今だけだ」
「どういう意味ですか」
「まだ愚民どもにはこの事は伝えていない。もしこの事を言えば貴様は、
この国から消え去り私が王となる！」

「な！何でそんな事を！」
「私が王となるためだ。」
首筋に手刀をいれエリンを気絶させた。
「うっ！」
「貴様には眠っていてもらうぞ。ふはははははははは！！」

その頃・・・・
「準備は出来たかみんな」
「うん皆、出来たよ」
「よし、行くぞ！エリンを取り戻しに！」
「「「「おー」」」」
全員、ＩＳを装着し空へと飛び立っていった。
「皆さん、ご武運を」
クラリッサが空を眺めながら呟いた。
全員がイギリスに向けて飛行していると・・・・・
「ん？一夏、後ろから何かが来るぞ」
「数は？」
「一機だが・・・こ、この反応は！！」
「どうかしたの！ラウラちゃん！」
ラウラはウィンドウを見ながら焦っていた。
「この反応は、暮桜だ！」
「「「！！！！」」」
「まさか、もう織斑先生が？」
そうこうしているうちに千冬が目の前に現れた。
「ちっ！こんな時に！」
「待たせたな、貴様ら」
「何で暮桜がここに！」
「こんな事もあろうかと私が隠し持っていたのだ」

「あんたはまた俺を疑うのか？」
「そ、それとこれとは関係ない！」
千冬が瞬時加速（イグニッションブースト）と雪片で切りかかってきた瞬間。

「ここは私に任せて織斑君達は早くエリンちゃんのところへ！！」
「一夏！」
「ああ！ここは任せます！先生！」
「はい！」
山田先生を残し全員がイギリスへと向かっていった。
「山田君・・・」
「織斑先生始めましょうか。」
しかし、千冬が武器を下ろしてしまった。
「お、織斑先生？」
「山田君は一夏を信じているのか？」
「はい、彼の今までの行動は誰かの為に行われてきました。
それを私は信じます！」
「そうか・・・だが今はそんな事を言ってる間ではない！
私は教師としてあいつらを止める！」
「ならば、私は教師として貴方を止めます！」

二人の戦いが始まった。

第３９話　信じる理由（後書き）

注意：ドイツからイギリスまで距離もつのか？
という疑問を抱いた方もおられるとは思いますが、
そこら辺はスルーして下さい。
お願いします

第４０話　秘めたる想い

「山田先生大丈夫かな？」
「あの人も元代表候補生だから行くとこまでは行くさ。さあ、急ぐぞ」
「「了解」」
専用機持ちたちがイギリスに向けて速度を速めた。

その頃、イギリスでは・・・・

「失礼します！！」
「どうした！何事だ！」
「こちらに複数のＩＳが向かっております。恐らくＩＳ学園の者たちかと」
「ちっ！もう来たか」
「どうなさいますか？！」
〜もう少しで愚民どもも広場に集まる。それまで時間を稼がせておくか〜
「お前たちで演説が始まるまで奴らを足止めしていろ。絶対にイギリスに、入らせるな！」
「「は！！」」
二人は慌てて部屋から出ていった。
「もう少しだ。もう少しで私の欲望は満たされる。ふはははははははは！」

その頃、山田先生は・・・・
「こんなものか？貴様の実力は？」
「はあ、はあ、はあ」

剣を片手に持ちながら肩で息をしていた。
遠距離武器も既に弾丸が底をついており、さらに元々自身が剣術にも精通していないため、
苦戦を強いられていた。
「流石、ブリュンヒルデですね」
「その名で呼ぶな。それに私は弱い」
「え？」
「私は世間からはブリュンヒルデなんかと呼ばれているが、
奴らは本当の私を知らないだけだ」
「本当のですか？」
「ああ、私は唯一の弟すら信じることも守ることも出来ない」
「どういう意味ですか？」
「前に話しただろう？信じれなかったとはそう言う意味だ」
「じゃ、じゃあ守れなかったとは？」
「あれは2回目のモンドグロッソの時だ」

その日、私は決勝戦を控えていたんだ。
世間は二連覇だとか、何だとか言っているが正直私にはどうでもよかった。
それよりも、一夏とどうすればまた笑って過ごせるかそれだけを考えてきた。
あの日から、一夏は私とは眼を合わそうとはしなかった。
例え、一緒の部屋にいたとしても何もしゃべらず、
私がしゃべりに行こうとしてもあいつは振り向いてすらしてくれなかった。
それからと言うもののあまり家に帰ることもできずに
一夏とはさらに溝が深まったような感じがしてたまらなかった。
「一夏・・・」

「織斑さん！大変です！」
「どうしましたか？」
「弟さんがさらわれたそうです！」
「な！」
それを聞いたとき私は頭の中が真っ白になってしまった。
「どこのどいつだ！」
「分かりません！」

それからドイツ軍から居場所を見つけたという連絡が入った。
明らかに私に借りを作らせるためだとは思ったものの、
そんな事はどうでも良かった。
私は一夏の無事さえ確認できればそれでよかった。
「待っていろ、一夏。すぐに行ってやる」

「ここか」
私はドイツからの報告があった場所にまで来た。
「ここに一夏が。待ってろ」
そして、私は潜伏していると思われる建物の壁を蹴り壊した。
「だ、誰だ！」
そこには構成員と思われる何人かの人物と気を失っている一夏がいた。
「貴様ら、ただでは済まさんぞ！」
「お、織斑千冬か！」
「ちっ！撃て！」
何発もの対ＩＳ用の武器が放たれたがそんな事はどうでも良かった。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉ」
「ひ！」

「終わったか？」
そこに残ったのは気絶した構成員が倒れていた。
「まだ、終わってねえよ！」
「まだ、残っていたか。貴様も倒す」
二人の戦いが始まった。

「はあ、はあ」
「こんなものか？貴様の実力は？」
「くそが！化け物かよ」
「化けものか、弟を守れるのならば化け物だろうが魔物だろうが何でも構わん！とどめだ！」
そう言い私は雪片を相手に叩きこむはずだった。
そう相手に
「良いもんがあんじゃねえか！」
そう言い奴は何かを引きよせ私の前に置いたが、
私は構成員だと思い、そのまま振り下ろしてしまった。

「い、一夏？」
切られたのは構成員ではなく、一夏だった。

一夏ｓｉｄｅ
俺は今、第二回モンド・グロッソの会場にいる。
理由は織斑千冬に会う為だった。
あの時、俺はあいつを頭ごなしに拒絶していたが、
日を重ねるごとに俺の考えは変わっていった。
何故、俺はあの時あんなにも拒絶してしまったのか？
何故、もっと冷静に奴に話をしなかったのか？

何故、あの時疑われても仕方がない状況だと気付かなかったのか？
考えれば考えるほど俺の中に後悔が募り始めていた。
そして、今に至る。
俺は今日、奴と、姉さんと話をする為にここに来た。
しかし、かなりの数の観客がいた為に探すのはかなり骨が折れた。
ならば、試合が終わった後、姉さんに会いに行こう。
そこで、姉さんともう一度話をしよう。
そう、思い俺は観客席に戻ろうとした時・・・
「うぐ！」
「騒ぐな。殺されたいか。」
〜やば！力が・・・・〜
その思考を最後に俺は気を失った。

次に目を覚ますと何かが壊される音が聞こえた。
〜何だ？何が起こってる？誰か闘ってるのか？〜
辺りには剣と何かがぶつかり合う音が響いていた。
「化けものか、それで弟が守れるなら化け物でも、魔物でも何でも構わん！」
一番、聞きたかった声が耳に届いた。
〜姉さんの声が聞こえる。そうか俺は誘拐されて〜
しかし、次の瞬間に何かに引っ張られる感じがした。
〜何だ？何が？〜
目をうっすら開けると目の前に剣をこちらに振るおうとしている、千冬が見えた。
〜え？姉さん？〜
そして、次に感じたのは剣で引き裂かれた激痛だった。

「い、一夏？」

千冬の目の前には大量の血を流している弟がいた。
「ひゃはははははははは！まさか、あのブリュンヒルデが弟を切るとはな！」
「ね・え・さん」
「あ、あ、あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
千冬は頭を抱え叫びだした。
「ひゃはははは！今のうちに帰るか？」
ボロボロの体を引きずり相手は去っていった。

病院内～
手術中のランプが消え、先生が出てきた。
「先生！一夏は！一夏は無事ですか！？」
「はい、一命は取りとめました。傷も決っして浅いとは、言えない状態でしたが、大丈夫ですよ」
「そ、そうですか。ありがとうございます」
「今は麻酔がまだ残ってるので今日一日は眠ったままですが、明日には目を覚ますでしょう」
「そ、そうですか。本当にありがとうございました！」
「いえいえ」

翌日～
一夏が目を覚ましたとの連絡が入りすぐさま病室へと走っていった。
「一夏！」
「何の用だよ」
「一夏！すまなかった！私の所為でお前を傷つけてしまった！すまない！一夏！」
「家族だからって許されるとでも思ってんのか！？」

「そ、それは・・・・」
「出ていけ」
「え？」
「出ていけつってんだよ！」
「い、一夏？」
「良いから、さっさと出ていけ！2度と顔なんか見たくねえ！」
「！！！」
私はその場から逃げ去ってしまった。

「くそ！何で、何で！あの時一夏だと分からなかったんだ！」
千冬は何度も壁に自分の拳を叩きつけた。
血まみれになるのも構わずに。
「うう、ひっく！すまない一夏、一夏。」
何度も一夏の名を呼びながら泣いていた。

その頃一夏は・・・・
「くそっ！こんな筈じゃないのに、謝りたいのに！
憎しみが止まらない！あいつを憎むことしか浮かばない！
ひっく！うう！姉さん、ごめん姉さん！」
彼も何度も千冬の名を呼びながら泣いていた。

「これが私の犯した過ちだ」
「だから、織斑君はあんなにも貴方のことを」
「ああ、私はもうあいつに家族として見られていない」
「そうでしょうか？」
「何？」
「だってそうでしょう！もしも彼が貴方を憎んでいるだけだったら、
貴方と同室になるのはどんな事があっても断った筈です！」

「！！！！」
「それなのに彼は貴方と数週間だけとはいえ一緒に過ごした！まだ彼の中には貴方を想う気持ちがあるんですよ！」

「私はやり直せるだろうか？」
「貴方がそれを願うならきっとできます！」
「・・・・そうか、山田君もうやめにしよう」
「はい、学園に帰って皆さんを待ちましょう」
「ああ」

山田先生ＶＳ織斑千冬
千冬の改心のため勝敗なし。

第４０話　秘めたる想い（後書き）

こんばんわ～ケンです！！
如何でしたか？
もうすぐ定期考査なので更新時間は大体、夜になりますので。
それでは、御休みなさ～い。

第４１話　候補生、ｓＶＳテストパイロット

「みんな！もうすぐ着くぞ」
「「了解！！」」
一夏たちはイギリスまで残り数キロと言うところまで来ていた。
「待ってろ、エリン今行ってやる」
一夏たちが動き出そうとした時・・
「は～い。そこまでよ～」
「お前はあの時の！」
目の前にドイツ軍基地で一夏と闘った女性がいた。
「久しぶりね。一応聞くけどこの先に行くのかしら？」
「ｙｅｓと言ったら？」
「潰すまでよ」
「そうか、だったらあの時の続きをしようか？」
『待て、一夏！』
『どうした、ラウラ？』
『今、クラリッサから連絡があった。イギリスでもうすぐ演説がある。
そこでエリンについて言われれば私達は一切関与出来なくなる』
『なら、どうすればいい？』
『お前と会長とで先にアクセルで行け。奴は私たちが止める』
『分かった、頼んだぞ』
『任せろ』
『楯無、さっきのは聞いたか？』
『ええ、聞いたわ。お願いね？』
『任せろ』
そして一夏は一枚のカードをスキャンした。
『白式、アップグレード。アクセル！』
「それは何なのかしら？面白そうね。」

「悪いが教える気はない」
「そう、じゃあ続きをしましょ？」
「悪いが貴様の相手は私たちだ！！」
「！！！！」
ラウラ、シャルロット、簪が同時に動き出した。
「一夏！」
「ああ、楯無、掴まれ！」
「うん！」
『スタート・アップ！』
あっという間に楯無と一夏が消えてしまった。
「あ～あ、行っちゃった」
「さあ、始めようか？私たちの戦いを！」
「ふふふ、テストパイロットをなめないでね？」
3対1の戦いが始まった。

『3・2・1・タイムアウト。ディフォメーション』
「だいぶ、進んだわね」
「ああ、後は数百メートルだ。行くぞ！」
「そうはいかないわよ？」
「「！！！」」
「まだいたの？」
「ここから先はあの方の命令によりとす訳にはいかないわ」
「あの方ってライト・クロックか？」
「！！なぜ、それを」
「こっちの情報力をなめんな」
「そう、なら死ね！」
「な！」
「一夏！ここは、あたしに任せて先に行って！」
「頼んだ」

一夏は急いでイギリスへと向かっていった。
「行かせるか！」
そう言い一夏に向かおうとするが、
「させるもんですか！」
「あ～もう！なら、あなたを倒して奴を潰す！イギリス代表として！」
「なら、私は・・・・一夏の代表よ！」

お互いの剣がぶつかり合い火花が散った。

シャル・ラウラ・簪ｓｉｄｅ
「はぁぁぁぁぁ」
「３対１の状態でよく攻撃できるな」
「それは嬉しいわね」
お互いに均衡していた。
近距離からの攻撃と遠距離からの攻撃を同時にさばく。
「でも、そろそろ終わりにしましょうか。行きなさい！」
すると、背中から１０機もののビットが射出された。
「な！この数は！」
「一斉射撃よ～」
１０機のビットから青い光が一斉に3人を包みこんだ。

「あら、まだやるのかしら？」
「当たり前だ」
「こんな所で倒れたら笑われたくない人に笑われちゃうから」
三人とも大丈夫そうに言うが、三人のＩＳは所々、装甲にヒビなどが入っていた。
『どうする、シャル、簪』
『どうするって言っても僕たちのエネルギーももう残り少ないし』

『私に考えがあるんだけど・・・・』
『考え？』
『うん、実はさっきのビットによる一斉射撃は数が多い分、排熱作業で長くなる
だから、その間に一斉に攻撃すれば・・』
『簪、その排熱作業の時間は？』
『およそ、１０秒』
『１０秒か』
「どうしたの、黙りこくっちゃって。作戦会議かしら？」
「さあな」
「でも、これで終わりよ。行きなさい！」
再び全てのビットから一斉射撃された。

「終わったわね、さあてと向こうを手伝いに・・・！！」
そこにはＡＩＣでいくつかのレーザーを防いだラウラが立っていた。
「ラウラ！！」
「今だ！やれ二人とも！！」
「分かった！！簪、行くよ！！」
「うん！！」
二人は山嵐とウエポン・デイを発動した。
〜やばい！まだ排熱作業が！避けないと！！〜
回避行動に移ろうとした時・・
「な、何よこれ！」
「悪いが貴様逃がす訳にはいかん。やれ！！」
ラウラがロープのようなもので縛っていた。
「く！離せ！離せぇぇぇぇぇぇぇ！！」
「離すか！」
「準備できたよ！」
「うん！」
「「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」」

山嵐とウエポンズ・デイが発動し、膨大な数の弾丸とミサイルが発射された。
「くそおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
凄まじい爆音とともに
相手は爆発に巻き込まれた。

「終わったね」
「ああ」
「うん」
三人が安堵していると・・
「や・・・るじゃないの」
「「「！！！！」」」
そこにはボロボロの姿をした相手が立っていた。
「ま、まだ立てるとわな」
「残念だけど、私の負けよ。貴方達名前は？」
「ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「シャルロット・デュノア」
「更識簪」
「ふふふ、良い名前ね。私の名はアイリス・フリー。貴方達良い代表になれるわよ」
その言葉を最後にアイリスは気を失った。
「強かったね。アイリスさん」
「ああ、私達はまだまだだな」
「これから、強くなっていけば良い」
「そうだな」

簪・シャルロット・ラウラＶＳアイリス・フリー
勝者、簪・シャルロット・ラウラ

物語は最終局面へと突入していく。

第４１話　候補生、ＳＶＳテストパイロット（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
女王編も大詰めに入ってきました。
実は次回の話であることが起こります。
お楽しみに！
感想も待ってます！
それでは、さよなら～

お知らせ

こんにちは。ケンです。
実はこの小説を大幅に書き直します。

理由は感想でご指摘があったからです。

無理やり設定、
それにとってつけた感もあるとご指摘があったので
書き直すことを決めました。
当分は最新話は出しません。
書き直しが終わり次第更新していくので
よろしくお願いします。
設定なども大幅に変わる事が予想されます。
では、さよなら

＜この後は文字稼ぎです＞
。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。
。。

お知らせ2

皆さん、こんにちは。ケンです。
昨日に言ったとおり全ての話の修正が完了しました。
修正点は主にこちらです。

1、千冬と一夏の過去
修正前は千冬が一夏をぼこぼこにして、
そのまま出ていくというものでしたが、
これについて批判がありましたので変更しました。

2、束と千冬
修正前は束が嘘の報告をするというものでしたが、
これも変更しました。

3、キャラの言動
修正前の言動で批判がありましたので、
ほとんどの言動を修正いたしました。

後は色々と細かい修正を致しました。
もしも、まだ矛盾点やこれは無いんじゃないかと言う言動が、
ありましたら送ってきてください。修正いたします。
自分の小説で気分を害された方々。
顔も見えない信用もできないネットでの謝罪となりましたが、
おゆるし下さい。
本当に申し訳ありませんでした。
これからも改変物語をよろしくお願いします。

平成２３年、１０月１０日

作者、ケン。

第４２話　進化する水を纏いし女神

凄まじい爆音が鳴り響いた。
「あら、向こうは終わったみたいね？」
「そうみたいね」
「こっちも始めましょうか？」
「そのつもりよ！」
お互いの剣がぶつかり火花が散った。

「はぁぁぁぁぁ！」
「ふふ、やるじゃないの？お譲ちゃん」
「子供扱いしないでくれるかしら？！」
「別にそのつもりはないんだけどな～」
皮肉りながらも攻撃をかわしていた。
「じゃあ、そろそろこの子の力を見せてあげるわ」
すると突然、相手が動きを止めた。
「隙、大ありよ！」
その隙を見逃さずに攻撃を当てようとするが・・・
「う、嘘？！」
「ふふふ」
楯無の攻撃が文字通り相手を貫いてしまった。
「残念、こっちよ」
「あ～もう！何なのよ？」
もう一度攻撃を当てるが・・・
「また、すり抜けた？」
「こっちよ」
「きゃあ！」
今度は後ろから切られた。
「どうなってるの？」

「それを考えるのも戦闘の醍醐味よ？」
「くっ！」

「やっと着いたぜ。イギリスに」
一夏はようやく、イギリスにたどり着きエリンを探していた。
「エリンって王族の人物だから宮殿とかお城に住んでんのか？」
〜〜たぶん、そうだと思うけど〜〜
「屋敷がありすぎてわかんねえ」
イギリスでは貴族と言うものが残っているので
大きな屋敷が結構あったりする。
「しらみつぶしに探すか？」
〜〜そうじゃなくて、人が集まってる所に行けばいいんじゃないかな？〜〜
「何で？」
〜〜だって今日、演説があるんでしょ？だったら普通はお城とかの、前で行わない？〜〜
「なるほど、その手があったか。」
一夏は翼を展開し空から探すことにした。

「あ！見つけた。あそこか？」
〜〜そうみたいだね。人が集合しているからね〜〜
「よし、行くぞ！」
〜〜勿論！〜〜
一夏は降下していった。

「ははは、もうすぐだ。もうすぐで私が王となる」
「きっと彼らが助けに来てくれます！」

「まだ、言ってるのか？奴らはここには来ることはできん。奴らも所詮は候補生、代表とテストパイロットが相手では、何もできん。」
「そんな事はありません！」
「ふん、まあほざいていろ。これから演説が始まる。それさえ始まれば、奴らごときでは国家の問題に個人で手が出せるほど権利はない」

「そうだな。国家の問題に個人で手を出せるほど俺も偉くわねえからな」
「「！！！！」」
後ろから一夏が現れた。
「い、一夏さん！」

「はあ、はあ」
「あら？こんなものかしら？ロシアの代表さん。」
楯無のＩＳの装甲は所々ヒビが入っておりボロボロだった。
〜〜あの能力は恐らく単一使用能力（ワンオフアビリティー）としか思えない〜〜
「さあ、これでお終いよ！」
「くっ！」
〜〜右！〜〜
「え？」
右に剣を振るうと剣と剣がぶつかった音がした。
〜〜偶然ね。さっきまで当たってたんだから〜〜
もう一度、切りにかかるが・・・
〜〜また！何で？〜〜
その頃、楯無は・・・
〜〜貴方は誰なの？〜〜

〖私に名前は無いけど貴方は私をよく知っているよ〗
〖私が知っている？〗
〖そう、よ～く知ってるよ〗
〖もしかしてミステリアス・レイディ？〗
〖そうだよ。やっと答えてくれた〗
〖でも、何で？〗
〖そんな事よりも貴方は力が欲しい？〗
〖私は欲しい！〗
〖何のために？〗
〖一夏の隣に立って、一緒に戦いたい！大切なものを守りたい！〗
〖ふふ、合格かな。じゃあ行こうか？〗
〖ええ、そうね〗
〖〖さらなる高みに！〗〗
突然、周りにある海水が楯無のもとに集まっていった。
「な、何なのよ！これは？！」
徐々に海水が形を変えていった。
「ま、まさか第二移行（セカンドシフト）？」
そして、海水が周りに弾けた。
「くっ！」
そこに現れたのは・・・
「ミステリアス・レイディ第二形態（セカンドフォーム）
水の王女（アクアプリンス）ってとこかしらそのまんまだけど」
「へえ～凄いじゃないの？でも、結局は攻撃が当てれなかったら同じよ！」
再び、楯無を切りかかろうとすると・・・
「きゃあ！何なのよ、あれは！」
「この子はね～そうね、レイとでも名付けようかな？
私の可愛い龍よ。」
楯無の周りには水の龍が巻きついていた。
「だったら！」

相手は近距離から遠距離に変えて射撃をしようとするが水に阻まれてしまった。
「な、そんなバカな！」
「この子はねさっきのよりも、水を操る能力が強化されたの。だから、周りに海水があるところでは最強よ？」
「だったら！」
もう一度、能力を使い距離を取ろうとするが彼女を膨大な海水が包みこんだ。
「こ、これは！」
「やっと、分かったの。貴方のその能力。それは相手のＩＳに干渉して敵の居場所を錯覚させるんでしょ？」
「それがどうした！」
「だったら答えは簡単よ。見なければいい」
「は？」
「ＩＳが騙されるんだったら、海面に映る貴方を探せばそれで解決よ」
「ちっ！」
「そろそろ終わりにしましょうか。行くわよ、レイちゃん！」
〈うん、行こう！〉
楯無と龍は飛び上がり、蹴りの態勢に入った。
〈やばい、あれだけは避けないと〉
本能的にそう感じた相手は逃げようとするが水によって動けなかった。
「残念だけど終わりよ！はぁぁぁぁぁぁ！」
龍が楯無に水をぶつけ速度を高めた。
「くそぉぉぉぉ！」
蹴りが入った瞬間、水蒸気が爆発するように爆音が響いた。

「ふ～終わった。」
「凄い…わね」
「！まだ、立てるの？」
「エネルギーが尽きたからもう無理よ。貴方、名前は？」
「更識楯無」
「そう、私はアルト・メリーよ。さあ、行きなさい。愛する人がいるんでしょ？」
「ええ、ありがとう」
楯無はイギリスへと向かった。
「は～そろそろ世代交代かな？」

更識楯無ＶＳアルト・メリー
勝者、楯無

第４２話　進化する水を纏いし女神（後書き）

こんばんわ～ケンです。
修正作業を急ピッチで終わらせ、何とか読めるようになりました。
これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第４３話　事の真実（前書き）

注意：この物語の終わり方が現実ではありえなくね？と言う最後ですが
出来ればその辺をスルーしてお読みいただければ感謝です。

第４３話　事の真実

「さあ、もう終わりにしようぜ？ライト・クロック！」
一夏は今、クロックと対峙していた。
「断る！何のためにここまで来たと思っている？今さら諦められるか！」
「何でお前はそこまで地位に拘る？」
「何？」
「そうだろう？だって例え王にはなれなくても地位の高い役職には、就けたはずだ。なのになぜそれを捨てる？」
「黙れ！貴様などには分からん！」
「お前がやっている事はただの嫉妬からの嫌がらせだぞ？」
「ああ、分かっているさ！だが、
今のそいつらの生ぬるい政治ではこの国はさらに発展はしない！
ＩＳもそうだ。そのうち他の国家に追い抜かされる」
「ああ、そうだろうな」
「い、一夏さん？」
「でもな、人は縛られて生きたらただの操り人形だ。
この飽和し伸び悩む世界も俺たち人間の欲望で一気に進化する。
人形みたいに過ごしていたら欲望もなくなり、
それこそ、国は滅びるぞ？」
「そうですよ！クロック！」
「「「！！！！」」」
後ろから女性の声が聞こえた。
「な、なぜ貴方が生きている！？」
「お、お母様！？」
その女性とはエリンの母のライト・ラインだった。
「な、なぜお母様が？」
「ん？まあ、二人がどうなるのかなと思って試しにやってみたのよ。

女王が死んだら少なくともこの国全体には広がるはずでしょ？
まあ、ここまで広がるとは思わなかったけど」
「で？なぜ貴方はこのような事を？」
「まあ、どちらが王にふさわしいかの最終試験のような物よ。
結局、エリンが王に今のところはふさわしいかしらね？」
「な、ならば貴方は今までの全ての事を知っていたのか！」
「ええ、知っていたわ。貴方が王となって彼ら国民を統制し、
イギリスをさらに発展させる。それは確かに素晴らしい志だわ。
でもね、少年がいったみたいに人間はただただ与えられる、
生活をしていても何も変わらないわ。
人それぞれの生活をして初めて何かを変えようという、
欲望が生まれる。それによって全てが成長していくのよ？」
「わ、私は・・・」
「貴方もこの国をさらに発展させようとする素晴らしい志がある。
でも、それをしようとする考えが極端すぎるんです。
王になっても国民からの支持がなければもちませんよ？」
「・・・・・そうか。私は視野が狭すぎたのか。エリンは、
何故そのような広い思考を持っている？」
「私は彼らと共に外の国を見てきたからです。
その期間は短いものでしたが今までの考え方が、
がらっと変わりました」
「そうか・・・・」
「さあ！そんな事よりも演説よ！演説！」
「え？」
「元々、この演説は前から決まっていたものだ。貴様が初めて国民
の前に、
出る、言えばお披露目会みたいなようなものだ」
「し、しかし私はまだ・・・」
「言って来いよ」
「い、一夏さん？」

「確かにまだ、お前は甘甘のお子ちゃまだ。
簡単な事で泣いたり、」
「うっ・・・」
「暗い所が怖かったり、一人で夜、トイレに行けなかったり・・・」
「あー！もう、今言わなくてもいいじゃないですか！」
エリンは今までの恥ずかしい事を連呼され思わず顔を赤くした。
「あら？本当なの？それは、ぜひ詳しく聞きたいわね」
「お母様も！」
「でも、」
「？？？」
「お前はこの国から一人で外にでて、一人で日本まで逃亡して、
一人で追手からも逃げ切れた。そう言う経験のある国家元首は、
今さらなかなかいないぞ？」
「・・・」
「お前がその経験をどう活かすかによってこの先の人生も変わる。
だから、これからも勉強に励んで言い女王になれ」
「なれるでしょうか？私に・・・」
「最初から諦めてたら出来るもんも出来なくなる。俺みたいにな」
〜一夏・・・〜
「だから、努力しろ！どれだけ辛い事があっても進み続けろ。
そうすればおのずと見えてくる」
「はい！」
「さあ、大急ぎで準備するわよ！クロックも手伝って頂戴！」
「ええ、分かりました」
三人は大急ぎで準備に取り掛かった。
「一夏？」
「おお、来たか。お疲れさん。皆は？」
「みんなには外で待ってもらってる。終わったの？」
「ああ、終わった。もうこの場所に俺がいる意味はない」
「じゃあ、帰ろうか？」

「ああ、帰ろうか学園に」

こうして、一夏たちの王女を救う物語はお終い。
最後にちょこっとだけエリンの演説を聞いてみよう。

「皆様、お集まりいただいて誠にありがとうございます。
それでは、これより王女、ライト・エリン様の演説を始めさせていただきます」
おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
「うぅぅ、人がいっぱいです・・・」
「まあ、そうでしょうね。この国の大半ぐらいは来てるんじゃないの？」
「もう、言いすぎよ。テレビを考えると全国民かしらね」
「な、ぜ、全国民？」
「はあ～昔から貴方はとどめをさすことがお上手で」
「へ？何かいったかしら？」
「で、では言ってきます！」
「ふふふ、行ってらっしゃい」

「おおーあれが王女様」
「お美しい」
「み、皆さんこの度はお集まりいただきありがとうございます」
エリンは事前に準備していたカンペを見ていた。
「え、えっと、その」
ふと空を見上げるとそこには、いくつかのＩＳらしきものが、
見えたが遠すぎてよくは見えなかった。
しかし、エリンは一夏たちだと思い、再びスピーチに戻った。
「私は今まで狭いかごの中で生きてきました」
〜あんなセリフあったかしら？〜

{さあ?あの子のアドリブでしょう、きっと}
「もし、このまま狭いかごの中で生きて女王を継いでいたらきっと、お母様の様にはなれませんでした。
しかし、私はある人物と出会いました。
その人は私にいろいろな事を教えてくれました。
世界の事、仲間、そして人が持つ温かな心を
私に教えてくれました。
それを今度は私が貴方達に教える番です!
ですから、もし私が女王となった日には私についてきてくれますか!?」
人々の喧騒が静かになった。
すると・・・・
「王女様、万歳!」
「王女様、万歳!」
「「「「「王女様、万歳!」」」」」
その叫び声はとどまるところを知らず次々と広がっていった。
「これが、本来あるべき姿なのかもしれないわね」
「そうですね。国民、全てに慕われ支えられる王。それが、王になる条件なのかもしれない」
その叫び声はいつまでもイギリスに響き渡っていった。
「がんばれよ。エリン」

女王編、完結。

第４３話　事の真実（後書き）

こんばんわ。ケンです。
明日から２０日まで更新停止期間に入ります。
これから、定期考査ごとにこうなると思いますので、
自分も学生の身みですので勉強を優先しなければならない、
時期は勉強を優先させていただきます。
それより如何でしたか？
感想などは見ますので。
それでは、２０日にお会いしましょう。
さよなら。

第４４話　大騒ぎな部屋

「こんなものか」
一夏は今までの事について報告書を作っていた。
もちろん、コア人格覚醒に関する事など、全てを書いてあるわけではないが。
しかし、この作業は本来生徒会長の楯無の役目なのだが・・・・
「はあ～まったくお陰で家族が増えた気が・・・」
盛大に一夏に水がかかった
「誰だ！俺に水かけた奴！」
「きゃはははは！面白ーい！」
「ちょ、ちょっとレイ！もう止めなさい！」
「うぅぅぅ」
「や、やっぱりもうちょっと遊ぼうか」
「やったーお姉ちゃん、だーい好き！」
この様にレイを叱り止めさせようとしても涙目でこちらを見てくるので
楯無はつい甘やかしてしまう。
おかげで一夏の部屋は今、水で濡れている所が何か所もあった。
「は～もともとは楯無と相部屋だったのに、今では６人部屋だよ」
溜息をついていると今度は一夏の目に海水がかけられた。
「おぉぉぉー！目が、目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「きゃはははは！！」
「あ、こら海水はダメでしょ！」
「一夏も大変だね」
「そう、思うならお前たちでレイをどうにかしてくれ」
「はいはい、行こうか？白騎士、ライト」
「ええ」
「そうですね」

「さ～今度はお姉ちゃんたちとお外で遊ぼうか？」
「お外？やったー」
四人は外へと出ていった。
「う～まだ、目がしみる」
「だ、大丈夫？」
「まあな」
「でも良いじゃない。賑やかで」
「そうだな、まるで夫婦みたいだな」
「ふぇ？ふ、夫婦？」
楯無は夫婦という単語に思わず顔を赤らめた。
「ん？どうかしたか？」
「べ、別に何でもない！」
「？？？？」
〜夫婦か～じゃあ、あの子たちが子、子供。それもいいかも〜
「ねえ、一夏？」
「ん、何だ？」
「子、子供は何人欲しい？」
「は？」
一夏は思わず子供という単語で顔を赤くした。
「た、例えばよ？例えば私たちが結婚して子供が欲しいってなった時、何人欲しい？」
〜子、子供って早くないか？い、いやでも俺も１８になったら結婚できる、
年齢だし楯無とも別れる気はないし・・・・〜
「そ、その話はまた今度な？」
「う、うん」
コンコン
「ん？誰だろう？」
「ああ、俺が出るよ」
ドアを開けたその先には・・・・

「セシリア・オルコット」
「こんばんわですわ」
セシリアがいた。
「あら、どうしたのセシリアちゃん」
「え、ええまあ少しこの方にお話があって・・・」
「俺にか？まあ、立ち話も何だし入れよ」
「い、いえすぐに終わりますので」
「そうか、で？何だ？」
「その・・・申し訳ありませんでした！」
突然、頭を下げ出した。
「は？」
「今までの事ですわ。私は今まで貴方に大変無礼な事をしてきました」
「別に俺は思ってねえよ。今の風潮から考えるとそういうのもある」
「し、しかし今回の事で私は危うく罪を犯すところでした」
「エリンの事か？」
「はい」
実は一度、エリンに威嚇射撃として撃ってしまったのである。
「ですから、今回の事をすべてひっくるめてお詫びに」
「良いよ、別に。気にしてないし」
「で、ですが」
「まあまあ、良いじゃない。一夏が良いって言ってるんだから」
「それでは今までの事とつりあいませんわ」
「だったら俺よりも強くなれよ」
「え？」
「申し訳なく思ってんだろ？だったら俺より強くなっていつか叩きのめせよ」
「そんな事で良いんでしょうか？」
「まあできればだけど」
「やって見せますわ！必ず！」

「ハハ、楽しみにしてる」
「ええ、首を長くして待っていなさい。絶対に私は超えてみますわ」
「楽しみにしてる」
そのまま、セシリアは去っていった。
「でも、良かったの？」
「何がだ？」
「だって今までの事を謝りにきたんだから普通だったら、簡単に許さないと思うけど？」
「別にどうでもいいんだよ。あんな事。当の本人が良いって言ったらいいの」
「一夏らしいけど」
「もう寝ようぜ？眠い」
「うん、そうね」
二人は一緒の布団に入り仲良く眠った。

第４４話　大騒ぎな部屋（後書き）

どうも～ケンです。
改変ではお久しぶりです～
白黒の方はこんにちは～
如何でしたか？
感想も待っています。
それでは～

第４５話　壮絶な痴話喧嘩。ＰＡＲＴ１

「何よ！あなたが悪いんでしょ！」
「何でそうなるんだよ！大体お前もだろが！」
その日の夜は怒鳴り声がよく聞こえる夜だった。
そして、夜も明け生徒たちが徐々に起き始める時間に悲劇が起こった。
「一夏の馬鹿ーーー」
今日の一夏の部屋での第一声はこれだった。
この叫びはかなりの生徒の部屋にまで届いたとか。

これはＩＳ学園唯一のカップルのお話である。
「は～」
おはよう、シャルロットだよ。
今、食堂で朝ごはんを食べてるけど一夏は何だか元気が無かった。
一夏の頬に手形も薄らと残ってるし、隣に楯無さんがいなかった。
いつもなら朝からイチャイチャしてるのに
今日は一夏一人で、朝ごはんを取っていた。
「ねえ、ラウラ～」
「ああ、分かっている。一夏の事だろう？」
「うん、そうだけど何かあったのかな？」
「周りの生徒によるとあの女と喧嘩をしたらしい」
「ふ～ん、でも何で？」
「さあな、そこまで知らん」
どうやら、ラウラもこんな事があったという事を知っているだけで、事件の原因までは知らないみたい。
その時、本音がトテトテと一夏に近づき聞いた。
「ねえ～おりむ～何かあった？」
「は～どうせ俺なんか」

「お、おりむ～？」
「は～どうせ俺なんか・・・・」
そのまま、本音が帰ってきてしまった。
「どうだった？布仏さん」
「デュッチー、あれはもう末期だよ～」
「ほう、ならば私が行こう」
ラウラが立ち上がり近づいていった。
その間に僕は朝ごはんを取りに行き、戻ってくると・・・
「ラ、ラウラ？」
ラウラが分かりやすいぐらいに凹んでいた。
「あれはダメだ。布仏の言うとおり何を言っても返さず、ただただ、後悔しかしていない」
「ははは・・・ひとまず会長さんに聞きに行こうか？」
「そうだね～」
「うむ、基本は情報収集だな」
こうして、僕たちの長い戦いが始まった。

ひとまず、僕たちは授業があるので昼休みに行くことにし、一夏を引きずるように教室まで連れてきた。
「ほら行くよ！」
「離してくれ～俺なんか授業を受けても何もできねえよ～」
「完全に壊れてるな」
「て言うよりも～お嬢様に依存しすぎちゃってるのかな～？」
「だが、たまにはこういう禁欲生活も必要だぞ」

そして時間は流れて昼休み～
「ここかな？」
「そうだよ～」
「うむ、では入るか」

そのまま僕たちは会長さんがいる教室へと行きました。
「会長～」
「あら皆して、どうしたのかしら？」
「えっと～おりむーとなにかあったのかな～って」
一夏の名前を聞いたとたんに怒り始めた。
「別に何もないわよ！あんな人とは！」
「い、いやどう見てもあったようなんですが」
「と・に・か・く、あの人とは何も無かったの！」
「は～い」
そのまま僕たちは会長とともに食堂に行った。
しかし、これがいけなかった。
まだこれが二年生寮にある食堂なら良かった。
でも、会長も僕たちも普段は一年生寮の食堂で食べてるから
気付かずについ、一年生寮の食堂に来てしまい、
気づいたのは食べている時だった。
「ここそういえば一年生の食堂じゃない？」
「「あ」」
「た、楯無」
「ふん！」
後ろから一夏が声をかけるがあからさまに目を逸らしてしまった。
「そ、その悪かった！この前の事は・・・」
「何の話をしてるのかな？織斑君」
「「「！！！！」」」
普段はあんなにも嬉しそうに名前を呼んでるのに今日は名字で呼んだ。
「た、楯無？」
「あら、いつから私の名前を呼び捨てするようになったのかしら？」
「え、いや、えっと」
「まだ私が許したのなら良いけど許可も、
もらってないのに呼び捨ては、いけないんじゃないのかな？」

話している顔はとても可愛い笑顔なのだが、
絶対零度の冷たさを感じさせる笑顔である。
「楯無、だから、あれは・・・」
「先輩は？」
「え？」
「年上なんだからせめて楯無先輩でしょ？織斑君」
「・・・・楯無先輩」
「最初からそう言えばいいのに。ごちそうさま。
じゃあね、シャルちゃん、ラウラちゃん、本音ちゃん」
「は～い、さよなら」
「は、は～」
「・・・・・・・・」
そのまま、会長さんは帰っていった。
一人の少年にとどめを刺して。
「わ～お、おりむーの魂が見えそうだよ～」
「そんなばか・・・しっかりしろ一夏！」
冗談かと思うけど本当に例えるならそんな感じ。
一夏は会長さんの余りにもよそよそしい態度に、
ショックを受けて保健室に運ばれることになった。

「ん、ん～ここは？」
「保健室だよ～」
「本音。いつから？」
「放課後からかな？もう直皆も来るよ？」
「そうか」
予告通りいつものメンバーに薫子さんも加わり理由を説明した。
あれは昨日の放課後の事だ。

いつも通りアリーナでＩＳを少し動かして、
整備室で確認した後、部屋に戻っていたんだ。
そうしたら・・
「あの～織斑君、ちょっと良いかな？」
「はい、何ですか？」
そこには２年生が参考書を持って俺の前にいた。
「どうかしましたか？」
「確か織斑君て天才とか言われてたよね？」
「ええ、まあ。昔の話ですがね」
「今でも頭いいんでしょ？」
「まあ」
「お願い！勉強教えて！」
「へ？」
「実はもうすぐ考査があるでしょ？
実技の方は単位は問題ないんだけど一般教科がやばいの」
それは分かる。何せこの前の考査なんか最後の問題で、
難関大学の過去問も出たぐらいなのだ。
まあ、一夏からすれば既に大学の知識もあるので簡単に解ける。
どうやって勉強したかは不明だが
しかし、それは一夏の話。
普通は当然詰まる。
「いいですけど何で俺なんかに？」
「いや～職員室に行く途中にちょうど織斑君がいたから」
「単元はどこです？」
「対数と微分なんだけど、大丈夫かな？」
「ええ、大丈夫ですよ。どこでしますか？」
「よかった。だったら私の教室に行こう。近いし」
「分かりました」

という事で俺は今、先輩に教えていた。

「ここはどうするの？」
「ここはですね・・・・」
何問かを解説し参考書の類題を何問か解いて今日は終わった。
「ありがとう！織斑君、分かりやすかったよ！」
「そりゃ、どうも」
「じゃあ、帰ろう・・・きゃ！」
「どうしました？」
そこにはゴキブリがいた。
ＩＳ学園の教室でゴキブリはレアである。
「いやぁぁ！ゴキブリはいやぁぁ！」
「お、落ち着いて・・・うお！」
「きゃあ！」
机の脚に引っかかり倒れてしまった。
「誰かいるの？」
「「え？」」
「な！」
そこには、先輩を押し倒した俺をにらむ楯無がいた。
「た、楯無」
「会長」
「へ～一夏は私という彼女がいるのにも関わらず押し倒すんだ？」
「ち、違う！これは事故であって断じて疾しい気があったわけでは」
「そ、そうです！」
「もう良いもん！」
そのまま、楯無は出ていった。

そして部屋～
一夏の部屋では物が倒れる音が響いた。
「最低！彼女がいるのに押し倒すなんて！」
「だから、さっきから違うって言ってるだろ！」

「あのどこが違うのよ！どう見ても押し倒してたじゃない！」
「だから、あれは事故でああなったんだ！」
「違うでしょ！一夏、鼻伸ばしてたくせに！」
「伸ばしてねえよ！」
「それにあの子の叫び声が廊下にまで響いてたけど？
いやぁぁぁ！って言うのが響いてたけどどういう意味かしら？」
〜もしかしてゴキブリの時の叫び声か！〜
「黙ってるって言う事はもしかして、無理やりだったんでしょ？」
「な！ち、ちが」
「うるさい！変態！最低！けだもの！」
「！！！」
一夏の堪忍袋の緒が切れた。
「さっきから言いたい放題言いやがって！
お前だってこの前、男と抱き合っていただろうが！」
「はあ？何の事よ！」
「ほほ〜とぼけるのか？前にロシアの人が来たときにしてたくせに？」
〜もしかして一夏、あの時の事を？〜
「確かにそうだけど、あれは・・」
「ほら、認めた！お前の方がよっぽど最低だろうが！」
「な、何ですって！」
そのまま、口論は朝まで続いた。
「一夏のバ〜カ！」
いつもなら「天才だし」といって返すのだが、
興奮していたため言ってはならない事を言ってしまった。
「だったら楯無のブ〜ス！」
「！！！！！」
一夏は状況に気付かずにそのままののしる。
「お前みたいなわがまま娘と付き合っている俺の身にもなｒ」
バチィィィィィン！

「な、なにすん」
一夏はそれ以上何も言えなかった。
楯無が泣いていたからである。
「た、たて」
「一夏の、」
「え？」
「一夏のバーーーーーーーカ！」
そのまま部屋から出て行ってしまった。

「という事なんだ」
「「「は～」」」
「みんな？」
「「「「それはダメだよ～」」」」
「うぅ！」
「いくら怒ってても、ましてや彼女にブスは無いよ～」
「・・・・」
「知ってる？今日、朝一番で私の部屋に来てわんわん泣かれたのよ？
慰めるのにどれだけかかったか」
「・・・・・」
「は～一夏は悪いと思ってるの？」
「あ、当たり前だろ」
「だったら手伝ってあげる」
「え？」
「名づけて、おりむ～とお嬢様の仲直り大作戦！」
「「「いえーーー！！！」」」
少年と少女達の戦いが始まった。

第４５話　壮絶な痴話喧嘩。ＰＡＲＴ１　（後書き）

こんばんわ～
連続更新です。
如何でしたか？
それでは～

第４６話　壮絶な痴話喧嘩ＰＡＲＴ２

私達の作戦はこうだ。
会長さんと親しい薫子さんが一夏が隠れてる部屋へ誘導しそれを聞く。
それで、仲直りする、それが計画。
薫子さんが部屋に連れるところまでは無事に成功した。
「で、何があったのさ？」
「別に何も無かったもん」
「今朝、あんなにもここで泣いていたのに？」
「うっ！」
「で？何があったの？」
「聞いてくれる？」
「勿論！」
「一夏と喧嘩したのよ」
「ふんふん」
「それでね・・・・」
＜一夏の話したものと同じため省略＞
「て言う訳なの」
「ふんふん。それでたっちゃんのその抱きしめられてたのって？」
「ああ、それはね・・・」

ロシアの人が第二移行（セカンドシフト）したからそのデータを見せる予定だったの
「あ、こんにちは。ラッシュさん」
「あら？」
「どうかしましたか？」
すると突然抱きしめられた。
「え、ちょ！」
「いや～ん、もう可愛い！何何？恋でもした？」

「え、ええまあ」
「それに胸も大きくなったかしら？」
「ちょ！やん！ラッシュさん！」
「ああ、ごめんね」

「て言う事なの」
「つまりはその人が髪が短くて男性に見えたという訳ね」
「うん」
「だってさ織斑君」
「へ？」
ベッドの下から一夏が出てきた。
「た、楯無」
「ふん！」
「悪かった！」
「え？」
「俺の勘違いでお前にひどい事言って悪かった！」
「一夏・・・・」
「ま、俺は少し悪かっただけだけど・・・」
「あ、バカ！」
「へ～少し？少しって言った？」
「ああ言ったけど、どうかしたか？」
「少しな訳がないでしょうが！」
「「！！！！」」
「私にブスって言ったことが少し悪いって違うでしょ！
全部あなたが悪いんでしょうが！」
「全部だと？」
「そうよ！全部よ！全部！あなたが浮気したからでしょうが！」
「んな訳あるか！俺は浮気なんかしてないし第一、お前が７割悪いんだろが！」
「七割ですって？あなたが全部悪いんでしょうが！」

「違うだろうが！」
「ちょ、ちょっと落ち着きなって！」
「「あ？」」
「え、えっと」
「だったらここはＩＳ学園だ。決闘で決めようじゃねえか！」
「は！良いわ。この際、どっちが学園最強か決めようじゃないの！」
「良いぜ！もし、お前が負けたら１週間メイド服で俺に服従してもらうぞ？」
「良いわよ！」
「ちょ、ちょっとたっちゃん！」
「でも、貴方が負けたら女子生徒の制服で、なおかつ、ミニスカートで１週間登校して授業受けなさいよ」
「は！良いぜ」
「あ～あ、もう知らない」

二人の戦いが始まろうとしている。

第４６話　壮絶な痴話喧嘩ＰＡＲＴ２　（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
こういう痴話喧嘩には巻き込まれたくないですね（笑）
では、さよなら～

第４７話　壮絶な痴話喧嘩ＰＡＲＴ３

「という事なの」
薫子は別室で待機していた他のメンバーに先程の決闘の様子を伝えた。
「は～なんでこうなっちゃうの？」
「一夏の性格を考えれば無理はないが」
「そうだとしてもお姉ちゃんと一夏の決闘は危険」
簪の言うとおり両方のＩＳは既に第二形態移行（セカンドシフト）済み。
それにつれて破壊力も上がる。これの意味するものは・・・
「小さな戦争みたいなものか」
「だね」
そのまま日は過ぎていった

決闘当日～
第三アリーナには全ての専用機持ちと何故か教員が数人いた。
「何で先生方がここに？」
「実は織斑君と更識さんが戦うと言うので来ちゃいました」
「だとしても勤務中では？」
「終わらせてきた」
「織斑先生！」
「きょうか、ではなく先生もこちらに？」
「ああ、国家代表と国家代表クラスの腕を持つ奴らの戦いだ。見て損はないだろう」
「えっと、さっきの国家代表って誰なんですか？」
「ああ、そう言えば知らなかったな。更識は学園唯一の国家代表だ」
「代表候補生ではなくてですか？」
「ああ、余り言いふらすなよ？」
「これはすごい事になりますわね」

「一夏、もし今謝るんだったら罰ゲームの期間を短くしてあげるけど、どうする？」
「それはこっちのセリフだ。もし今謝るんなら罰ゲームをなくすぜ」
「ふふふ、良い提案だけど結構よ」
「そうだな」
「「プライドにかけて！！」」
二人の壮絶な痴話げんかが始まった。

楯無は進化した能力で水を操り高圧水流を一夏に向け、放つがそれを一夏は翼で風を起こし水を辺りに弾き、雪羅のカノンモードを放つが楯無も負けじと避けまた高圧水流を放つ。この繰り返し。

「さっきから何で会長さんは水流しかしてないのかな？」
「恐らく何か策があるんだろう」
その事には一夏も気づいていた。
〜何でさっきからあいつは他に攻撃してこないんだ〜
『そろそろかしらね。レイ！』
『了解！』
楯無は巨大な水の塊を一夏に向けて投げた。
「ちっ！邪魔だ！」
一夏はカノンを拡散させ破壊した。
「いつまでこんな事してんだ！」
「ふふふ、忘れたの？」
「何をだ」
「クリアパッションの事よ？」
「しまっ！」
楯無が指を鳴らすと辺りが爆発に包まれた。

箒「これを会長は狙ってたのか」
虚「辺りに水を撒き散らしその後に
　クリアパッションを行い
　広範囲に爆発を起こして一気に殲滅」
シャル「多対一では凄い威力だね」
ラウラ「一対一でも十分な破壊力だな」
セシリア「流石に一夏さんでもあれを喰らったら」
千冬「まだだ」
「え？」
「あいつがあんな簡単にやられると思うか？」
千冬の言うとおり楯無もまだ警戒をしていた。
〜まだ、一夏はどこかにいるはず。けど、爆煙で何も見えない〜
すると突然、楯無が吹き飛ばされた。
「きゃ！」
慌てて周囲に目をやると何もない所で水がはねたりしていた。
〜まさか、アクセル？それに掠ったけど
さっきの攻撃は零落白夜での斬撃。
このままだと絶対に負ける。負けたらメイド服・・・・・
絶対に嫌だ！絶対に勝つ！〜
楯無は辺りに水を放ち無差別に爆発させ始めた。
〜こうすれば一夏もこっちには攻撃はしにくくなる。
その間に１０秒稼ぐ！〜

その頃、一夏はというと楯無の上空で待機していた。
〜やっぱり、ああなったか。人って面白いよな。
一度何も見えないものに攻撃されたらそこら辺に向かって
攻撃するんだよな〜〜
一夏が雪羅のカノンモードを発動しギリギリまでエネルギーをチャージした。

{よし、チャージ完了。終わらせるか}
「終わりだ、楯無！」
「え？」
楯無が上を向いた瞬間に雪羅のカノンが包みこんだ。
「終わったか？」
「ま、まだよ」
「！！驚いたな、まだ立てるのか？」
「ギリギリ水で自分を包んだのよ。まあ、ほとんど防げなかったけどまだ、エネルギーは残ってる。貴方ももう無いんでしょ？」
「まあな、さっきの一撃にほとんど使ったからな。後、一撃が限界かな」
「そう、あたしも一回が限界かな」
「・・・悪かったな」
「え？」
「あの時の事だよ。お前を傷つける発言して」
「う、うん」
「お前が抱き合ってたの見たとき、イライラしたんだよ。ほかの奴と抱き合ってから」
「あれは・・・」
「分かってる。でも、女だとしても誰かにお前が抱きしめられてるのを見るとイライラするんだ」
「それって嫉妬？」
「ああ」
「そ、そう」
楯無も直球でそう言われ顔を赤くした。
「わ、私も一夏の意見も聞かずに怒ってばっかでごめん」
「ああ、楯無、愛してる」
「私も愛してる、一夏」

シャ「よかった。これで一件落着かな？」
ラウ「ああ、これでひとまずは終わりだな」
全員が帰ろうとして立ち上がろうとした時・・・

「「でも、罰ゲームの話は別！」」
「「「は？」」」
「罰ゲームだけは絶対に貴方にさせて映像にとる！」
「は！俺も一緒だ。お前をメイドにして映像とって一生取っといてやる」
「「これで終わらせる！！」」
二人とも飛び上がり一夏は目の前に１０枚の壁が、楯無は周りにレイを巻きつかせ飛び上がった。
「喰らえ！」
「終わりよ！」
二人の蹴りが同時にぶつかり大爆発が起こった。

千冬「何で二人はああなるんだ」
シャ「似た者夫婦だから」
ラウ「同感だ」
本「で～も、どっちが勝ったんだろ～」
爆煙が晴れそこに立っていたのは・・・・・

「お、おはようございます。い、一夏」
「違うだろ？ご・主・人・様だろ？はい、もう一回」
「ぐ！お、おはようございます。ご、ご、ご主人様」
「よろしい」
勝ったのは一夏だった。
という事で１週間のメイド服従が決定した。
学園にも許可を取って授業もメイド服で受けるという生き地獄が与

えられた。
「うぅ。何で理事長も承認するかな。普通はダメでしょ」
「ほらほら、口を動かす暇があれば働け」
「ぐぅ。は、はいご主人様」
周りの視線はメイド姿の楯無に注がれている。
ただでさえファンがいる中でのメイド姿である。
さっきから頻繁に写メを撮っている音が聞こえる。
「わ～お、会長、かわい～いですよ～」
「おお、本当だ。たっちゃん可愛いよ」
「まさか、会長がここまで似合うとは」
「うぅ、見ないで～」
「はっはっはっは！愉快、愉快」
「織斑君てああ見えてSなんだね」
「だね」

だが、何故楯無がこんな恥ずかしい事を1週間も出来ているのか。
その理由を見てみよう。
「は～やっと今日も終わった。いつもより長く感じたわ」
「でも、可愛かったぞ？」
「へ？」
可愛いという単語に思わず顔を赤くした。
「か、可愛い？」
「そう、可愛い。襲いたくなるほど可愛い」
そう言い一夏は楯無を押し倒した。
「ちょ！い、一夏！」
「楯無は俺だけの可愛いメイドさん」
「バカ・・・」
「天才だ」
そして今日も二人は快楽に溺れていく。

第４７話　壮絶な痴話喧嘩ＰＡＲＴ３（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
これで痴話喧嘩編は完結です。
感想もお待ちしております。
次回は千冬さん奮闘劇編です。
では、さよなら～

第４８話　千冬さん奮闘劇

「は～」
今、溜息をついたのは織斑千冬。
かつて第一回モンドグロッソ世界大会で優勝し世界最強の称号であるブリュンヒルデを貰い世の女性の憧れとして君臨していたが二連覇を達成するかと思われた第二回大会で弟が誘拐され救出しに行く代償として不戦敗となり日本代表の座を降り、その後色々ありながらも現在はＩＳ学園の教師として納まっている。
しかし、彼女には一つ悩みがあった。
「一夏・・・・・」
弟の一夏との関係が二度の事件により冷めきっていた。
これは彼女が一夏との関係修復にはしる物語である。

「溜息をついちゃうと幸せが逃げますよ。織斑先生」
「ああ、山田君か」
彼女は山田麻耶。
一組の副担任であり元日本の代表候補生で、さらに千冬も認める操作技術を持つ。
ちなみに上から読んでも下から読んでも、やまだまやである。
「もしかして一夏君の事ですか？」
「ああ、あれから何どか喋りかけてみたんだが一向に取りあってくれないんだ」
「そうですか」
「は～」
あのブリュンヒルデと呼ばれていた者のため息はレアである。
「う～ん、私も手伝いましょう！」

「本当か！？」
「ええ！」
「すまない」
「いえいえ、では作戦を考えましょう」
その日、徹夜で作戦を練っていた二人だった。

翌日～
作戦ＮＯ．１　＜一緒に食事してみよう！＞
「だが、私が誘ってもあいつは必ず拒否するどころか
話すら聞いてくれないぞ」
「そうだと思い助っ人を呼びました～」
「助っ人？」
「はい、それではどうぞ～」
「失礼致します」
部屋に入ってきたのは一夏の恋人の楯無であった。
ちなみにメイド期間は先日をもって終了していた。
「更識・・・」
「話は山田先生から聞いています。ぜひ、協力させて下さい！」
「本当か！」
「はい！私も一夏と織斑先生の関係を元通りにしたいんです！」
「更識・・・」
～ふふふ、これに協力したら一夏との関係を
認めてくれるに違いないわ。そうすれば一夏との結婚も・・・～
「まさか結婚を有利にしようとか思っていないだろうな？」
「！！！そ、そんな事は考えていませんよ～
私は唯、二人の関係を修理したいという気持ちだけです。
そんな疾しい事は思っていません！」
「ほ～正直に言えば二人の関係を認めてやらんでもないぞ？」
「本当ですか！」
「考えていたのか」

「あ！そうだ～今日、生徒会の大事な会議が・・・」
逃亡しようとする楯無の頭を千冬は片手で鷲掴みした。
「えぅ！」
「お～そうか、そうか。そんなに協力したいか～」
「え、えっと・・・」
「協力するよな？」
「・・・・・・はい」
「そうか、そうか」
千冬の顔には満面の笑みがあったが後ろには刀を持ち
腕が何本もある悪魔がいたとか、いなかったとか。

昼休み～
「一夏～お昼食べよ～」
「ああ、そうだな」
昼休みになり楯無が一夏を食堂に誘った時点から作戦は始まった。
作戦内容はこうである。
楯無が一夏を食事に誘い席に座らせる。
そこに千冬と麻耶が座席を一緒にする。
必ず一夏は席を変えようとするが楯無がそれを何が何でも座らせる
というもの。
「一夏～どこに座ろうか？」
「そうだな、あそこにするか」
「ＯＫ～」
そして二人が座り席につき千冬達も座ろうとした時・・・
「ラウラ～一夏たちと食べようか？」
「うむ、そうだな」
ラウラとシャルロットが現れた！（ＲＯＧ風に）
～やばい！あの二人をどうにかしないと！～
麻耶が二人を説得しようとした時、周りの空気が重くなった。
「「「！！！！」」」

麻耶が後ろを振り向くと千冬が物凄い形相で二人に殺気を飛ばしていた。
「な、何だろう？このあそこに座ればただでは済まさんぞ！みたいな空気は」
「ひ、ひとまず向こうに行こう。シャルロット」
「そ、そうだね」
敵は去っていった。
「ははは・・・」
二人が去ると同時に千冬は満面の笑みを浮かべた。
ちなみにその笑みを見たものはあまりの美しさに全員鼻血を出したとか。
「じゃ、じゃあ行きましょうか？」
「うむ！」
二人は目標に向かっていった。
しかし、一難去ってまた一難である。
「おりむ～一緒に食べていい？」
学年一のＴＨＥ　ＧＯＤ　ＯＦ天然の称号を持つ布仏本音が現れた！（ＲＰＧ風に）
楯無は瞬時に考えた。
｛しまった！この子の存在を忘れていた！この子は殺気とか受け流すのが上手かったんだー！
どうしよう、どうしよう！これじゃあ、作戦が台無しじゃないのー！！｝
絶対絶命の楯無達、それに気付かずにご飯を食べている一夏。
楯無は祈った。
｛誰でもいいからこの子をどうにかしてー｝
祈りは通じ救世主が現れた。
「本音ーどこなの～」
「な～に～、お姉ちゃ～ん」
布仏虚である。

｛｛グッジョブ！虚ちゃん！今度、何かおごってあげるからね！｝｝
楯無は心の中で拍手喝采していた。
それは麻耶たちも同じだった。
｛｛布仏姉、成績を上げておいてやろう！｝｝
｛｛布仏さんは救世主です！｝｝
「さあ、行きしょう！織斑先生」
「ああ！！」
二人は救世主に感謝しながらテーブルに向かっていった。
｛｛後、少し、少しで一夏と一緒に食べられる！｝｝
「いち・・」
泣きっ面に蜂である。
声をかけようとした時ラグナロクを告げる
ギャラルホルンが鳴り響いた。
『織斑一夏君、織斑一夏君、至急理事長室まで来て下さい。
お届物があります』
「「「！！！」」」
「おお、ついに来たか！」
「な、何が来たの？」
「懸賞で応募した仮面ライダーの全劇場版ＤＶＤセットだよ！
当たってよかった～」
一夏は意気揚々と走って行った。
「そ、そんな～」
「徹夜で考えた作戦が・・・・」
楯無と千冬はがっくりと肩を落とした。

作戦ＮＯ．１　＜一緒に食事してみよう！＞失敗。

第４８話　千冬さん奮闘劇（後書き）

おはようございます～ケンです。
如何でしたか？
感想もお待ちしております。
それでは、さよなら～

第４９話　千冬さん奮闘劇２

作戦ナンバー２　一緒の部屋に入れよう作戦

「今度は大丈夫なのか？」
千冬が麻耶に疑いの目を向ける。
「だ、大丈夫です！それで、まずは
彼に連絡があると言って部屋に入ります」
「うむ」
「そして先輩が入った瞬間に外からドアが開かないように
細工して一緒の部屋に入れて話し合おうという作戦です」
「ふむ、だがまず私は一夏の部屋にはいれるかどうか。
門前払いをくらうのが見え見えだが」
「大丈夫です！私に任せて下さい！」
「お、おう」
妙に自信のある顔で千冬を黙らせた。

そして次の日～
「あ、織斑君！」
「はい？何でしょうか？」
「実は今日、連絡があるので部屋に行っても良いかな？」
「え？別に今ここで話せば」
「あまりここでは言えないような話なんですよ」
麻耶が一夏に耳打ちした。
「分かりました。何時くらいに来ますか？」
「夕食後でいいかな？」
「分かりました」

「さあ、先輩！舞台は整いましたよ。後は貴方の役目です！」
「あ、ああ。行ってくる」
「はい！」
千冬は一夏が好きだったお菓子をいくつか持って部屋までの道のりで何を話すか考えていた。
{何から話せばいい？やはり最初はこんばんわか？いやそれとも元気か？何を言えばいい}
「ちょ、ちょっと先輩！通り過ぎてますよ！」
「す、すまない」
そして一夏の部屋の前に到着した。
「よ、よし」
気合いを入れドアをノックした。
「は～い、今開けま～す」
ドアを開けると一夏が見えた。
「い、一夏」
「何の用だ？」
「わ、私が連絡しにきた」
「山田先生の筈だろ」
「や、山田君は急用で私が代りにきた」
「ちっ！」
そのまま一夏は部屋に入ってしまった。ドアを開けたままにして
「は、入るぞ」
「で？何なんだ？用ってのは」
「よ、用はない」
「あ？まさか俺と話す口実を作る為だとか言わないよな？」
「そ、そうだ」
「お前と話すことはない。俺は出ていく」
「ま、待ってくれ！お前と話がしたいんだ！」
「黙れ！お前と一緒にいたら傷が痛むんだよ！」

「！！！！」
「それでもお前は話がしたいとでも言うのか！？ああ？」
「そ、それは・・・・」
千冬は何も言えなかった。
傷を与えたのは千冬自身。
言う権利などある筈もない。
「俺は出ていく」
そのままドアを開けて出ていこうとしたら開かなかった。
「あれ？何であかないんだ！」
実は事情を聞いた専用機持ちが山田先生の
許可のもとＩＳを展開し外からドアを押し込んでいた。
「これで良いんだろうな！」
「ええ、良いわよラウラちゃん。二人の関係の為に！」
「ああ！」

「ドアは開かないようにしている」
「お前！」
「私はお前と話がしたいんだ。頼む、一夏。この通りだ」
「！！！」
千冬が一夏に土下座をしていた。
「・・・・・・分かった」
「ほ、本当か！」
千冬は嬉しそうに顔を緩めた。
「そ、その何だ。お菓子もあるから食べるか？」
「置いとけよ。話は何なんだ」
「そ、その元気か？」
「ああ」
「からだとか壊していないか？」
「ああ」
「無茶とかしてないか？」

「・・・偶にしている」
「ま、まあ偶になら」
それからというもの千冬は今まで
貯めこんでいたものを一気に吐き出した。
そしてあの時の事に入った。
「お、お前の傷何だが」
「！！！」
「そ、その・・・」
「まさか謝るとかしねえだろうな」
「・・・・・・」
「図星か。俺は何度謝られてもお前を許さねえぞ！
ずっと死ぬまで俺はお前を恨み続ける！」
「・・・分かってる」
「あ？」
「分かっている。お前にずっと恨まれていても私は構わない。
お前が生きてくれているだけで私は満足だ。
お前に家族として見られていなくても」
「・・・・・・」
思わぬ攻撃によって一夏はいつもの調子を崩していた。
「ただこれだけは知っていてほしい」
「何だ？」
「私はいつでもお前を心配している。
お前のためならこの命も捨てる覚悟だ」
それを言い残し千冬は部屋から出ていった。
「くそっ！調子が狂う」
ふと千冬の持ってきたお菓子が目に入った。
あの事件が起こる前はよく千冬と二人で
楽しく食べていたものだ。
それを見ると心がざわつく。
「俺はいったい何を望んでいるんだ・・・・」

「あれで良かったんですか？」
「ああ、私の言いたい事は全て言った。あれで十分だ」
「そうですか」
「さあ、仕事に戻るとしよう」
「はい！」
この時のと千冬の顔は満足したような顔だったという。

徐々に変わっていく少年の心。
この先どうなるかはお楽しみ。

第４９話　千冬さん奮闘劇２（後書き）

おはようございます～ケンです。
如何でしたか？
では、学校に行ってきま～す

第５０話　テスト

知られることのない会話～
「集まったみたいだね、全員」
「うむ」
「じゃあ、始めようか」
「なぜ我々はここに集められたのだ？」
ここは専用機の人格が集まる空間。
表に出ていなくても存在する事は存在している。
そして先程質問したのはシュヴァルツェア・レーゲンの内なる人格。
「皆さあ今の搭乗者に文句とかないの？」
「「「「・・・・・・」」」」
「私は無いよ～お姉ちゃん大好き！」
「私もです」
「ま、そう言うのもあるけど大体は文句があると認識するわ。
例えなくても本当にその人物は私達を使うに値する人物か
見極めないといけない」
「それは良いがどうやってするのだ？我々は
貴様らみたいに覚醒はしていないぞ」
赤髪の少女が質問した。
彼女は紅椿の内なる人格。
「ええ、知ってるわ。でも、忘れたの？
私たちは１回だけ現実に行くことができる」
「「「！！！！！」」」
「ではその一回を使うのですか？」
「ええ、そしてどんな方法でも構わないから
搭乗者をテストする。そこで合格ならば
それでいいけどもし不合格ならば・・・わかってるわね？」
「「「「ああ」」」」

「なら、やりましょうか」
「「「了解」」」
それぞれの搭乗者のテストのために
旅立っていった。

現実～
「さてといつもの通り動かすかね」
一夏がアリーナでＩＳを展開しようとした時
待機形態が震え出した。
「ん？出たいのか？あいつら」
待機形態が震えると彼女たちが外に出たいという証拠だった。
それに従い鞘を抜くと二人が現れた。
「どうかしたのか？お前ら」
「一夏、貴方をテストするわ」
「何を言って・・！！」
突然、白式が雪片を展開し襲いかかってきた。
「な、何すんだ！？」
「言ったでしょ！あなたをテストするのよ！
私の搭乗者として相応しいかね！」
「はあ？何を」
「貴方の相手は彼女だけではありませんよ！」
「がふっ！」
一夏は白騎士に蹴り飛ばされ壁にまで蹴り飛ばされてしまった。
「がはっ！はあ、はあ」
「言ったでしょ？これはテストだって」
「そうかよ。だったら・・！！！」
「どうしたのですか？まさか私たちと
生身で戦うつもりですか？」
「武装が出ない？」

いつも通り翼と雪片を出そうとするがまったくでなかった。
「当たり前でしょ。私たちが貴方から離れてるんだから
武装なんか出せるわけないでしょ！」
「がはっ！」
一夏はなすすべなく殴られ続けた。
「所詮、貴方たち人間は私たちが力を
貸さなければ唯のサンドバックなのよ！」
「がぁっ！」
「白式さん、そろそろ」
「そうね。所詮は人間か。期待してたのに」
一夏は壁にもたれ動かなくなった。
〜はは。情けねえなあ。わかってた筈なのに。
やっぱり俺は弱いなあ。
あいつらの言うとおり俺は何もできない〜

「まだ、立つの？」
「ああ」
「何もないのにですか？」
「確かにお前らの言うとおり俺はお前たちに
力を貸してもらえなきゃ唯のゴミだ」
「わかって・・」
「でもな、俺はこんな所で止まる訳にはいかないんだよ！」
「何故ですか？」
「あいつを守るためにだ！」
愛する者の為に止まる訳にはいかない。
「さあ来い！雪片！」
そう叫ぶと一夏の手に雪片弐型が展開された。
「「！！！」」
「さあ、始めようか。俺たちの戦いを！」

「おおおおおおお！」
「くっ！」
一夏の剣を防ぐが一夏のほうが強かった。
「おら！」
「きゃあ！」
「この！」
白騎士の蹴りを雪片で防ぎその足を持った。
「な！」
「せいやぁぁぁ！」
「きゃあぁぁ」
白騎士は壁に投げつけられた。
「はあ、はあ、どうだ」
「はは！流石は一夏。でも・・」
「私たちの力はこんなものではありません」
二人の雰囲気が変わった。
「行くよ！白騎士！」
「ええ！」
「「進化（エボリューション）！」」
「な！」
二人をすさまじい量のエネルギーがつつんだ。
「何なんだよ！今度は！」
そこに現れたのは白式でも白騎士でもなく一人の女性だった。
「誰だお前？」
『私は白式であり白騎士でもある』
そう言い女性は剣を持った。
「どういう意味だ？」
『そんな事はどうでも良い』
「そうだな。来い！」

『武装を出せたからといって』
「な！消え」
『調子に乗るなよ。小童が』
いつのまにか女性は一夏の後ろにいて
言い終えた瞬間、一夏が赤く染まった。
「が・・あ」

始まったテスト。
全員はテストをクリア出来るのか？

第５０話　テスト（後書き）

おはようございます。ケンです。
如何でしたか？
一応、主要メンバーは書こうかと思っています。
それでは、さよなら～

第５１話　我の目に狂いは無かった！

「が・・・あ・」
『私達がいないのにも関わらず武装を出せたのは褒めてやろう。だが、それで調子に乗るとは愚の骨頂、いや、それ以下か？ま、人間風情が思いあがるなという事だ』
女性は一夏に近づき頭に足を乗せた。
「が・・・ぁ」
『ほう、まだ生きてるか。まあ良い。そう言えばお主はさっき護る者のためにとまるわけにはいかないとか言ってたな。よく、そんな状態であんな大口を叩けるな。関心するぞ』
「ぐ・・う」
『ここまで言われて何も言い返せんとはな。ならば我にも考えがある』
女性はアリーナの出口へと体を向けた。
「ど…どこに行く気だ」
『貴様の愛する者のところにだ』
「な・・・ぜだ？あ・・いつは・・関係ない」
『関係ある。レイもテストをするからな』
「！！！」
『こんな奴が守るというぐらいだからそれはそれは弱いんだろうな』
「！！！」
『ならば、レイの代わりに我がそいつを

殺してきてやる』
女性はそれを最後に空へと飛んで行った。
{{くそ！体が動かない。楯無・・・・
欲しい。力が欲しい！あいつ(楯無)を絶対に守れる力が欲しい！}}
{{欲しい？}}
{{ライト・・・}}
目の前に銀色の髪をした女性が現れた。
{{答えて下さい。欲しいですか？力が}}
{{ああ、欲しい！あいつの笑顔を護りたい！}}
{{ふふ、行きましょう。光とともに}}

『所詮は人間か・・・・お主に期待した我の目が
間違っていたのか？のう、一夏よ』
後ろには光の翼を生やした一夏が立っていた。
{{血が止まっている？まさかライトが
あ奴に力を貸しているのか？}}
すると一夏は腕を軽く振った。
そう、軽く振った。
『な、バカな！』
地面に光が走り地面が切り裂かれた。
『はは・・・ふはははははははは！
面白い！面白いぞ！一夏！
それでこそ我が期待している男だ！
我の目に狂いはなかった！』
「零月」
一夏は零月を放ち女性に放つが女性も
同じく零月で相殺した。

『一夏！もうこれ以上していても時間の無駄だ！
この一撃で決めようぞ！』
「そのつもりだ！」
〖一夏さん！私が止血出来るのも、もう時間がありません！〗
〖安心しろ。これで終わらせる〗
『喰らえ』
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
『零月』
「零月！」
二つの零月がぶつかり合った。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
〖貴方に死なれては私も困ります。はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！〗
『！！！！』
一夏の零月が女性のを押し始めた。
〖馬鹿な！私たちがいないのにも関わらずこの威力は〗
「「おぉぉぉぉぉ！せいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」
『ぬう！』
アリーナのバリアを突き破り
エネルギーの柱が天へ放たれた。

「「「「「「！！！！！！！」」」」」」
「何なのあれ？」
鈴が驚いたように声を出した。
〖この感覚、もしかして〗
「ちょ、たっちゃん！」
楯無が皆の制止を受けずにアリーナへと向かっていった。

「はあ、はあ、はあ」
〖流石です。一夏さん〗

「いやお前のおかげだ、ライト。礼を言う」
一夏は立ち上がり地面に刺さっている雪片弐型に近づいて行った。
「白式、白騎士。俺はこの先もっと強くなる。
お前らの力を借りなくてもあいつを守れるくらいに」
そのまま帰ろうとすると二人の声が聞こえた。
「なに、かっこつけてんの？」
「そうですよ。ご主人様（マスター）さま」
「お前ら・・・」
「ひとまずは合格かな？」
「ええ、そうですね」
「は！そりゃ・・・よか・・・った」
それを最後に意識を失ってしまった。

〜ん？ここは？何だかいい匂いがする〜
目を開けるとそこは医務室だった。
「ようやく目を覚ましたか？」
「お前・・・」
隣に千冬が座っていた。
「更識が号泣しながら血だらけのお前を連れて来た時は
ここの先生も驚いたそうだ。更識に感謝しておけよ？」
楯無の顔を見ると涙の跡がうっすらと見えた。
「ありがとな、楯無」
一夏が楯無を撫でてやると先程まで
悲しそうだった顔が一変して嬉しそうな顔をした。
「それでいったい何があった？」
「・・・・・学園の専用機持ちに伝えろ。
直に自らの専用機の人格が己をテストすると」
「意味はよく分からんが伝えておこう」
そのまま千冬は出て行った。

「ん～一夏？」
「ああ」
「一夏！」
「うお！」
いきなり楯無が抱きついてきてベッドから落ちかけた。
「よかった。本当に良かった」
「楯無・・・ありがとうな」
「うんうん」

「それで何があったの？」
「ああ、コア人格が表に出てきて俺を
テストするとか言って襲ってきた。
もうすぐレイもするらしい」
「そうなんだ。だからさっきから呼んでもつながらない訳ね」
「気をつけろよ。生身でＩＳと闘うって事になるからな」
「うん、分かった」

数日後～
楯無は今、アリーナでレイと向き合っていた。
「レイちゃん・・・やるの？」
「うん！お姉ちゃんは大好きだけどテストしないといけないから」
「分かったわ。やりましょう」
「うん」
楯無のテストが始まった。
それと同時刻にもう一人も始まっていた。
「貴様は・・・」
「私はシュバルツァ・レーゲンの人格」

「一夏の言っていたテストという奴か」
「そう」
「闘うのか？」
「いえ、私は他とは違うやり方でやります」
突然、輝きだしその場から二人は消えた。

第５１話　我の目に狂いは無かった！（後書き）

おはようございます～ケンです。
如何でしたか？
これで一夏のテストはお終いです。
次はヒロイン達のテストを描きます。
それではさよなら～

第５２話　信じる心

ラウラは別の空間にいた。
「ここは？」
「ここは私の空間」
目の前にシュヴァルツェア・レーゲンの人格がいた。
「お前のテストは他とは違うと言っていたが何をするつもりだ？」
「わたしのテストはこれです」
目の前にいきなり映像が流れだした。
「こ、これは！？」
ラウラが動揺し始めた。
その映像の内容は昔の軍の映像だった。
『ねえ、今回もあの人最下位だったよね？』
『そうだな。ＩＳが生まれる前はこの軍ではトップだったのに今ではもうゴミだな』
「やめろ」
『そうだよね。もう辞めればいいのに』
「やめろ！」
『所詮は失敗作だった訳だ』
「もう、止めてくれ！」
ラウラは頭を抱え座り込んでしまった。
「所詮、貴方はこんなものです。隊のメンバーも貴方を信頼などしていないのです」
「そんな訳はない！全員は・・」
「本当にそうですか？」
「！！！」
「人の心なんて誰にも分からない物。信頼してると断言できますか？」
「・・・・」

ラウラは何も言えなくなってしまった。
〈皆は私を信頼していないのか？確かにあいつの言うとおり表では悟らせない為にしているのかもしれん〉
「は～終わりましたね」
そのまま去ろうとした瞬間・・
「ああ、そうだろうな」
突然ラウラがしゃべり始めた。
「？？？」
「確かに私は信頼されていないのかもしれない。だがな、これだけは言える。
一夏とシャルロットだけは信じていると！」
「なぜそう言えるんですか？
所詮、人間は必要がなくなれば他人を簡単に裏切る。それなのに何故？」
「確かにこの世の中にはいるだろう。
だがあいつらはこんな私でも信じてくれると言ってくれた！それを私は信じたい！
何があっても！」
「・・・」
「来い！シュヴァルツェア・レーゲン！」
叫ぶと同時にシュヴァルツェア・レーゲンが展開されラウラを包みこんだ。
「さあ始めようか！？」
「・・・いえ、終わりです」
「何？」
「私がテストしたかったのは貴方がどんな状況になっても彼らを信じれるかという事です。
貴方は私が信じても良い存在のようでした」
「つまりどういう事だ？」
「合格です」

「そうか」
「それと、もう一つ言う事があります」
「何だ？」
「近い内にある出来事が起こります。
その時、彼は大きな選択を迫られます」
「一夏がか？」
「はい。その時彼に貴方達はしなければ
ならない事があります」
「それは？」
「それは貴方が考えて下さい」
徐々に体が薄くなっていった。
「分かった」
「期待していますよ」
そのまま消えてしまった。

「ここは？」
「あれ？ラウラどうしたの？」
「ああ、シャルか」
「もしかしてテストだったとか？」
「ん、まあな。お前はあったのか？」
「いや、まだ僕はないけど」
「そうか・・・シャルロット」
「ん、何？」
「お前は私を信じてくれるか？」
「何を当たり前の事を言ってるの？
勿論だよ！」
「そうか！」
こうしてラウラのテストは
終わりを迎えた。
シュヴァルツェア・レーゲンの言っていた

ある出来事とは何なのか？
大きな選択とは何なのか？
それは後々判明する。

第５２話　信じる心（後書き）

こんばんわ～
如何でしたか？
最近、話の構想考えるのが授業中で
当てられた時、間違えて怒られる・・・・
というのがありました。
ま、仕方がないですね。
感想も待ってます！
それでは～

第５３話　隣にいたい人

第三アリーナでは楯無とレイのテストが行われており
アリーナの地面は所々凸凹していた。
「もう！お姉ちゃん避けないでよ～」
「生憎だけど避けないと私死んじゃうから」
「きゃはははは！！」
レイは自らの能力で水を操りぶつけようと
当ててくるが楯無は自慢の身体能力でぎりぎりだが
全てかわしていた。
〜あの子普段は純粋で可愛いけどこういう
戦場ではあの純粋が一番怖いのよね〜
「ほ～ら、まだまだいっくよ～」
かなりの量の水が飛ばされてきた。
〜や、やばい。多すぎる！〜
「爆発～」
アリーナに爆音が鳴り響いた。
「きゃあ！」
その爆風により楯無は吹き飛ばされてしまった。
「くっ！」
「ほ～ら出血大サービスだよ～」
「！！！！！」
先程とは比較にならない程の水が飛ばされてきた。
〜う、嘘。あんなの避けきれないじゃない〜
「いっけ～」
レイが合図をするとともに大爆発が起こった。

「あっれ～？死んじゃったかな～？」
レイはニコニコと笑いながら言った。

「でっも～邪魔は嫌いだよ～？お兄ちゃん」
後ろを向くとアクセルフォームの白式を纏った一夏がいた。
「この世で一番なくしたくない
人を助けちゃ悪いのか？」
「さあ？」
「あ、ありがとう一夏」
「ああ」
「怪我は大丈夫なの？」
「ああ、まあな。それよりも厄介だな。あいつ」
「うん、あの水にかかっちゃうと
死んじゃうし拡散範囲が広すぎるから」
「ねえ、お姉ちゃん」
「何？レイちゃん」
「何でお姉ちゃんはそこまで頑張るの？」
「え？」
「だってそうでしょ？明らか強いのは私なのになんで
そこまで頑張るの？ねえ、どうして？」
「前にも言った筈よ？私は一夏の隣で戦いたい。
一夏ばっかりに守ってもらんじゃなくて
私も一夏を守れるくらいに強くなりたい！
だから今ここで折れるわけにはいかないの！」
「だったら私がここで折ってあげる！」
レイが水を放ってきたが雪羅のカノンにより飛ばされた。
「行け！楯無！俺がバックアップしてやる！」
「うん、お願い！」
楯無は一夏を後ろにつけ走り出した。
楯無に向かってくる水を雪羅のカノンにより
弾き飛ばし、その間に楯無がレイに近づいて行く。
「これで終わりよ！」
「！！！！！」

楯無がレイに辿り着き殴ろうとした時水の壁が現れた。
{あ、やばい}
「楯無！これを使え！」
一夏が雪片弐型を楯無に投げた。
「分かった！」
それを掴み水の壁を一閃し道を開いた。
「そんな！」
「行けえぇぇ！楯無ー！」
「あぁぁぁぁぁ！」
楯無が雪片弐型でレイを貫いた。

「負けちゃったか」
「レイちゃん」
「信じてたよ。お姉ちゃんが勝つって」
「ありがとう。これから一緒について来てくれるかしら？」
「うん！あ、それという事があったんだ」
「何かしら？」
レイが楯無の耳元で囁いた。
「彼はもうじき大きな選択を迫られるんだ。
その時にお姉ちゃんは皆と一緒に
彼にしなければならない事があるんだ」
「しなければいけない事って？」
「それはお姉ちゃん自身が考えて。じゃあね！」
それを最後にレイはいつもの待機形態に戻っていった。
「しなければいけない事・・・・・」
「楯無・・・」
「あ、一夏。ありが・・きゃ！」
楯無がお礼を言おうとした時突然
一夏に抱きしめられて最後まで言えなかった。

「い、一夏？」
「よかった。本当に無事でよかった」
「一夏・・」
「お前がいなくなったら俺はもう生きられない」
「大丈夫だよ。私は一夏の前から消えないよ」
「ああ、愛してる楯無」
「私も愛してる一夏」
アリーナで二人は誓いのキスをした。
一生離れない事を。

第５３話　隣にいたい人（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
最近は短めです。
理由はもう一つの連載作品を考えるのと
並行でしているので結構疲れる為
端折っています。
感想も待ってま～す。
それでは、さよなら～

第５４話　序章、終わりの始まり

数日後～
無事に簪、シャルロット、箒、ほかの専用機持ちも無事にテストを終え人格に認められて平穏な日常を過ごしていた。
この日までは・・・・

知られることのない会話～
「やっほ～皆久しぶり～」
「ええ、久しぶりね」
スコールは本当にうれしそうに笑いながら言った。
「そういえば影（ファウスト）」
「何かしらスコール？」
「貴方が言っていた心の闇は集まったかしら？」
「いや、まだもう少しという所ね。ちまちまといろんな奴の心の闇を暴走させて集めているもののやっぱりちまちまとしていても無理ね」
「ふふふ、やっぱりそうか～ならこの天才に任せなさーい！」
「へ～。で、何をするつもりかしら？」
「ふふふ、それはね・・・・」

場所は変わり昨日のＩＳ学園～
「は？国に呼ばれた？」
「うん」
部屋で一夏と楯無は寝る準備をしていると急に思い出したかのように楯無が言いだした。
「実は昨日ね、連絡事項があるからこっちに来てくれって」
「でも、それなら使者でも寄こせば」

「ん～そう言ったんだけどあまり聞かれたくない内容らしいの」
「ふ～ん。そう言えば明日に
学園の訓練機も一斉に点検日だったよな？」
「うん。・・・ねえ一夏」
「ん？」
「これって偶然よね？」
「ああ多分な」
「そうだと良いけど・・・」
それを最後に二人は寝むった。
二人仲良くベッドに入って。

翌日～
「おはよう諸君」
「「「「お、おはようございます」」」」
「おはようございま～す」
「「「「おはようございま～す」」」」
相変わらずの温度の差である。
「全員いますね～？それじゃあＳＨＲを始めますね～
皆さんも知ってるとおり今日は訓練機の
一斉点検日ですので
ＩＳの実習はすべて無くなりますので。
今日の連絡は以上です」

「は～実習が無くなるのって嫌だよね～？」
「だよね～結構、実習楽しみなのに～。
織斑君はどう思う？」
「ん？俺か？まあ、座学ばっかは確かに飽きるな」
「で～も～、おりむ～は天才だからいいよね～」

本音がいつも通りゆったりとした口調で尋ねた。
「ほんと、ほんと。織斑君て
今生きてて何が楽しい？」
「楯無とイチャイチャする事」
〜〜〜うわ〜ゾッコンだ〜〜〜
「でも、良いな〜好きな人と一緒にいれて」
「「「だね〜」」」
「お前らも可愛いからすぐに彼氏とかできるさ」
「「「またまた〜」」」
彼女たちはまんざらでもないようで
顔をほんのり赤くしていた。
チャイムが鳴ったので皆は戻っていった。

「今日はここまでだ。それとこの後に
集会があるから遅れないように
集合しろよ？」
「「「はい！！」」」
「じゃあ、委員長ごう・・そう言えばオルコットは
いなかったな。織斑！」
「へいへい。起立〜、礼〜」
「「「ありがとうございました！！」」」
授業が終わり全生徒がグラウンドにぞろぞろと集まりだした。
「では、これより集会を行います。
まずは校長先生からくんわを頂きます」
「はい、皆さん。こんにちわ」
「「「こんにちわ〜」」」
「皆さん元気がいいですね。
今日は一点だけお話があります。
皆さん・・・・

死んで下さい」
「「「「！！！！！」」」」
校長が言い終えたと同時に何機もの
ＩＳがグラウンドに降り立った。
「「「「きゃーーーー！！！！」」」」
次々とそのＩＳは生徒たちに襲い始めた。
「くそ！あのくそ校長どこ行きやがった！？」
〜それよりも一夏！〜
「ああ、行くぜ！」
〜〜はい！〜〜
「おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
一夏は走りながら鞘を抜き
光となって白式を纏いアクセルに変身した。
『白式、グレード・アップ。アクセル！』
「行くぞ！」
『スタートアップ！』
一夏がストップウォッチをスタートさせるとともに
高速で次々と破壊していった。
〜どういう意味だ？何故、代表候補生がいない
この時に限って襲撃なんか。
まさか、情報が流出してるのか？〜
「きゃあ！」
「！！！」
一人の生徒が連れ去られようとしていた。
「くそが！」
一夏は慌ててそっちに向かい

ＩＳの腕を切り落とし生徒を安全な場所にまで運んだ。
「大丈夫か！？」
「う、うん」
『タイムアウト。ディフォメーション』
白式が元の姿に戻ってしまった。
「ここは危険だ。避難しろ」
「うん、ありがと」
「さてと、続きと行こうか？屑ども」
一夏は戦いの中へ向かっていった。

「生徒の避難状況は！？」
「まだ、かなりの生徒が外に！」
「くそ！」
避難誘導にあたっていた千冬は舌打ちをした。
〜代表候補生もいない、訓練機もない。
このタイミングを奴らは計ってたのか！？〜
千冬は別の場所へと走り出した。
「お、織斑先生！？」
「すまん！山田君はそのまま避難誘導を！」
「分かりました！」

「うぉぉぉぉぉ！！」
一夏は全ての武装を使いＩＳに攻撃していた。
「くそ！いったい何機いるんだ！？」
〜一夏！後ろ！〜
「しまっ！」
一夏は刀で一閃され血液が舞った。
「が・・あ」
〜絶対防御がまったく効いていない？〜

「くそがぁぁぁぁぁぁ！！」
一夏はそれを気にも留めず一刀両断した。
「はあ、はあ」
〰一夏！今度は下から！〰
「な！」
突如、地面から次々と小型の刀が射出され
一夏はほとんどを喰らってしまった。
「ぐ！」
〰一夏！向こう！〰
「あ？・・まじかよ！」
避難誘導していた教師に向けて
一体が何発もミサイルを撃ち始めていた。
「くそがぁぁぁぁぁぁ！！！」
一夏は瞬時加速（イグニッションブースト）を使い
教師とミサイルの間に入り壁となって
全てのミサイルを受けた。
「織斑君！」
「行って下さい！ここは俺が！」
「分かったわ！」
『織斑君！』
オープンチャンネルから山田先生の声が聞こえてきた。
『全生徒の避難が終わりました！』
「りょ、了解」
今の一夏は大量の血を流しており
息も絶え絶えだった。
〰くそ！攻撃を受け過ぎた〰
一夏はその場に膝をついてしまった。
その瞬間を相手は逃さず大剣を構え
こちらに向かってきていた。
〰一夏！〰

{限界だ。動けない}
動けない一夏に大剣が振り下ろされた。
『織斑くーーーーん!!!』
オープンチャンネルに山田先生の
悲痛な叫び声が響いた。

第５４話　序章、終わりの始まり（後書き）

こんにちわっす！
活動報告でも書かせていただきましたが
アイディアが浮かばないので戦争編に行かせていただきます。それでは

第５５話　徐々に変わる心境

一夏は迫りくる痛みに目を閉じたが
その痛みは全く来なかった。なぜなら・・・・・
「遅えんだよ。織斑千冬！」
そこには暮桜を纏った千冬がいた。
「年上には敬語を使わんか。馬鹿もの」
「こんな戦場で言う事か？」
「それもそうだな」
「で？皆の避難は出来たんだよな？」
「ああ、教師も含め全員が完了している。それに代表候補生にも連絡済みだ」
「さいですか。じゃあ、行きますか」
「ああ、そうだな」
二人は立ち上がった。
「これが終わったらちょっと付き合え織斑千冬」
「！！！、ああ、分かった」
「行くぜ！！」
「ああ！」
最強の二人が目の前の大量のＩＳに向かっていった。

「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
千冬はブランクを感じさせない動きで
次々と敵機を破壊していった。
「一夏！コアは破壊しろ！」
「分かってる！」
一夏も雪羅のカノンを放ち次々を破壊していった。
「キリがねえな。後何機だ？」
「ざっと、１０ぐらいか」

まだ目の前には１０機のＩＳが立っていた。
「おい、織斑千冬」
「何だ？」
「少し、時間を稼げ。一撃で粉砕する」
「ほう。言うじゃないか青二才が」
「言ってろ。で？どうすんだ？」
「良いだろう。稼いでやる。ただ、学校は破壊するなよ？」
「・・・善処する」
千冬は一人、敵機に突っ込んでいった。
「行くぜ！」
一夏はブラスターのカードを取り出しスキャンした。
『白式、ハイパーアップ・ブラスター』
白式の姿が徐々に重装甲になっていった。
〜ふ〜。集中、集中〜
一夏は雪片弐型にエネルギーを溜め始めた。
「まだか！一夏！」
「もう少しだ！」
徐々に雪片弐型の刀身が光を帯びて大きくなっていった。
「出来たぜ！どけ、織斑千冬！」
千冬は一夏の言うとおり離脱し、
一夏はスタートした。
『スタートアップ！』
「喰らえ！これが最大出力の零月だぁぁぁぁぁ！！！」
一夏が刀を振ると同時に敵機は光に飲み込まれ
大爆発を起こした。

「はあ、はあ、はあ」
「やったか？」
「いや、一機まだ停止していない奴がいる」
一夏の言うとおりまだ一機だけ残っていたが

その一機は空に飛んで行ってしまった。
「逃がすか！」
「待て！」
千冬が追いかけようとするが一夏に止められた。
「何故だ！？」
「よく見ろ、バーカ」
「？？？」
千冬が上を見ると敵機がロープのような物に
縛りつけられたと同時に青い光と赤い光それに
大量の弾丸やミサイルに巻き込まれ最後には
水を纏った何かに蹴りを入れられ爆発粉砕した。
「来たか」
「はは！遅えよ！皆！」
そこには専用気持のメンツがいた。
「無茶を言わないでよ、一夏！」
「そうだよ！僕たち急に言われたし」
「日本から離れた場所からここまで来たんだ。
むしろ早いくらいだぞ？」
「「「「うんうん」」」」
「ああ、悪い」
「にしてみまた派手にやられたわね」
楯無はすでに馴れたような呆れたような顔で言った。
「ほう、更識今回は泣かないのか？」
「あ、あれは気が動転してて」
「ああ、そうか。皆がいるから泣けないと」
「そう何ですの？会長さん」
セシリアがニヤニヤしながら尋ねてきた。
よく見ると全員がニヤニヤしていた。
「べ、別にそう言う訳じゃ」
「じゃあ、その今にも

泣きそうな目は何？お姉ちゃん」
「こ、これは・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁん！！」
「「「「！！！！」」」」
突然、楯無が号泣しだした。
「だって、だって！皆がいる前で泣いたら
唯でさえ会長の権限が落ちてるのに
さらに落ちるじゃない！！」
〜〜〜〜もう、収拾がつかないんじゃ？〜〜〜
「お、お〜い。重症人を蚊帳の外に置くないでくれ〜」
「そうだったな。私が運ぼう」
「・・・・ああ、頼む。姉さん」
「ん？何か言ったか？」
「な、何もねえよ！」
「そうか」
そのまま千冬は一夏を背負い去っていった。

「ねえ、今一夏、織斑先生の事姉さんて」
「ああ、確かに言ったな」
「ようやく、直ってきたな」
「「「「うんうん」」」」
事情を知っている
全員は笑顔で頷いた。

知られることのない会話〜
「どうだったかな〜影（ファウスト）」
「流石は天才かしらね。闇がどんどん溢れてくるわ」
「大量の無人機に感知されない程の微弱な闇を
植えつけてＩＳ学園に送り込むことで
周りの心の闇を収拾するなんてね」

「そうね。それよりも準備はどうなの？二人とも」
「大丈夫だよ。もうすぐで軍団も完成する」
「こっちも最終段階に入ってるわ」
「ふふふ、そう。

第５５話　徐々に変わる心境（後書き）

如何でしたか？
それでは～
感想も待ってます。

第56話　start　of　the　war（前書き）

最終章の戦争編が始まり始まりです。
お楽しみください。

第56話　start　of　the　war

この会話はあの宣言が行われる僅か一時間前の事。
「ええ、始めましょう影（ファウスト）。戦争をね」
「じゃあ、もう始めるのね？」
「ありがとうね、エム」
「スコール、こちらの準備は全て整ったぞ」
知られることのない会話～

「一夏～今日どうする？」
「今日は久々の平和な日常を満喫する」
一夏の部屋では楯無がどこに行くかという事で話し合っていた。
「一夏が言うと妙に説得力があるわね」
「だろ？だから今日は一日寝る」
「ん～偶にはいいかもね。じゃあ、私も寝る～」
そう言い一夏の布団に入りこんできた。
「ふふふ、一夏あったかい」
「そうか？お前もあったかいぞ？」
そう言い合う二人の顔はキスが出来るぐらい近かった。
「一夏・・・・」
「楯無・・・・」
二人の距離がゼロになりかけた瞬間・・・
「一夏！大変だ！」
突然、千冬がドアを突き破って慌てて入って来た。
「どうかしたんですか？織斑先生」
楯無が尋ねると千冬は荒い呼吸を落ち着かせて言った。
「良いから二人とも来い！」
ひとまず二人は付いて行くことにして

大型のモニターがある食堂に走ってみると放送が始まっていた。
「こんにちは。哀れな人たち。
私は亡国機業（ファントムタスク）の幹部よ。
今日は貴方達に知らせがあるわ。
我々、亡国機業（ファントムタスク）は世界に宣戦布告をする！」
「「「！！！」」」
「この世界を我々が支配するために戦争を起こすわ。
信じられないかしら？なら証拠を見せるわ」
画面に映像が映った。
その映像は・・・
「な、何あれ？」
「嘘でしょ」
そこには人々が逃げ惑う様子と無人機が町を破壊しながら進んでいく映像だった。
「これで分かったでしょ？
ひとまず、そうね～主要国家とＩＳ学園は潰そうかしら？」
「「「！！！」」」
「ふふふ、もうそっちには無人機を送り込んでいるわ。
皆、楽しんでね～」
その言葉を最後に放送は終わった。
「ど、どうしよ！」
「ここも襲われるんだよね！？」
放送が終わると同時に生徒たちが騒ぎ始めた。
「一夏！」
「ああ、　ちょっと黙れやこらぁぁぁぁぁ！！！」
「「「！！！」」」
「お前らが騒いでも状況は変わんねえだろうが！
それなのに騒いでどうする！？」
「織斑の言う通りだ。全員、教室で待機し
指示を待て。これから教員で話し合う。

いいな！」
「「「は、はい！！！」」」
「それと専用機持ちは私と一緒に来い！」
それから緊急の会議が開かれた。
これからの事や生徒はどうするのかなど
時間は何時間にも及んだ

その頃代表候補生達は一夏のところに集まっていた。
「お前たちはどうなるんだ？」
「たぶん僕たちはいったん帰還命令が出ると思う」
「そうか・・・・」
その日は何も起こらず一日が経った。

翌日～
ＩＳ委員会は全世界に向けて警戒命令を発表した。
内容は家から一歩も外に出るなというものだった。
それから委員会は真っ向から奴らと闘うらしい。
その影響により一旦、候補生及び代表が緊急招集された。
学園に残ったのは一般生徒だけだった。
「一夏」
「何だ？」
「これから会議を行う。お前も来い」
「・・・分かった」

「ではこれより会議を行う！。まずは状況だが
奴らの言うとおり大量の無人機がこちらに向けて
向かってきている」
「「「！！！」」」
「その数は！？」
「約５０だそうだ」

「ご、五十も」
「それは良いとしてこの後はどうする。
こっちの戦力は学園にある訓練機に
専用機が三機だぞ」
「ああ、それも言う。ひとまず一般生徒だが
返す奴は返す」
「つまり残る奴は残らせるのか？」
「ああ、そうしないと、こちらの物資も無限じゃないんだ。
少しでも戦力になる者はこちらに残す」
「で、では学園にせめてきた奴はどうするのですか！？」
「それについては」
「それについては俺が言おう」
「織斑、案があるのか？」
「ああ」
「言ってみろ」
「奴らは何もここだけを攻撃するとは限らない。
日本に来た時点で奴らは破壊活動を行うだろうな」
「・・・・」
「だからそれを事前に阻止する」
「ほう、つまり？」
「こっちに来る前に俺が潰す！」
「しょ、正気ですか！？織斑君！」
山田先生が反論した。
「ええ、本気です。先生たちは万が一
俺が破壊し損ねた奴らを迎え撃って下さい」
「ですが！」
「良いだろう」
「お、織斑先生！？」
一気に会議室がざわつきは始めた。
当たり前である、何せまだ未成年の、

それに弟に任せるというのだから
「だが、私も付き合わせてもらおうか」
「え！」
目が点になった。
「貴様だけで全機つぶせるとは到底思えん。
だから私も付き合おう。暮桜とともに」
「・・・頼む」
「分かった。諸君！作戦は決まった！
我々二人で破壊する。諸君らは取り逃がした奴を
学園の訓練機をもって応戦しろ！
異議のある者は挙手をしろ！」
誰も手を挙げなかった。
「決定だな。ではこれより各々作戦準備を始めろ！」
「「「「はい！」」」」

一夏は今、一組にいた。
「よう、皆。元気か？」
教室は静かだった。
「お、おりむ～どうなったの？」
「ああ、これから報告する。
皆、よく聞いてくれ」
「「「「・・・・・・」」」」
「帰りたい奴は帰れ。残って学園を
手伝う奴は手伝え。だそうだ」
「おりむ～はどうするの？～」
「俺は残るさ。俺はやるべき事があるからな」
「やるべき事って？」
「お前たちを護る」
「「「！！！」」」

「俺は専用機を持ってるからな。戦えない奴の代わりに俺が戦う。安心しろ。
こんな馬鹿げた戦争はすぐに止めてやる。
そしたらさ、皆でクリスマスパーティーしようぜ」
一夏は笑顔で言うに対してクラスメイトは泣いている人もいた。
「私残るよ！」
「「「「！！！！」」」」
「そうか」
「私も～」
「私も」
次々と手が上がっていき１組はほとんど残る事になった。

「そうか。あいつらはほとんど残るか」
千冬は一夏の報告を聞き、悟っていたかのような顔をした。
「他の奴らは？」
「後は四組の奴らと二年と三年の整備課はほぼ残るそうだ。後はちりじりだな」
「そうか。なあ、この件についてどう思う？」
「何がだ？」
「コアの絶対数は決まっている。にも拘らず奴らは５０もの無人機を用意したんだ。つまり・・」
「あいつが関与していると言いたいのか？」
「ああ。そう思うしかねえだろ」
二人の頭の中にはある人物が浮かんでいた。
「そろそろ行くか」
「ああ、そうだな」
二人は上着を脱ぎ棄てＩＳスーツに着替えた。

外には訓練機を纏った教師陣達と
整備課の何人かが待機していた。
「織斑先生！私も行かせてください！」
「篠之ノか。お前はここにいろ」
「な、何故ですか！？」
「バーカ。考えろよ。お前も
それなりに実力はあるんだ。
ここにお前を残して戦力を控えさせておくんだよ」
「分かりました！」
「よし。ならばレーダーはフル稼働させていろ！
どこから来るかわからんからな！」
「「「「はい！！」」」」
「行くぞ、時間だ」
「ああ、行くか」
二人はそれぞれ展開し敵機のいる方向へと飛んで行った。

第56話　start　of　the　war（後書き）

こんばんわです。戦争編が始まりました。
感想もお待ちしております。
それでは～

第57話　50VS2

千冬と一夏は到達地点と思われる海上にいた。
「本当に良いのか？」
「何がだ？」
千冬が一夏に質問した。
「未成年であるお前がこんな最前線で闘わなくても良いんだぞ？」
「力を持ってるのに戦わないのは屑のする事だ」
「・・・・そうか。背中は任せるぞ」
「・・・ああ、任せろ」
『一夏！前方に反応がある！来るよ！』
「来るぞ！」
「ああ！」
目の前に無人機が見えてきた。
「俺の雪羅で牽制する！拡散射撃（スプレッド）！」
雪羅から極太のレーザーが発射されると同時に複数のレーザーに分裂し軍団を次々と破壊していった。
「貴様らは俺がここで止める！」
「私もいるぞ！」
千冬も参戦し次々と破壊していくが何機か通り過ぎて行った。
「そっちに行ったぞ！山田君！」
『任せて下さい！』
「うらぁぁぁぁぁぁ！！！」
「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
二人は次々と敵機を破壊していった。

「先生！北西の方角に反応を確認しました！」
「了解！」
「私が行きます！」
「お願いします！」
「次は南西！」
「私が！」
様々な方角に教師陣達がちりじりに散っていき
敵機を破壊しに向かっていった。

「おぉぉぉぉ！！！」
「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
二人はお互いの死角に向かってくる敵機を
それぞれ破壊していった。
それは熟練したペアでも難しい程の
完成率だった。
それは二人が兄弟だからだけではなく
お互いの実力が近いなので出来た代物かもしれない。
「零月！」
一夏は零月を広範囲に放ち同時に破壊していく。
それに対し千冬は的確に
零落白夜を当てていきエネルギーを一瞬で
根こそぎ奪っていく。
しかし、数が数なので徐々に
二人の体に切り傷が増えていく。
「くそ！」
「数が多すぎる！」
「弱音を吐くなよ！それでも教師か！？」

「ふん！貴様こそへばるなよ！」
二人は傷つきながらも戦っていく。
「うざい！アクセルで一掃してやる！」
「待て！ここはブラスターにしろ！一気に殲滅するんだ！」
「ちっ！分かったよ！」
一夏はブラスターのカードを取り出しスキャンした。
『白式、ハイパーアップ。ブラスター』
「行くぜ！」
一夏はエネルギーを一点に収束し始めた。
「私が時間を稼いでやる！」
「ああ、頼む！」
千冬は軍団に突っ込んでいき
破壊していく。
「出来たぞ！」
「わかっ・・な！」
千冬の足を無人機の一体が掴み発射できずにいた。
「くそ！」
すると一体が剣を千冬に降ろそうとしていた。
「脱出しろ！」
「無理だ！数が多すぎる！」
「止めろ、止めろ！」
そして剣が無残にも降ろされた。
「姉さーーーーーーーーーーーん！！！」
一夏の叫びが響いた。

千冬は襲ってくる痛みに目をつむったが
その痛みは一向に来なかった。
〔なぜ痛みが来ない〕
不思議に思ってると千冬の顔に何かが滴り落ちてきた。

何かと思い目を開けるとそこには・・・
「だ、大丈夫か?姉さん」
「い、一夏」
そこには何本もの剣を体で受け止めていた一夏がいた。
「な、何故?」
「さあな。気づくと体が動いてたかな?」
「い、一夏!」
一夏は千冬に倒れこんできた。
「悪い、少し肩借りる」
「あ、ああ」
『スタートアップ』
「行くぜ!・・・ってやば、腕が上がんねえ」
「私が支えてやる。お前はそれを撃て!」
「ああ、行くぜ!」
雪羅に溜められたエネルギーが放たれようとしていると
敵機の残りがスクラムを組み一点に最大出力の
荷電粒子砲を集め出した。
「喰らえ!!」
「「雪羅カノン超爆発(ハイパーイクスプロージョン)!!」」
雪羅のカノンと敵機の荷電粒子砲が
ぶつかり合い均衡していた。
「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」」
しかしその均衡はすぐに崩れ雪羅のカノンが
押し切って全ての敵機を吹き飛ばした。

「終わったか」
「ああ、大丈夫か?一夏」
「動けるのに時間がかかるな」
「一夏、さっき私の事を」
「何だおかしいか?姉さんて呼ぶのは」

「ふん！おかしくはないな」
「何泣いてんだよ馬鹿」
そう言う二人の目から涙が流れていた。
「帰ろうぜ」
「ああ」

その後二人が取り逃がした何機かは
学園の教師が無事に破壊し所々攻撃はされたものの
死傷者などは出なかったという。

知られる事のない会話～
「どうだった？」
「ん～微妙だね～大国ともなるとＩＳの開発も
進んでるからね～まだ時間はかかるかな？」
「それはつまり時間をかければ制圧できると
思っても良いのよね？束」
「うん！いいよ～この天才に不可能な事はな～い！」
「でも、日本にそんなにダメージを
与えれなかったのは少し意外ね」
「当たり前だ、スコール」
「エム・・・」
「あそこには姉さんとあいつがいる。
無人機ごときでは落とせない」
「そうね～束は日本以外の所に軍団を送り込んで頂戴。
今回みたいに一気に送り込まずに５体ずつぐらいで良いわ」
「おっけ～」
そう言い束は自室へと戻って行った。
「でも、スコールどうすんだ？」
「何がかしら？オータム」
「他の国はあいつに任せればいいが

日本はどうする？誰が行くんだ？」
「そうね～少し一夏（かれ）にも会いたいし
私とエムで行こうかしら」
「・・・・了解した」
「私はどうすれば良い？」
「貴方は影と一緒（ファウスト）に制圧して来て頂戴。
貴方なら出来るわ。期待してるわよ」
「ああ！任せろ！」
オータムは張り切って出て行った。
「さてと行きましょうか？エム」
「ああ」
そう言い二人は作業に戻った。
〔ははは！これで私の復讐が完成する！
会いたいよ。千冬姉（ねえさん）〕
エムは顔を邪悪に歪めながら笑っていた。

第57話　50VS2（後書き）

おはようございます。ケンです。
如何でしたか？それでは、さよなら～

第５８話　戻る絆、それぞれの戦い

無事二人は任務を遂行し学園に帰って来た。
一夏はすぐに医務室に運ばれ一命を取り留めた。
翌日、千冬は一夏の病室の前にいた。
〜こ、ここがあいつの部屋か・・・・
入っても良いのだろうか？
い、いやでもあいつはあの時私を
姉さんて・・・ふふふふ。
姉さんか・・・そう言われたのは何年ぶりだ？〜
千冬は一人で病室の前でニヤニヤしていた。
そこを通ったナース達は若干引いていた。
〜よし！入るぞ！〜
「い、一夏、入るぞ？」
「ど、どうぞ」

一夏ＳＩＤＥ
〜ここは・・・医務室か。
そう言えばさっき俺、あいつの事を姉さんて・・・・〜
一夏はもう一度、姉さんと小声で言うと不思議と気分が良かった。
するとドアがノックされた。
「い、一夏入るぞ？」
「ど、どうぞ」
千冬が病室に入って来た。
「そ、その大丈夫か？」
「あ、ああ」
その後、何分か静かな状態が続いたが
一夏が口を開いた。

「な、なあ」
「ど、どうした？」
「聞いても良いか？」
「あ、ああ」
「あの日の事なんだが・・・」
「！！！！」
あの日の事とは一夏が誘拐された日の事である。
「何であんたは俺を切ったんだ？」
「あ、あの時はそ、その闘っていた場所が
暗くてよく見えなかったのと急に
お前を楯にされて止められなかったんだ・・・
い、一夏？」
千冬が一夏を見てみると一夏は涙を
流していた。
「はは、良かった」
「な、何がだ？」
「姉さんは俺を憎くて切ったんじゃなかったのか」
「どういう意味だ？」
「姉さんが俺を切りかかって来た時俺、
若干意識があってそれで目を開けたらさ
鬼のような形相の姉さんが目の前にいて
その後は」
「もう良い」
千冬はそっと一夏を抱きしめた。
「私が悪かったんだ。暗かったと言っても
弟すら分からなかった私が悪かったんだ。
すまない」
「姉さん・・・俺も頭ごなしに拒絶してごめん」
「一夏」
二人は抱き合いながら泣き続けた。

ようやく叶った二人の願い。

翌日～
「おはよう、一夏」
「ああ、おはよう姉さん」
あれから二人は以前とは異なり笑顔で
あいさつを交わすほどになった。
〔ねえ、あの二人何かあったのかな？〕
〔さあ？ま、千冬様も嬉しそうだからいいんじゃないの？〕
〔だね〕
「そう言えば最近、皆を見ないけどどうしてんだ？」
「ああ、あいつらは今、自国でそれぞれ闘っている」
「そうか・・・さっさと終わらせるぞこの戦争」
「ああ、無論だ」
その頃、他国では・・・・

ドイツの場合・・・
今、ドイツでは激しい戦闘が繰り広げられていた。
「全員、一斉攻撃！！」
「「「「は！」」」」
何人もの軍人たちが対ＩＳ用の銃を使い
少しでも足止めしようと必死だった。
「行くぞ！クラリッサ！！」
「はい！隊長に続けーーーー！！！」
「「「おぉぉぉぉ！！」」」
ラウラを筆頭に無人機へと向かっていった。
「この国は貴様らなどにはやらせんぞ！！」

ロシア～
ロシアでも激戦が繰り広げられていた。
楯無を筆頭に自国の最大限の武力をもって
対抗していた。
「代表に続けーーーー！！！」
「「「「おぉぉぉぉぉぉぉ！！！」」」」
無人機は全部で五体襲ってきていた。
「きゃあ！！」
内の一体と闘っていたテストパイロットが
無人機の攻撃により吹き飛ばされ剣を振り下ろされかけていた。
「くっ！」
もうダメかと思い目を瞑るが目の前で爆発が起こった。
「だ、代表！！」
「大丈夫かしら？」
「え、ええまあ」
「さあ、立って。まだ終わっていないでしょ？
貴方も、この戦争も」
「はい！！」
そのパイロットは立ち上がり無人機へと向かっていった。
「ふ～簡単にはやらせないわよ！」
『行こう！お姉ちゃん！』
「ええ！」
楯無も武装を強く握りしめ
戦いへと向かっていった。

中国・イギリス・フランス、その他の国家でも
総力戦が始まっていた。
無論、日本も同じだった。
しかし、彼らは知らなかった。

彼女たちの存在を。

第５８話　戻る絆、それぞれの戦い（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
少し二人の仲直りが無理やりに感じるかもしれませんが
そこはスルーして下さい。
自分の頭ではこれが限界です（泣）
それでは、さよなら～

第59話　制圧完了

影（ファウスト）とオータムは中国の上空にいた。
「ここね、中国は」
「ああ、地図と照会した。ここだ」
「中々、上質な闇が渦巻いてるじゃない」
「当たり前だ。戦争が起これば憎しみだって増大する」
「ま、それもそうね。行きましょうか？」
「ああ」
二人は静かに降りて行った。

その頃、中国では～
「喰らえ！」
鈴を含めた代表候補生及び代表が集結し
無人機と交戦していた。
「これで最後だーーー」
鈴の双天牙月が最後の無人機を貫き爆発四散した。
「やるじゃない！」
「大丈夫ですか！？皆さん」
「ええ、貴方が頑張ってくれたお陰で何とか無事よ」
「い、いえそんな。私はただサポートしただけで」
「もう！そんなに謙遜しなさんな。
貴方は十分強いわよ」
「へへへ」
鈴は恥ずかしそうに頬を赤くした。
しかし、和やかな雰囲気はすぐに崩れた。
「み、見てあれ！」
「「「！！！！！」」」
一人の叫びを聞き上を向くとそこには

二人の人物がいた。
「貴方達は誰なの！？」
「私達は亡国機業（ファントムタスク）だ！」
「中国は貰うわよ？」
「幹部ね。貴方達を倒して本部のありかをはいてもらうわよ！」
再び戦いが始まった。

「喰らえ！！」
鈴が龍砲を放つが影（ファウスト）はそれを避け
黒い剣を呼び出し切りかかる。
「な、何なのよ！？その黒い剣は！」
「ふふふ、これは心の闇よ」
「心の闇？」
「そう。人がだれしも持ってる心の闇を
抽出し凝縮したもの」
「そんな物で何ができるのよ！？」
「良いわ。見せてあげる」
影（ファウスト）は黒い剣を一振りすると
黒い波動が衝撃波となり地面を砕きながら
鈴に向けて放たれた。
「な！なんて威力なのよ！？」
「やるじゃない。初見であれをかわすなんて」
「相手は鈴ちゃんだけじゃないわよ！」
後ろから中国代表がマシンガンを乱射してきたが
影（ファウスト）はそれを高速で動きかわした。
「むむ！あなた速いのね」
「ふふふ、ありがと。でも何人束になってかかってきても
無駄よ。私には勝てない」
「言うじゃない！だったら試させてもらうわよ！」

鈴は最大威力で龍砲を連射していく。
『代表！』
『何？鈴ちゃん』
『私がこいつの気を逸らしている間にあれを！』
『分かったわ！お願いね』
『はい！』
「作戦会議は終わったかしら？」
「これからよ！」
鈴は最大威力の龍砲を放ちながら
双天牙月を二つにして投げた。
〜これだけの攻撃があればどれかは喰らうはず！〜
「凄いわね。普通ならどれか一つは
喰らうわね。普通ならばね」
影（ファウスト）は周囲に闇の波動を拡散させ
全ての攻撃を落とした。
「う、嘘！」
「だから言ったでしょ？普通ならってね」
「何でそんな物で攻撃できるのよ！？」
「良いわ、教えてあげる。これは主に人の
憎しみで出来てるの」
「憎しみ？」
「そう。憎しみの根底にある物は憎んでいる対象を
破壊する事にあるわ」
「だから、そんな物で攻撃できる訳ね」
「そう、正解。理解が早くて助かるわ」
「そりゃ、どうも」
『まだですか！？代表！』
『もう少しよ！もうちょっと頑張って頂戴！』
『はい！』
「何であんた達は世界を支配しようと思ったのよ！？」

「ん～さあ？」
「は？」
「別に私は世界を支配とかは興味はないわ
ただ、私はこの世界を闇で染めるだけ。
それだけよ。彼女たちとはその過程が
同じ道だったから協力してるだけよ」
「そう。でも、ここで終わりよ！代表！」
「任せて頂戴！」
鈴がその場を離れると大きめのランチャーのようなものを
持った中国の代表がいた。
「へ～かなりのエネルギー量ね」
「喰らえ！これが中国最強の攻撃だ！！」
引き金が引かれると同時に超極太の
レーザーが発射され影（ファウスト）は飲み込まれた。
「はあ、はあ、はあ」
「代表！やりましたね」
「ええ、あれを喰らえばあいつも」
「ん～なかなかの威力ね～」
「「！！！！」」
そこには闇を体に纏わせた影（ファウスト）がいた。
「う、嘘・・・無傷だなんて」
「だから～言ったでしょ～貴方達ごときでは
絶対に勝てない。彼じゃないと。
ま、楽しませてもらったお礼にお返しよ！！」
影（ファウスト）が地面を蹴りつけたと同時に
辺りが黒に染められ吹き飛んだ。
「殺す気か！影（ファウスト）！」
「あら、それは心外ね、オータム。
私はちゃんと合図はしたわよ？」

「気付けるか！こっちも戦ってんだぞ！」
「ま、良いじゃない。ここはもう落ちたし」
「あのな！」
そこには戦っていた中国のパイロット達が倒れていた。
「あら？」
「どうかしたのか？」
「一人足りないわね～」
「別に良いだろ。もう用済みだしな」
「それもそうね。スコールに連絡ね」
『あら、もう終わったのかしら？』
「ええ、終わったわ。中国制圧完了よ」
『了解。よくやってくれたわ。
ところで国民は生きてるわよね？』
「ん～生きてるんじゃない？結構死んだけど。オータムの所為で」
「バ、バカ言うな！九割方はお前だろうが！！」
『はいはい。オータムもそこまでよ。まあ、大部分は
生きているわよね？』
「ああ、生きてるがどうするつもりだ？」
『ふふふ、お楽しみよ。そっちに無人機を送ってるから。
そいつらにデータを貰って頂戴』
「了解」
「分かったわ」
数分後、５体の無人機が連絡通り来た。
「ありがと。ふんふん。ははははは！！！
そう言う事ね！スコール！あなたって人は本当に
人間か疑うわ！！」
そのデータに書いてあったのは・・・・
その頃、逃げ伸びた一人とは鈴だった。

「ひぐ！ふぐ！代表、皆～」
実はあの時攻撃が行われる瞬間に
代表が鈴に伝言を送り攻撃が届かない距離にまで
鈴を投げ飛ばしていた。
それでも少しは喰らったが・・・
その伝言とは
『良い？鈴ちゃん。この事を日本に伝えて頂戴！
援軍を寄こせとは言わない。必ずこの戦争を止めて！！』
「ぐす！代表、皆、必ずこの戦争が終わったら
必ず助けに行くから！それまで待っててて！」
鈴は日本へと向かっていった。
仲間のため、そして国の為に。

そのころ日本では～
「な、何だと・・・」
「そ、そんな」
『もう一度言うわ。中国は我々、亡国機業（ファントムタスク）
が制圧したわ。貴方達に残っている選択肢は二つ。
一つはおとなしく投降して世界を我々に渡すか
もしくはそのまま戦争を続けることね。
ま、そうすると中国国民の命は無いものと思いなさい。
返事は今から二時間後にもう一度
放送を入れるわ。その時に声明を発表しなさい。
それで判断するわ。
もし一国でも否定的ならば・・・
分かってるわね。じゃあ、良い返事を期待しているわ」

世界は今、瀬戸際に立たされていた。
世界を渡すか、命を渡すか。

国家の返事は決まっている。
しかし、一人の男だけは
全員とは違っていた。
それは・・・・・

第５９話　制圧完了（後書き）

おはようございます！
ケンです。如何でしたか？
それでは、行ってきま～す。

第６０話　私が欲しいもの

今世界では選択を求められていた。
中国を捨てるか、世界を捨てるか。
答えは決まり切っていた。
ほとんどの国は人民の命をと言い
いとも簡単に声明を発表した。

ＩＳ学園～
「日本政府はなんて言ってんだ？」
「いや、まだ回答は来ていないがまあ、決まっているだろうな」
「・・・そうか」
「どうするんだ？一夏」
「悪いが俺は他の奴らとは違う」
「つまり？」
「このまま続ける」
一夏が発言した途端会議室が一気に荒れた。
「どういう意味ですか！？」
「皆殺しにするんですか！？」
ざわざわと口々に発言している為かなりうるさくなった。
「ちょっと、黙ｒ」
「うるさいぞ！！！」
「「「「「！！！！！！」」」」」
千冬の大声で一気に静かになった。
「こいつがそんなことをする筈がないだろう！！
最後までこいつの意見を聞け！！」
「・・・それでだな、あいつらは最後に
二時間は攻撃しないって言ってただろ？
だったらその二時間で中国を開放する」

「で、ですが人数の問題は！？」
「安心してください。助っ人を呼んでいますから」
「助っ人？」
するとグラウンドに何かが着陸した音が聞こえた。
「ようやく来たか」
「待たせたな！一夏」
「遅れてごめん！！」
自国で戦っていた代表候補生たちが集結していた。
「みなさんいつの間に！？」
「あの放送が終わった瞬間に一夏から
伝言が来たんです。自国が集結していたら
日本に来てくれって」
「ま、そういう事です。次の放送まで
あと１時間。その間に俺達が開放する！」

その後、一夏と候補生との会議が行われ
作戦が決まった。
「じゃ、行くか」
「「「「了解」」」」
すると目の前に一機のＩＳが不時着した。
「鈴！」
「お願い！みんなを助けて！」
鈴は泣きながら懇願した。
「任せろ。必ず解放してやる。行くぞ！」
「「「うん！！」」」

「良いか？さっき確認したが無人機は一つの地点に

集まっている。そいつらを」
「潰すってわけか」
「ああ、だが条件がある。必ず一撃で破壊しなければいけない」
「一撃で破壊しないと被害が及ぶもんね」
「ああ、じゃあ行くぞ」
「ええ」
『カウントを始める。5・4・3・2・1・GO！』
一夏の合図とともに一斉に飛び出し無人機を破壊しに行った。
それぞれ各機もてる最大の威力の武器をぶつけ
一撃で破壊していった。
「よし！出来たな」
「ああ、楯無以外は囚われている
パイロット達を救出してくれ」
「「「了解！！」」」
ラウラ・簪・シャルロット・箒は
パイロット達が囚われている
場所へと向かっていった。
「どうして私を残したの？」
「それは・・」
「お久しぶりね、織斑一夏！」
「こういう意味だ」
後ろに影（ファウスト）とオータムがいた。
「お前ら邪魔ばっかしてんじゃねえよ！」
「まさかこの状況で中国を助けに来るとはね」
「当たり前だ。そう簡単にこの世界は渡さねえよ」
「でしょうね。ま、貴方にさえ会えればそれで良いし
オータム！」
「何だ？」
「貴方はあの青髪の子をお願い」
「任せろ！！」

「楯無」
「うん、任せて！」
楯無とオータムは別の場所へと移っていった。
「じゃあ、俺らも場所を移してやるか」
「そうね」
二人も戦いの場所を移した。

楯無ＳＩＤＥ
楯無とオータムは人気の少ない場所にいた。
「始めようかしら？オータムさん」
「けっ！この前のかりは返させてもらうぜ！」
オータムが蜘蛛のような足を伸ばし楯無に
伸ばしてきたがそれを楯無は余裕でかわす。
「その攻撃は当たらないわよ？」
「それはどうだかな！」
すると足から小さな穴が開き、そこからありったけの
散弾が撃たれ楯無を襲った。
「凄いわね」
何発か当たりながらもどうにか、
避けるが残りの足からさらに散弾が放たれた。
「ひゃはははははは！！
どうだ！これはな亡国機業の
技術者に作らせたもんだ！」
そう言い剣を展開し楯無に向かって行った。
勿論、散弾は撃った状態のままで。
「その状態で避けられるか？ああ？」
「強くなったのね」
「その上から目線がうざいんだよ！
死んでしまえ！」
「でも、強くなったのは貴方だけじゃないわよ？」

「！！！」
地面から突然、水流が噴き出しオータムを包んだ。
「くそ！何だこの水は！？」
オータムはすぐに抜け出すが機体はずぶ濡れになっていた。
「ふふふ」
楯無が指をならそうとするとオータムが
突然、距離を取り出した。
「その技は喰らうかよ！」
「そうね。前のこの子ならその距離まで
下がられると効果が無かったわ。
でも、それは昔の話。今は違うわよ？」
指を鳴らすと、オータムの機体が爆発を起こした。
「がぁ！バ、バカな！何で！？」
「進化したのよ。この子もね」
「まさか、第二形態移行（セカンドシフト）したのか！？」
「ええ、前にね」
オータムは戦慄していた。
自分がどれだけ強くなっても
前に勝てなかった相手が進化し強くなっては
意味がない。
〈無理だ。勝ち目がねえ〉
「お、落ち着け！お前に提案がある！」
「？？？」
「お前、こっちに来いよ！そうすればその強大な
力を思う存分使えるぜ！私がスコールに
亡国機業幹部（ファントムタスク）に
迎え入れるように取り計らってやる！
そうすれば織斑一夏を殺しこの世界を
自分の物に出来るぜ！どうだ、最高だろう！？」
「馬鹿ね」

「え？」
「私が欲しいのは一夏よ。
それ以外なんて興味も湧かないわね」
「な、あ」
オータムはすぐさま逃げようとするが水に囚われ逃げ出せないでいた。
「外部でどんな事が起こっていようが
一夏に敵対する者は」
楯無は指をならしオータムを
包んでいた大量の水を一気に爆発させた。
「すべて潰す！」
そこに残っていたのは瓦礫とボロボロになったオータムだけだった。

第６０話　私が欲しいもの（後書き）

おはようございます！ケンです。
本日は学校より更新いたします！
いかがでしたか？
感想もお待ちしております。
それでは～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3426w/

インフィニットストラトス　改変物語

2011年11月10日13時05分発行